斬魔大聖
ざんまたいせいデモンベイン
DEUS MACHINA DEMONBANE
デモンベイン
機神胎動
原作：鋼屋ジン（ニトロプラス）
古橋秀之
角川スニーカー文庫

今行きます!
私が、そこを……照らします!
今行きます……今……今……!
――オーガスタ・エイダ・ダーレス

お嬢さん、紹介しよう。
鬼械神(デウス・エクス)“デモンベイン”だ。
――覇道鋼造

永劫(アイオーン)!
時の歯車　断罪(さばき)の刃
久遠(くおん)の果てより来たる虚無――
永劫(アイオーン)!
汝(なれ)より逃れ得るものはなく
汝(な)が触れしものは死すらも死せん!!
――鬼械神アイオーン

斬魔大聖デモンベイン

機神胎動

原作：鋼屋ジン（Nitroplus）

著：古橋秀之

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

DEUS MACHINA
DEMONBANE

CONTENTS

プロローグ　黎明軌道――永劫、天を翔ける　007
第一章　古都擾乱――霧の夜、光る目の野獣　021
第二章　胎盤都市――生ける街、生まれざる機神　091
第三章　邪神咆吼――神の国、終末の呼び声　187
エピローグ　魔人光臨――まなざすは決戦の刻　285
あとがき　295
解説　鋼屋ジン　299

CONTENTS

プロローグ　黎明軌道──永劫、天を翔ける
第一章　古都擾乱──霧の夜、光る目の野獣
第二章　胎盤都市──生ける街、生まれざる機神
第三章　邪神咆吼──神の国、終末の呼び声
エピローグ　魔人光臨──まなざすは決戦の刻
あとがき
解説　鋼屋ジン

DEUS MACHINA
DEMONBANE
CHARACTERS
覇道鋼造
世界一の大富豪として知られる謎多き男
エイダ
『週刊新世紀』記者にして自称〝科学の騎士〟
クロフォード
覇道鋼造に仕える忠実な執事
アル・アジフ
1000年の時を超えて魔と戦う魔導書
アズラッド
魔術結社D∴D∴への復讐を誓う魔術師
ニアーラ
エイダの全活動をサポートする使用人

プロローグ

黎明軌道——
永劫、天を翔ける

皓こう々こうと、ただ皓々と。

月光に照らされる荒こう野やを貫つらぬく鉄てつ軌きに、一本の貨物列車が走っていた。

蒸気機関車、石炭車、貨物車。わずか三両から編成されるこの小列車は、この時代、一八九×年の技術が許す最高速度・時速百五十キロで疾しつ走そうしていた。

アリゾナの名もない駅から、ミスカトニック州アーカムシティへ。通常の便が七日を掛かけて渡わたる大陸横断鉄道を、この列車はわずか二日で走破する。

昼夜を問わず、経済効率を問わず、他たのあらゆる便に優先して走るこの列車のことを知る人間は、奇き妙みようなことにほとんど存在せず、その積荷の内容を知る人間はもっと少なかった。

──実際、人間でない者のほうが多かった。

+

極ごく秘ひの積荷を抱だいて走る超ちよう特急貨物列車の、前方約二十キロの位置──厳密にはその上空に、人ならぬ生き物の集団があった。

単に人でないばかりか、それらはこの時代には存在し得ない生物、中生代の翼よく竜りゆうに酷こく似じしていた。しかも、古生物学的に想定され得るいかなる種よりもその体は大きく、その飛行速度は速かった。瞬しゆん間かん的には、件くだんの蒸気機関車をも追い抜ぬくことが可能だろう。地上最速に類する生物と言えた。

翼竜は数十頭の群れを成して飛行していた。すばやく柔じゆう軟なんなその群れを構成する点ドツトのひとつひとつが、翼よく長ちよう十五メートルに及およぶ怪かい物ぶつなのだ。それはあらゆる者を恐きよう怖ふさせる、魔ま竜りゆうの軍勢だった。

しかし今、彼らは―彼ら自身が―恐怖していた。

彼らは追われていた。はるか後方から、恐怖の源が異常な速度で迫せまりつつあった。

翼竜の群れを追い立てているものは、巨きよ鳥ちよう。翼竜の何倍もの大きさを持つ、鋼はがねの巨鳥だった。

鋼の翼つばさは雲を斬きり裂さき、大気を斬り裂き、この世の理ことわりそのものを斬り裂きながら、あり得ない速度で巨きよ体たいを推進し、そして、あり得ない角度で急上じよう昇しようした。

瞬間、月が翳かげった。

上空からの轟ごう音おんと衝しよう撃げき波はが、翼竜の群れの隊列を崩くずした。

はるか高空で群れを追い越こした巨鳥は、その進路を塞ふさぐように急降下し、地響きを立てて空中に着地した。

―鳥ではなかった。

鋼の翼を広げ、鋼の腕うでを組み、鋼の足で宙を踏ふみ締しめて立ちはだかるそれは―鋼の巨きよ人じん。

〝永劫アイオーン〟の名を持つ、機械の神だった。

+

（逸はやるな、アズラッド）

魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】は、己おのが主あるじに告げた。

（妾わらわとアイオーンは不ふ朽きゆうにして不ふ滅めつなれど、汝なれ自身は生身の人間にすぎぬ。一いつ瞬しゆんでもそれを忘れたならば、汝は破は滅めつする）

「ああ、分かっている」

　──鬼械神デウス・マキナの召しよう喚かんは、巨きよ大だいな力と同時に、巨大な危険をももたらす。

〝死霊マスター・秘法オブ・ネクの主ロノミコン〟アズラッドは、その事実を身を以もつて理解している。

　今この瞬間にも、全身の神経に幻げん痛つうにも似た異様な感覚が疾はしり、頭ず蓋がいの内側には自らの魂たましいが蚕食される音ならぬ音が反はん響きようしている。人外の論理によって駆く動どうする鋼の巨体との同化は、徐じよ々じよに、だが確実に術者の心身を蝕むしばみ、死と狂きよう気きの淵ふちに追い込んでいくのだ。

　しかし、それを知りながら、なお──

　アズラッドはさらなる力を求め、両手にヴーアの印を結び、新たな術式を編んだ。

　力を与あたえよ！

　力を与えよ！

　力を与えよ！

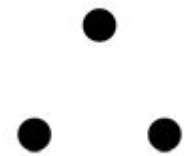
　アイオーンの鋼の両手が、空中に一対ついの巨大な刀かたなを鍛え上げた。

　炎ほのおをまといながら顕けん現げんした灼しやく熱ねつの刀身は、ゆるやかに発光する呪じゆ紋もんをその表面に残し、急速に冷れい却きやくした。ウルタールの賢けん者じやの名を冠かんした武具にして法具、〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟だ。

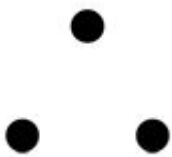
「□□Ia! Ia!」

「Ia! Zs-awia!」

　奇妙に人間めいた叫さけびを上げ、翼竜群が殺さつ到とうした。そのさまはまるで、巨鳥に挑いどみ掛かる羽虫の群れだ。



　されど、侮あなどるなかれ。〝D　　D



ダークネス・ドーン〟の翼竜は、ただの空飛ぶ蜥蜴とかげではない。呪じゆ力りよくを帯びたその爪つめやくちばしは、分厚い鋼板を貫つらぬき、引き裂き、最大の蒸気船をも群れを成して沈しずめてしまうのだ。

　アイオーンは中空を踏み締め、両りよう腕うでを交差しながら、ふたつの偃月刀を肩かたにかつぐように構えた。鋼の全身にさらなる力がみなぎり、黒い刀身に浮うかぶ呪紋が光量を増す。その光、その熱、その唸うなり──アイオーンの中ちゆう枢すう術式〝アルハザードのランプ〟は、術者の魂を燃料として、周囲の空間に対する超物理的な影えい響きよう力りよくを発生させるのだ。

　鋼の巨体が超ちよう常じようの威い力りよくを孕はらんで板いた撥条ばねのようにたわみ、次の瞬間、ふた振ふりの刀を振り抜いた。刀身から伸のびた長大な呪力の刃やいばが、一度に数体ずつの翼竜を斬きり裂き、密なる群れを四つに割る。

　群れが動どう揺ようし、統とう率そつが乱れた。

　アイオーンはそこに、鋼の翼つばさを広げて斬り込んだ。突とつ進しんし、回転しながら、輝かがやく偃月刀を縦横に振るう。斬

り、斬り、ひたすらに斬り──死の空中舞ぶ踏とうを彩いろどるかのように、周囲には赤黒い血の華はなが何重にも咲さく。

突とつ如じよ、翼竜の群れが四方に散った。

アイオーンへの攻こう撃げきをあきらめたか──いくつかの隊を盾たてに、もういくつかの隊を陽動にし、残る一群が急速に降下する。

その行く手の地上には、一点の光が移動していた。蒸気機関車の前照灯だ。ひと筋の黒こく煙えんを地上に流しつつ、三両編成の貨物列車が走行していた。

アイオーンは偃月刀を振りかぶった。刀身の呪紋が投とう擲てき用の印形へと書き換かわる。

（──捨て置け、アズラッド！）

アズラッドはアル・アジフの叱しつ咤たを無視した。

ひと振り、そしてもうひと振り、偃月刀が翼よく竜りゆうの群れに投げ込まれた。光の尾おを引いて回転するふたつの刃は、まるで生き物のように飛び回り、翼竜の体を当たる端はしから斬り裂き、血しぶく肉にく塊かいに変える。数秒のうちに、二十体以上の翼竜が斬り裂かれ、地に落ちた。

しかし、一体を打ち漏もらした。最後の翼竜はさらに速度を上げ、列車に向かう。

アズラッド＝アイオーンは鋼はがねの翼に力を込めた。翼はまばゆく発光し、唸りを上げ、アズラッドの霊れい力りよくを超常的な推進力へと変える。アイオーンは最後の翼竜に向かって爆ばく発はつ的に加速した。

だが、距きよ離りがありすぎる。アイオーンが追いつくより早く、翼竜は呪力を帯びた後こう肢しの爪を振り立て、列車に躍おどり掛かった。

その時──

貨物車の屋根をぶち抜ぬいて、鋼の拳が飛び出した。

巨大──あまりにも巨大。人間の身長を倍する大きさを持つその拳は、アイオーンのそれと比べてさえ、無骨で荒あら削けずりな印象があった。積まれていた貨物車との比率は滑こつ稽けいなほどだ。前ぜん腕わん部一本と貨物車一両が、ほぼ同じ大きさなのだ。

つまり、この列車はただ一本の〝腕うで〟を運ぶために走っていた──ということになる。

「Khcie, EeeerOooooh!!」

憎にくしみか、恐おそれゆえか。翼竜は奇き怪かいな雄お叫たけびを上げ、拳につかみ掛かった。

いや、つかみ掛かったのは拳のほうだ。鋼の五指をいっぱいに広げ、飛び込んできた翼竜の胴どう体たいをその掌てのひらに握にぎり込み、ひと息に握りつぶす。

「□□!?」

アイオーンは空中に急停止した。

その鋭えい敏びんな目が、石炭車の上に立つひとりの男を捉とらえていた。

年ねん齢れいは四十過ぎといったところか。右手で帽ぼう子しを押さえ、左手には革かわ表びよう紙しの書物──おそらくは魔ま導どう書しよ──を開いている。

男は空を見上げ──

+

──汽笛の尾を引いて、列車は地平線の彼方かなたへと去った。

（アズラッド、限界だ。術を解け）

「……ああ」

アズラッドは印を結び、機神封ふう印いんの口こう訣けつを呟つ

ぶやいた。輝く令辞コードがアイオーンの全身を駆かけ巡めぐり、機体の物質化を司つかさどる術式を解体、圧縮し、わずか数十行の呪じゆ文もん列に変えて魔導書アル・アジフのページの中に封印した。

革表紙がぱたりと閉じられ、封帯に錠じようが下りた。

天を衝つく鋼の巨きよ体たいは文字通り魔法のように消え去り、星降る荒こう野やには、魔導書を携たずさえた青年──アズラッドの姿のみが残った。

アズラッドは深く息をついた。アイオーンを顕現させていた時間はわずか数分にすぎないが、その間に消費された体力と霊力の量は、彼の生命を脅おびやかすに足るものだった。

（休息を取れ）

「……まだだ」

アズラッドはふらりと歩き出した。行く手にあるのは、翼を斬り裂さかれ、落下した翼竜の一体。アズラッドは巨きよ大だいな翼竜の傍かたわらに立つと、右手にヴーアの印を結んだ。

（もう術は使うな）

その言葉を無視し、アズラッドは呪文を詠えい唱しよう。空中からバルザイの偃えん月げつ刀とう──アイオーンが振ふるったものと瓜うり二ふたつの、しかし人間サイズのそれを抜き出した。

アズラッドの暗い瞳ひとみが、翼竜の顔を見下ろした。

巨大な皮ひ翼よくに対し、翼竜の胴体は意外と小さく、せいぜい牛馬程度の大きさだ。頭部は前後に長い特徴的な形状をしているが、その目は妙みように人間じみている。よく見れば、肩かたのあたりの筋肉の造りも妙に人間くさい。

その肩に偃月刀が突つき込まれ、翼竜は悲鳴を上げた。

黒い刀身の呪じゆ紋もんが目まぐるしく印いん形けいを変えると同時に、翼竜の体にも奇怪な変化が生じ始めた。翼が縮み、尾が縮み、胴どうが縮み手足が縮み、長い頭部が縮み──それは瞬またたく間に禿とく頭とう・全ぜん裸らの男の姿になった。アズラッドが偃

月刀を使い、〝変身〟の術式を解かい呪じゆしたのだ。

肌はだは黒く、唇くちびるは厚く、しかし、いわゆる黒人種とは微び妙みように異なっている──男は表の世界に知られるいかなる人種でもなく、鳥類と爬は虫ちゆう類るい、そして人と猿の中ミツ間シン種グリ族ンクの醜しゆう悪あくな部分をこね合わせたような外見を有していた。刃やいばによる激痛が、その表情をさらに醜みにくく歪ゆがめている。

アズラッドはその苦く悶もんのさまを、氷のようなまなざしで見み据すえながら問うた。

「ロブディはどこだ」

だが、男は答えない。禍まが々まがしい、呪文めいたうめきを繰くり返すのみだ。

「……Ia……Ia……Zs-awia……Ia……」

彼らの信しん奉ぽうする異界の神〝ズアウィア〟への賛歌──しかしアズラッドにとって、それは耳みみ障ざわりな音の羅ら列れつにすぎない。聴ききたいことは、そんなことではない。

「おまえたちの頭首はどこにいる」

と、その時──男の姿がさらに変形した。全身の筋肉が異様な蠢うごめきを見せ、目や口から細い触しよく手しゆが飛び出した。

アズラッドは無表情のまま呪紋の印形を書き変え、偃月刀にさらに魔ま力りよくを込めた。灼しやく熱ねつの刀身が、男の変形を押さえつつ、更さらなる苦痛をその肉体に注ぎ込む。

「D∴D∴の幹部、ラアル・ロブディは──どこにいる！」

「……I……a……Iaaaaaa……!!」

──その時、アズラッドの手元に、また別の奇怪な現象が発生した。

魔導書の錠がひとりでに開き、風に吹ふかれたページが空中に散らばった。ページはその場に小さな竜たつ巻まきのような渦うずを作り──数瞬後にはひとりの小こ柄がらな少女の姿を形作った。

　少女―魔導書【アル・アジフ】の化け身しんは、アズラッドの腕うでに手を置いた。

「これ以上は無む駄だだ」

　アズラッドはアル・アジフを見やると、無表情のままに偃月刀を引き抜ぬいた。

　男の輪りん郭かくがどろりと崩くずれ、のたうつ触手と粘ねん液えきの塊かたまりへと変わった。この怪かい生物こそが、彼らの本ほん性しようなのだ。

「……I……a……」

　触手の狭はざ間まにあった発声器官から最後のうめきを漏もらすと、怪生物はぶるりと震ふるえ、その動きを止めた。

「汝なれの戦いには無駄が多い」

　アル・アジフはアズラッドの顔を見上げ、咎とがめる口調で言った。

「―小者を深追いしすぎる」

　アズラッドは無言を以もつて応こたえた。

　自分の行動に非合理な面が多々あることは認めていた。現に今も、D∴D∴の竜人を追ってここまで来たものの、結局は無む駄だ足あしということになった。

　だが、アズラッドは復ふく讐しゆう者しやだった。復讐とは根本的に非合理な行こう為いだ。

　その想おもいを読んだのか、アル・アジフは言葉を続ける。

「命を惜おしんで長らえろとは言わぬ。されどアズラッド、定てい命めいの者よ。その限られた命を徒いたずらに浪ろう費ひするならば、汝の復讐は成らぬと知れ」

　アズラッドはうなずいた。

「分かっている」

「……ならば、よい」

　アル・アジフの小さな手が、アズラッドの左手を取った。

　バラバラと紙束の舞まう音を立て、少女は再び一冊の魔ま導どう書しよに変じ、主あるじの左手に収まった。

魔導書をコートの懐ふところに収め、アズラッドは歩きだした。魔ま術じゆつによる体力強化にも限界がある。手近な街で休息する必要があった。

──目の前の線路に沿って、東へ行くか、あるいは西へ行くか。

怨おん敵てきへの手て掛がかりを見失った現在は、どちらでも大差はないが──アズラッドは、先ほどの奇き妙みような貨物列車のことを思い出した。

ラアル・ロブディが配下の竜人をかき集めて襲しゆう撃げきしようとしていたもの、あれは──

「……アイオーンのほかにも、鬼械神デウス・マキナがいるのか？」

呟つぶやくような問いに、アル・アジフは応じた。

（『いるのか』と問われれば、『いる』と答えよう。妾わらわのほかにも力ある魔導書は存在し、そのうちのいくつかは鬼械神デウス・マキナを擁ようしている。だが、先ほどのあれがそうなのか、と言うなら──）

アル・アジフは考えをまとめるように、一いつ拍ぱくの間を置いて答えた。

（──術式の究極たる鬼械神デウス・マキナを名乗るには、あまりにも粗そ雑ざつにすぎる）

「Ｄ∴Ｄ∴はなぜ、あれを狙ねらっていたと思う」

（さて……奴やつらにとって重要な意味を持つ魔術的アーテイ工芸品フアクトの類たぐいなのかもしれぬが……あるいは、狙われていたのは列車に乗っていたあの男のほうかもしれぬ。わずかに魔ま術じゆつ師しの気配がした）

アズラッドはうなずき、石炭車の上に立つ男の姿を思い起こした。

目が合った瞬しゆん間かん、男はアイオーンに──いや、アズラッドに向かってわずかに帽ぼう子しを持ち上げ、にやりと笑った。不敵にして快活。夏の陽ひ差ざしのような、陽性の笑えみだった。

──アズラッドはわずかに顔をしかめた。

闇やみの世界に生きる彼にとって、それは不快な明るさだった。

それでも、これはひとつの手掛かりではある。

アズラッドは東へと──列車が去った方向へと、足を向けた。

行く手の空が、白み始めていた。

第一章 古都擾乱——霧の夜、光る目の野獣

ひどい霧きりの夜だった。

イーストエンドの貧ひん民みん街がいはガス灯の灯あかりもまばら、重い曇りの晩ともなれば、自分の足元もおぼつかない。その日は街頭商の姿も早々に消え、通りには下水の悪あく臭しゆうと犬いぬ猫ねこの死体、それに街がい娼しようの姿がちらほらと見えるばかりとなった。

〝短足ディック〟は嫌きらわれ者の飲のん兵べ衛えだった。脚は短いが手は早く、酔ようとすぐにナイフを振ふり回した。その日も、安物のジンを二、三杯ばい引っ掛かけるともう誰だれにも相手にされず、悪態をつきながら店パブを出た。よたよたと家路を行くその後ろ姿は、貧ひん相そうな家か禽きんの類たぐいを連想させた。

通りの一角で、ひとりの街娼がディックに声を掛けた。象のように太った女だった。ディックが見たままの感想を述べて袖そでにすると、象女はすれ違ちがいざま、吐はき捨てるように言った。

「このアヒル野や郎ろう」

その言葉はディックにとって、逆げき鱗りんそのものだった。

「なんだと、このアマ……！」

後先考えず、ディックがナイフを抜ぬいた、その時──

ガチャッ……。

曲がり角の向こうから、なにか金属的な物音が聞こえてきた。

ディックと象女は、思わず顔を見合わせた。

ガチャッ……。

ガチャッ……。

　騎き士しの亡ぼう霊れいを思わせるその音は、だんだんとこちらに近づいてくる。

「おい、ありゃいったいなんの音だ……」

「……怪かい物ぶつだ、怪物だよ」

　象女が怯おびえた声で言った。

「あたしの友達がもう何人も見てるんだよ。なんでも、動物園から逃にげ出したアフリカのゴリラが、テムズ川に棲すみついたんだって」

「馬ば鹿か、ゴリラが川なんぞに──」

　不意に、あたりが明るくなった。

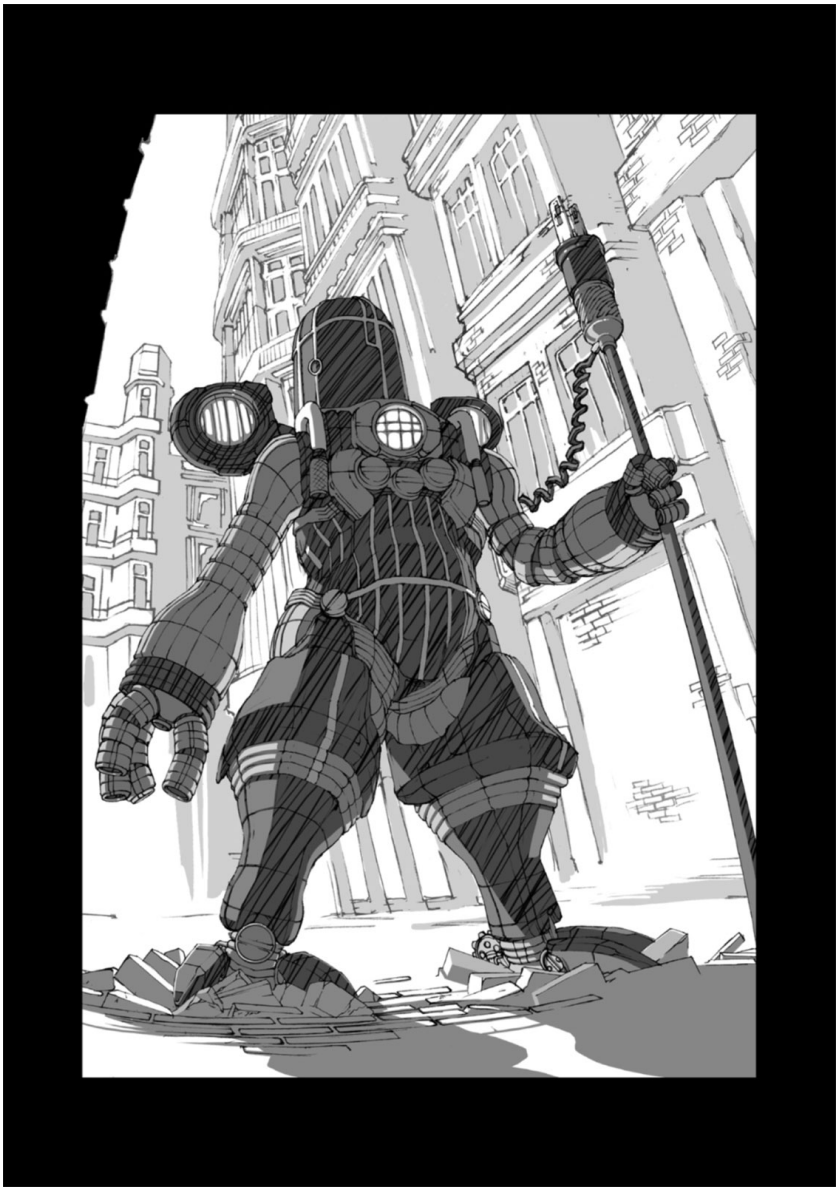
　巨きよ大だいな光る目がふたつ、夜よ霧ぎりの中に浮うかび上がっていた。

　光る目の怪物はずんぐりとした大きな人型で、手には長い竿さおを持っていた。また、ガチャガチャという足音と同時に、全身から羽虫のような奇き妙みような音を立てていた。

　ガチャッ。

　怪物は手にした竿の尻しりを石いし畳だたみに突つき、奇妙にひび割れた声で言った。

『我は〝科学の騎士〟なりィ～～』



「ぎゃあああ！」

　象女は悲鳴を上げた。

「出た！　ゴリラだよ！　〝潜せん水すいゴリラ〟だよ‼」

　怪物は訂てい正せいした。

『ゴリラではなくて〝科学の騎士〟なりィ～～』

　がちゃり──怪物は手にした竿を突とつ撃げき槍そうのように構え、その先せん端たんをディックに向けた。

『そこな凶きよう漢かん、ただちに武器を捨てるべしィ～～。さもなくばァ～～……』

　竿の先端から伸のびた二本の金属線の間に、バチッ──と、火花が散った。

「や、やる気か、この野郎ッ!?」

　ディックはナイフを前に構えた。腰こしが引けていた。

　ガチャッ。

　怪物が一歩踏ふみ出した。

「ひえッ──」

　象女は巨きよ体たいをひるがえし、狂きよう象ぞうの突とつ進しんのごとく駆かけ出した。

「あッ!?　ま、待て！」

　ディックはナイフを手にしたまま、象女の後を追った。

「待てこのアマ──俺を置いていくなあッ!!」

『武器を捨てるべしィ～～』

　ディックの後を追って、〝科学の騎士〟を名乗る怪物がガチャガチャと駆け出した。

　象女も〝短足ディック〟も、そして怪物も、みな、意外と足は速かった。中でも一番の駿しゆん足そくは象女で、あっという間に角を曲がって見えなくなった。

　幸か不幸か、残る二者、ディックと怪物の速度はほぼ等しかった。

ガッチャスッチャ、ガッチャスッチャ、ガッチャスッチャ──両者は追いつかれも引き離はなされもせず、同じ間合いを保ったまま、いくつもの通りを駆け抜けた。

しかし、ついに──ガシャガシャン！

石畳のわずかな段差につまずいて、怪物は派手に一回転し、仰あお向むけに転がった。

その目の光が、ふっと消えた。

「ひゃああ──！」

〝短足ディック〟は振り返りもせず、泡あわを食ったアヒルさながらの態ていで、霧の彼方かなたに消えていった。

+

怪物は亀かめのように手足をじたばたと動かした。巨大な背はい嚢のうを背負っているため、自力では起き上がれないのだ。

『ニアーラ！』

怪物が叫さけぶと、使用人姿の女が小走りに駆け寄ってきた。歳としはおよそ三十前。肌はだは黒く、眼鏡めがねを掛け、両手にバケツと工具箱を提さげている。

『ニアーラ、起こして、起こして！』

「はいはい」

ニアーラと呼ばれた使用人は、怪物の〝槍やり〟を梃て子こに使い、その体をひっくり返した。

怪物は両手をついて身を起こし、石畳の上に座り込んだ。そして、指先で自分の頭部──潜水服に似たヘルメットを指差した。

『あ、開けて、開けて！』

「はいはい」

　ニアーラは工具箱から小型のレンチを取り出すと、怪物の首回りのボルトを手早くゆるめた。分厚いヘルメットを外すと、中からもわっと湯気が上がった。

「ぷはあっ！」

　湯気の中から現れたのは、十七、八歳の少女だ。真っ赤な顔をして、ふいごのように息をついていた。

「は、排はい熱ねつと換かん気きに、若じやつ干かん改善の、よ、余地があるようです」

「はいはい、そのようで──あと、頭の周りに詰つめ物をしたほうがよござんしょうね」

　転んだ時にヘルメットの内ない壁へきにぶつけたのだろう、少女のこめかみには青あお痣あざができていた。

　ニアーラはバケツの氷水でタオルをしぼると、ぞんざいな手つきで少女の顔をぬぐった。

「いたた、もっとやさしく、やさしくなさい！」

「はいはい──お嬢じよう様さま、アイスクリームは？」

「いただきましょう」

　ニアーラは氷水の中から密閉容器を取り出すと、ふたを開け、スプーンをそえて差し出した。少女は無骨なグローブでそれを受け取ると、にこにこと笑いながら食べ始めた。

　その間、ニアーラは少女の背後に回り、断線した照明装置に応急処置をしている。

「あら、おいしい！　この味──レモンの果か汁じゆうを入れたのね！」

「よくお分かりで」

「ふむん！　ニアーラ、あなたってアイスクリーム作りの天才ね──

あっ、いたたたた」

　スプーンを絶え間なく口に運んでいた少女が、その手でこめかみを押さえた。打だ撲ぼくではなく、アイスクリームによる頭痛だ。

「ゆっくりお食べなさいな」

　ニアーラの助言を聴きいているのかどうか、少女はひと缶かんのアイスクリームを平らげると、ふう、と満足げに息をついた。

「明日はイチゴのジャムを入れてください」

　ニアーラは工具をしまいながら応こたえた。

「はいはい、承知しました──それじゃ、今日はもうお帰りで？」

「とんでもない！　まだまだ夜は暗く、長いのです」

　ブゥーン、と、全身から電動機の音を立て、少女はガチャリと立ち上がった。

「ニアーラ、科学の真しん髄ずいとは『不断の前進』にほかなりません」

「はいはい、お嬢様はまったく、科学精神の塊かたまりでございますね」

「その通り！」

　少女は電極つきの竿さお──電でん撃げき槍そうを石いし畳だたみにトンと突つき、それから、蓄電背嚢バッテリー・サックの上に固定された、怪かい物ぶつの目を思わせるアーク灯を光らせた。

「そして、その精神こころを以もつて夜の闇やみを照らし、市民の安あん寧ねいを守ることこそが、人呼んで〝科学の騎き士し〟こと、このオーガスタ・エイダ・ダーレスの使命なのです！」

「みなさん〝潜せん水すいゴリラ〟と呼んでらっしゃいますが」

「それが問題です」

　エイダは口を尖とがらせた。

「いったい、どこをどうすればゴリラが出てくるのかしら。それに〝潜水〟って？」

「それは多分──」

　ニアーラは〝騎士〟のヘルメットを固定しながら言った。

「この電動服姿モーター・スーツが〝潜水服を着たゴリラ〟みたいに見えるからじゃないですかねえ」

+

「〝潜水ゴリラ〟！　〝潜水ゴリラ〟！　テムズ川の怪物〝潜水ゴリラ〟がまた現れたよ！」

　号外売りの少年が、声を張り上げて通りを小走りに駆かけていく。

　──本紙記者に対し、目もく撃げき者しやのエレナ・ファンティン夫人は以下のように語った。

「ええ、ええ、あたしゃ見たんですよ。確かに見ましたとも。身みの丈たけは三メートル、いや五メートルはありましたよ。皿みたいに大きな目をびかびか光らせて、地じ獄ごくのケダモノみたいな唸うなり声を上げて襲おそい掛かってきて、それから──ああ、恐おそろしい！　目の前の旦だん那なをつかみ上げて、頭からバリバリ食っちまったんですよ！」

　なお、ロンドン動物園はこの事件について「ゴリラ、オランウータンほか大型の類るい人じん猿えんが飼育場を脱だつ走そうしたという事実はない」とコメントしている──

「……誤解もはなはだしいわ」

抱かかえていた数紙の新聞をばさりと降ろし、フリート街の通りに面したカフェのテーブルに着いたエイダは、読みかけの一紙を持つ手をぷるぷると震ふるわせた。ちなみに現在の服装は、帽ぼう子しと眼鏡めがね、それに小さな鞄かばんを身につけた、令れい嬢じようの普ふ段だん着ぎ風。この可か憐れんな少女が、かの〝潜水ゴリラ〟の正体であると、はたして誰だれが知るだろうか。

何者かが、背後から新聞を覗のぞき込んだ。

「―お嬢さん、怪物に興味があるのかい？」

エイダは振り向きざまに答えた。

「いいえ、ちっとも！」

「ほう―？」

エイダの勢いに目を丸くしたのは、奇き妙みような風ふう体ていの男だった。

日に焼けた東洋人で、話す言葉はアメリカ訛なまり。ロンドンの街にはそぐわない、ラフなシャツに革かわの帽子―ガンベルトと拍はく車しやをつければ、カウボーイと言っても通りそうだ。

「―では、なぜそんな記事を熱心に読んでいるのかな？」

そう言いながら、男は丸くした目を今度はいたずらっぽく細め、帽子を持ち上げて挨あい拶さつした。歳としはおそらく四十過ぎだが、笑うと十歳は若く見えた。

「私が読んでいるのは〝怪物〟ではなく〝事件〟についての記事です」

エイダは小気味よく挑ちよう戦せん的な口調で応じた。

「そもそもこの世に〝怪物〟などというものは存在しません。探求心と合理精神の欠けつ如じよが、路地の暗がりに魔ま物ものの姿を幻げん視しさせるのですわ」

「なるほど」

男はうなずいた。

「〝雑草〟という名の植物がないように、〝怪物〟という名の存在もない。君が惹ひかれるのは怪かい奇きそのものではなく、迷信の闇の向こうにある真実である──といったところかな」

「その通り！」

　意を得たり、という表情で、エイダは人差し指を立てた。

「で、ええと、あなたは……？」

　男はエイダの向かいの席に腰こし掛かけた。

「〝肝っ玉ハーデイコーディ〟。友人はそう呼ぶよ」

「私がそう呼ぶことも、お許しいただけます？」

「可愛かわいいお嬢じようさんに、お茶を一いつ杯ぱいおごらせていただけるなら」

「あら、素す敵てきなご提案ですけど、それにはひとつ問題点がありますわ」

　店員を呼び止めるコーディに、エイダが言った。

「──私、アイスクリームのほうが好きですの」

　注文の品を待つ間、エイダは五紙の新聞を一度にテーブルに広げ、目を通し始めた。一面記事から経済欄らん、社交欄、眉まゆ唾つばのゴシップ記事まで、なめるように読み込んでいく。

「ずいぶん勉強熱心だね──学生さんかい？」

　コーディの問いに、エイダは顔も上げずに答える。

「記者です」

「記者？」

「ええ、新聞記者。『週刊新世紀』紙のダーレスと申します。世を啓けい蒙もうする立場にある者が、自ら学習を怠おこたらないのは当然の──あっ、来た来た、いただきます！」

　エイダは新聞を押し退のけ、運ばれてきたグラスに顔を突つっ込

むようにしてアイスクリームを食べ始め──ふと、コーディの視線に気づいた。

「……なにか？」

「いや、アイスクリームが本当に好きなんだな、と思ってね」

「それはもう」

　エイダはスプーンを休まず口に運びながら、

「アイスクリームは脳へ巡めぐる血液を冷れい却きやくし、かつ、思考活動に必要な糖分を補給します。まさしく人造の知ち恵えの実とも言うべき、優すぐれた〝文明的食品〟ですのよ──あっ、いたたたた」

「なるほどね。文明は痛みを伴ともなうというわけだ」

　エイダは目を閉じ、左手をこめかみに当てながら、（その通り！）とスプーンを振った。

　その時、時計台の鐘かねが正午を告げた。

「あっ、いけない！」

　エイダは撥条ばね仕じ掛かけのようにぴょんと立ち上がった。

「どうしたね？」

「取材です！　一時から英国科学振しん興こう協会でミスター覇道ハドウの講演会が──アメリカの鉄道王〝覇道鋼こう造ぞう〟はご存じ？」

「ああ、ええと……確か、アリゾナの金鉱でひと山当てて大金持ちになったとかいう」

「三十点！」

　エイダはぴしゃりと言った。

「その表現は、かの人物の一面しか表してはいませんわね。鉄鉱、石炭、石油、その他の諸貿易！　ニューヨーク市場におけるその天才的な投機活動を語らずして──」

「ご高説はけっこうだか、急いでいるんじゃないのかね」

「そうでした」

　エイダは上着のポケットから懐かい中ちゆう時計を取り出した。

「おかしいわ、ベルをセットしておいたのに―」

　エイダは口を尖とがらせて時計の文字盤ばんをにらむと、顔の横で二、三度振ふり、作動音を確かめるように耳に当て、そして、

　ジリリリリ―‼

「ぎゃあっ⁉」

　突とつ然ぜんの大だい音おん響きように、思わず時計を放ほうり出した。

「ほう―懐中時計にベルを仕込んであるのか」

　コーディはテーブルの上でけたたましく鳴り続ける時計を拾い上げ、裏、表と観察したのち、つまみをひねって音を止めた。

　胸むな元もとで帽ぼう子しを握にぎり締しめたエイダが、大きく息をつきながら言った。

「お、音量は充じゆう分ぶんなれど、動作の確実性に若じやつ干かん改善の余地があるようです」

「しかし、アイディアとしてはなかなかだ。少し改良すれば、売り物になるかもしれないな」

「あら、それじゃあ今のうちに特許を申しん請せいしておかなくちゃ」

　コーディの差し出した懐中時計を受け取ると、エイダは鞄かばんをたすき掛がけにし、スカートの裾すそをつまんで一礼した。

「ごちそうさまでした、コーディさん！」

　そして、カフェの脇わきに停とめてあったローヴァー自転車にひらりとまたがり、ハンドルにつけられた小さなレバーを引く。すると、後輪に取り付けられた電動機が羽虫の群れのような音を立てな

がら始動し、自転車をだく足ほどのスピードで推進した。

「では、ごきげんよぉ――ぅ！」

　片手で電動自転車を操作し、空いた手で帽子を押さえながら、エイダは馬車と歩行者の往来する通りをあっと言う間に駆かけ抜ぬけていった。

「……ほう」

　楽しげにその姿を見送るコーディに、

「旦だん那な様、こちらにおいででしたか」

　―と、背後から声が掛かった。

　コーディは振ふり返りもせずに答える。

「すまない、クロフォード。ほんの散歩のつもりが、つい興が乗ってしまってね」

　クロフォードと呼ばれたのは、執しつ事じ風の出いで立ちをした巨きょ漢かんだ。老人と言っていい年ねん齢れいだろう。禿はげ上がった頭の脇に残る髪かみは白はく髪はつ、あごにたくわえた鬚ひげも雪のように白い。また、いったいいかなる経歴を経てきたのか、その顔にはいくつもの傷きず跡あとが走っている。中でもひときわ大きいのが、左目を潰つぶして頬ほおに至る刃は傷きず。そのためかどうか、残った右目の眼光の鋭するどさは常人の比ではない。

　刃は物もののようなその眼光が、ふと和やわらいだ。

「元気なお嬢じょうさんでございましたな」

「好みのタイプだね」

　クロフォードはコーディの軽口に、右の眉まゆだけで応こたえた。

「そろそろお時間でございます。お車を回しますか」

「いや、もう少しゆっくりしよう」

　コーディは脚あしを組み、エイダの残していった新聞をばさりと広げた。

「『覇道鋼造、遅ち刻こくする』。『彼は自らの時間を管理する科学的装置──例えば、時刻を知らせる機能を有する携けい帯たい秘書とも言うべき新型時計──の必要を痛感した』。……新商品のいい宣伝になるとは思わんかね？」

+

　講演会場に三十分遅おくれで現れた覇道財ざい閥ばつ総そう帥すい・覇道鋼造は、壇だん上じようから非礼を詫わびると、口上代わりにさっそく新型時計のアイディアの売り込みを始めた。その厚顔な態度に、居並ぶ聴ちよう衆しゆうの一部分は眉をひそめ、大部分は苦く笑しようし、そして、それら全員が彼の次のひと言を待った。とにもかくにも、目の離はなせない男なのだった。

　講演のテーマは『〝解かい析せき機関〟の可能性について』。

　覇道鋼造のこのたびの訪英の目的は、数学者チャールズ・バベッジの遺のこした機械式計算機の設計図とそれに付ふ随ずいする諸権利を遺族から買い取ることにあった。

　バベッジの計算機〝解析機関〟は、英国政府から一万ポンド以上もの資金援えん助じよを受けながら技術的な見積もりの甘さから完成には至らず、最終的に計画が放ほう棄きされたという経けい緯いを持つ。半世紀も前に見捨てられたこの機械の設計図に対し、覇道が差し出した額は五万ポンド。机き上じようの空論に大枚をはたいて、この不可思議な山師はなにをしようというのか──聴衆の好こう奇きの視線を集めながら覇道が示したのは、しかし、〝パンチカードによる情報管理〟や〝機械的統計処理〟などといった、ごく平へい凡ぼんな構想にすぎなかった。

「──つまり、この先進的な機械装置が完成すれば、最も優ゆう秀しゆうな事務職員百人分にも当たる働きを示すというわけです」

　覇道がそう締めくくると、聴衆のひとりから意見が上がった。

「それなら、事務員を百人雇やとうほうが安上がりなのでは、ミスター？」

「おお──なるほど！」

　覇道はポンと手を打ち、

「それは盲もう点てんでした。そのアイディア、五十ポンドで売っていただけますかな？」

　人々は苦笑し、そして納なつ得とくした。覇道構造は凄すご腕うでの相場師としての顔のほかに、〝道化じみた好こう事ず家か〟という一面をも持っていた。自動車や飛行船などといった新しん奇きな乗り物で飛び回るかと思えば、インドやアフリカの未み踏とう地ちに鉈なたを振るって分け入り、そうかと思うと、色物じみた技術者や芸術家の後こう援えん者しやとして多額の資金援助をする──今回の件も、つまるところ、そうした道楽の一いつ環かんなのだろう。考えてみれば、〝機械式計算機〟などという代しろ物ものは、いかにも覇道が好みそうな玩具おもちやではないか。

　その後、機械式計算機の技術的・経済的展望についての質疑応答を経て、講演会は終しゆう了りようした。

　会場を引き払はらう人の群れのざわめきを聞きながら、恰かつ幅ぷくのよい紳しん士し──英国科学振しん興こう協会の会長が覇道の手を握にぎった。

「たいへん興味深いお話でした、ミスター覇道」

「いや、お恥はずかしい。私は金かね勘かん定じようのほうが専門でして──」

　そこに、

「──おとぼけがお上手ですのね、コーディさん」

「おや──？」

　ネクタイを緩ゆるめながら会長の相手をしていた覇道は、客席にただひとり残る人物を見とめた。

　新聞記者の腕わん章しようをつけ、胸をそらし、脚あしを大きく

開いて仁に王おう立だちになったその少女──オーガスタ・エイダ・ダーレスに対し、覇道は笑えみを含ふくみながら言った。

「おとぼけとは、なんのことかね」

「さあ、まだ分かりません──しかし、解析機関の用よう途とが、先ほどおっしゃったことだけとも思えません。計算機をただ計算に使うなんて、覇道鋼造のすることとは思えませんもの。ええ、もう騙だまされませんとも！」

　そう言って、エイダは筆記具を構え、覇道をまっすぐに見上げた。眼鏡めがねの奥で、まるで獲え物ものを狙ねらう子こ猫ねこのように、大きな目が生き生きと輝かがやいていた。

「取材はこれからですわ。新型時計のアイディア料代わりに、なにか面おも白しろいお話がうかがえるのではないかしら？」

「お嬢さん、勉強熱心はたいへん結構だが、質問の時間は終わりだよ」

　会長がやんわりと言った。が──

「ふむ」

　覇道はにやりと笑った。

「──クロフォード、このあとの予定は？」

　壁かべ際ぎわに立っていた隻せき眼がんの巨きよ漢かんが、一歩踏ふみ出した。覇道の執しつ事じ、クロフォードだ。

「会長とのお茶会でございます」

「よし」

　覇道はお仕着せのスーツとネクタイをクロフォードに押しつけ、代わりに薄うす汚よごれた帽ぼう子しを受け取った。そして、会長の手を取って握あく手しゆしながら、

「申し訳ありませんが、急用を思い出しました。協会への寄付につきましては、執事に言づけていただけば、ご期待に添そえるよう最大限の努力をいたします。では失敬！」

　と、からりと笑いながら帽子を持ち上げる。無礼な物言いの中に、不思議な愛あい嬌きようがあった。

　覇道はエイダに目配せをすると、足早に出口へと向かった。

「えっ──あ、し、失礼します！」

　エイダは会長に一礼すると、その後を追っていく。

　呆あつ気けにとられた会長が、覇道の去った出口とクロフォードの顔を見比べた。

　クロフォードは右の眉まゆをわずかに動かすと、ゆっくりとうなずいた。

「お話をうかがいましょう」

+

　覇道鋼造がエイダを連れて行った先は、ロンドン最大の観光名所にして世界最大の博物館、大英博物館だった。

　入り口のイオニア式列柱の間を通りながら、覇道は言った。

「さて──お嬢じようさん、私がなぜこの場所を選んだか分かるかね？」

「ええと、ひょっとして……」

　エイダはしばし逡しゆん巡じゆんすると、上うわ目め遣づかいに覇道を見上げた。

「……ロゼッタ・ストーン……？」

　覇道がうなずくと、エイダは胸の前で勢いよく手を組んだ。

「──〝ヒエログリフの機械的翻ほん訳やく〟！　言語活動を一種の代数学に見立て、算術的手順によって処理する──あれは卓たく越えつした科学的発想でしたわ！」

エイダが言っているのは、覇道が昨年アーカムシティで行なった公開実験のことだ。

覇道鋼造の指揮するチームは、ロゼッタ・ストーンの寸すん分ぶん違たがわぬイミテーションを使い、かつてフランスのシャンポリオンが解読に成功したその碑ひ文ぶんを、わずか数時間で再度翻訳した。

その訳が正確であることは検分役として招かれたエジプト学者によって確かく認にんされたが、この実験において重要なのは、覇道もその部下も、誰だれひとりとしてロゼッタ・ストーンに刻印された文章の内容を理解してはいなかったという点だ。彼らはただ、カードに引き写した神聖文字ヒエログリフを分類し、規則化された手順にしたがって並べ替かえたにすぎない。

「適切な辞書と手引きマニユアルさえあれば、特別な知識や才能がなくとも翻訳作業は可能である」

──それが、覇道が示した結論だ。

続いて覇道が言ったとされる言葉を、エイダは口にした。

「『究極的には、〝翻訳者〟は人間である必要さえない。例えば訓練された動物、例えば歯車を組み合わせた機械──』」

そこまで言うと、エイダは指をぱちりと鳴らした。

「──解かい析せき機関！　解析機関を翻訳作業に使うのですね!?」

覇道は答えの代わりに小首をかしげ、にやりと笑った。エイダはさらに言葉を続けた。

「でも、それだけではないはずだわ。覇道鋼造が、百人の事務員ではなくあえて高価な機械を選せん択たくする理由……それは──ふむ──〝速度〟かしら？　電信網もうでつながった世界各国の最新ニュースの把は握あく、現地への指示、時には外国語による契けい約やく書しよの作成──ふむん！　それらの作業がすべて機械的に加速されるとなれば、ビジネス上の大きな利点となりますわね。産業革命に次ぐ〝通信革命〟といったところかしら」

「いい着眼点だ。確かにそれもある」

と、覇道は答えた。

「蒸気機関によって産業が機械化・高速化された現代、商売の足を引っ張っているのは我々のろまな〝人間〟だからね。機械に任せられることは、どんどん任せてしまうべきだ。それに……機械ならば死ぬこともない」

「はい？」

エイダはきょとんとした顔で覇道を見上げた。

「翻訳で人死にが？」

「あ……いやいや」

覇道は頭を掻かいた。

「つまり、商売の規模が大きくなると、情報交こう換かんもひっきりなしでね。通訳に過労死されても困るというわけさ」

覇道はエイダから目をそらし、足早に歩き始めた。

「―では、本物のロゼッタ・ストーンの前で翻訳手順を説明してあげよう」

「はあ……はい」

なにかはぐらかされたような形で、エイダは覇道の後に続いた。

と―博物館の順路を行く覇道の足が、ふと止まった。

「どうしました？」

エイダは覇道の視線の先を目で追った。

展示場の片かた隅すみ、巨きょ大だいな石柱やレリーフの狭はざ間まに隠かくれるようにして、それはあった。

それは、人の腿ももほどの小さな石柱―いや、石像だった。翼つばさをたたみ、直立する鳥―あるいは蝙蝠こうもりのような生き物を、荒あら削けずりな彫ちよう刻こくで示しているようだが、同時にどこか非生物的ないびつさがある。

標札には〝マナウス神像〟という名めい称しようと、この像が半年前に南米アマゾン川流域最大の都市マナウスで発見された旨むねが簡潔に記されていた。

材質は玄げん武ぶ岩がんだろうか、暗色の地じ肌はだの上に鮮あざやかな紅あかい塗と料りようがべったりと塗ぬられ、全体的には、生いけ贄にえの血を浴びた邪じや教きようの神像といった風ふ情ぜいだ。その姿はあまりにも禍まが々まがしく、あたかも石像に穿うがたれた眼がん窩かを通して、太古の暗黒神にこちらを覗のぞき込まれているような感覚さえ覚える。

反射的な恐きよう怖ふ感かんに、エイダは思わず息を呑のんだ──が、さらに大きく息を吸うと、その息を勢いよく鼻から抜ぬいた。

「実に素そ朴ぼくな意い匠しようですわね。このように単純な立体にすら〝死〟や〝恐きよう怖ふ〟の影かげを見み出いだしてしまうとは、人の心というものはまったく──」

そう言いながら、彼女は同意を求めて覇道の横顔を見上げた。だが──

覇道鋼造は石像を凝ぎよう視ししていた。その表情は険しく、彼の身の回りに常に漂ただよっていた余よ裕ゆうのようなものが、そっくり削そげ落ちていた。

「……リベル・レギス……！」

その、呪じゆ文もんめいた言葉を覇道が口にした瞬しゆん間かん、

──ざわり──

と、場内の空気が変わった。暗く、冷たく、禍々しく……いや、そう感じたのはエイダひとりかもしれない。周囲の観客はなにも気づかない様子で、軽口を交かわしながら順路を進んでいる。まるで、件くだんの神像と覇道鋼造、そしてエイダの三者のみが、違ちがう次元に隔へだてられたかのようだ。

否いな──そこにはもうひとりの人物がいた。十メートルほど離はなれた位置から、暗いまなざしがこちらをうかがっていた。

黒いコートに黒いシルクハット。手にはステッキ。一見、英国紳

しん士し風の出いで立ちだが……アラブ人か、あるいはインド人か、濃こい褐かつ色しよくの肌はだをしている。

　コートの男は帽ぼう子しを目ま深ぶかに直すと、観客と展示品の陰かげにまぎれて見えなくなった。

そして―

魔ま法ほうが解けたような感覚と共に、周囲のざわめきが蘇よみがえった。

「あ―」

エイダは覇道を見上げた。

「ええと……今の方は、お知り合い？」

「さて……」

覇道は男の去った先を眺ながめながら答えた。

無ぶ精しようひげの口元に、再び笑えみが浮うかんでいた。

先ほどまでの、お気に入りの生徒の相手をする教師のような表情ではない。剣けん呑のんな雰ふん囲い気きすら漂わせるそれは、猛もう獣じゆうの笑み、闘とう士しの笑みだった。

覇道はふいにエイダに向き直った。

「お嬢じようさん、すまないが急用を思い出した。デートはここまでだ」

「え、その……取材です」

「楽しい取材だったよ。では、ごきげんよう！」

覇道は帽子を取って挨あい拶さつすると、後も見ずに歩き出し、そして、手近な警備員を呼び止めた。

「君、このフロアの責任者を呼んでくれ―」

+

数分後、エイダはフロアの主任を捕つかまえ、覇道の話を聞き出した。

「まったく、アメリカ人ってのは、なんでも金で買えると思ってるんでしょうかね」

　と、主任は皮肉めいた口調で言った。

「はあ、買うって……あの石像を？」

　エイダが聞き返すと、主任はうなずいた。

「たとえ小石ひとつだろうと、この博物館の展示品を買おうってことは、大英帝てい国こくの威い信しんを買い取ろうってことですよ。仮にあの御ご仁じんが世界一の大金持ちだったとしても、そりゃあ無理ってものです」

　──自分が追い返した人物が文字通り〝世界一の大金持ち〟であることを知ったら、この男はどんな顔をするだろうか。

　そんな考えをおくびにも出さず、

「ええ、まったく。実に嘆なげかわしいことですわね」

　と、エイダが相あい槌づちを打つと、主任は得心顔でうなずき、さらに言葉を継ついだ。

「それにしても、最近はああいうのが流行はやりなんでしょうかね……同じ石像を買いたいって人間が、他ほかにもいまして」

「え──？」

　エイダの脳のう裏りに、先ほどの、暗い目をした男の姿が浮かんだ。

「それはひょっとして……帽子を被かぶったアラブ人？」

「ああ、多分それです」

　主任は答えた。

「でかくてまっ黒な召めし使つかいを何人も連れた、得体の知れん奴やつでしたよ。……いや、帽子は被ってたかな？」

+

「と、博物館職員は語った……と」

　タイプを打ち終わると、エイダは大きくひとつ息をつき、デスクの前で腕を組んだ。

「事件の匂においがするわね……！」

「―お嬢様」

　背後からのニアーラの声に、エイダは振り向いた。

「この部屋では編集長とお呼びなさい」

『週刊新世紀』紙の編集部は、ダーレス邸ていの一室にあった。部員は編集長エイダと、特別顧こ問もんニアーラのふたりきり。エイダの書いた記事をニアーラがチェックし、これも屋や敷しき内の印刷室で百部ほど刷り上げ、近きん隣りんのパブやクラブに無料で配布している。エイダの自じ称しよう〝記者活動〟は、周囲の住民には〝ダーレス家の令れい嬢じようの道楽〟として認められているのだった。

「はいはい、それじゃ編集長」

　と言って、ニアーラは丸めて持っていた青写真をタイプライターの横に広げた。撥条ばね仕じ掛かけを利用した、ヘルメットの半自動開閉機構だ。

「今朝いただいた電動服モーター・スーツの改修案ですけどね」

「なにか問題が？」

「この蝶ちよう番つがいの取り付け位置ですと、背はい嚢のうに当たってしまいますよ」

「あら本当だわ」

　エイダは青写真を自分の前に引き寄せ、鉛えん筆ぴつで書き込みを始めた。

「ええと、それじゃあここの部分にスライド機構をつけて、と──」

「……それとお嬢じよう様さま、じゃなくて編集長」

　エイダが先ほどまで打っていたタイプ紙の原げん稿こうをめくりながら、ニアーラは言う。

「また綴つづりが間ま違ちがってますが」

「え、どこ？」

　エイダは図面に没ぼつ頭とうし、顔も上げずに答える。

「Ｃ、Ｈ、Ａ、Ｍ、Ｐ、Ｏ、Ｌ、Ｌ、Ｉ、Ｏ、Ｎ。シャンポリオンのＬはふたつが正解でございますよ」

「シャ、ン、ポ、リ……ふむん、分かったわ。直しておいてくれる？」

「ものぐさはいけません。ご自分で直さなけりゃ覚えられませんよ、編集長」

「……　　～～」

　振ふり向いたエイダが、宿題を受け取る学生のように原稿を受け取った時、

　ジリリリリ……‼

　懐かい中ちゆう時計のベルが鳴った。

「あら、もうこんな時間！　続きは明日にしましょう」

　そう言ってエイダは立ち上がり、ふたりは暗い長い廊ろう下かをぱたぱたと小走りになりながら、一階の倉庫に向かった。

広い屋敷に住んでいるのは、エイダとニアーラのふたりだけだ。亡父、ダーレス卿きようの遺した資産は少なくなかったが、エイダの暮らしぶりはごく質素なものだった。

エイダは一いつ般ぱん的な贅ぜい沢たくには興味がなかった。

そもそも、昼は新聞記者、夜はロンドンの街を守る〝科学の騎き士し〟、という極めて公的かつ多た忙ぼうな二重生活においては、私的な時間というものがほとんどないのだ。

―もっとも、そう思っているのは本人だけで、実際には、彼女の行動はすべて道楽だと言えなくもない。

「早くなさい、ニアーラ！」

「はあ、そんなに急がなくても、誰だれが待っているわけでなし―」

階段を一段飛ばしで駆かけ下りながら、エイダは言った。

「ロンドンが私を待っているのです！」

そして―

「こちらかあちらか、どちらかに専念なさったほうがよろしいんじゃないですかねえ。毎晩毎晩せわしないったら」

整備場を兼かねた倉庫の奥から、台車に乗った電動服を引き出しながら、ニアーラがぼやいた。

「ニアーラ、それは認識の不足というものです」

脱ぬぎ捨すてた衣服の代わりに電動服専用のコルセットを身に着けつつ、エイダは答える。

「ジャーナリズムを通じての啓けい蒙もう活動と、電動服による夜警活動は、車の両輪とも言うべき不可分なものです。私たちは現代社会という複雑極まる機械の構造をよく識り、これを常に改善すべく努力しなければならないのですから！」

ニアーラが柱に取り付けられたハンドルを腰こしを入れて回すと、天てん井じようからロープと滑かつ車しやで吊つられた電動服

が、操り人形のように立ち上がる。

　ロブスターの抜ぬけ殻がらを思わせる外装の中にエイダが収まると、ニアーラはその体と電動服の骨格フレームを革のベルトで固定し始めた。

「はあ……それも例の〝不断の前進〟という奴やつで？」

「その通り！」

　エイダが主電源レバーを入れると、自重で中ちゆう腰ごしの姿勢になっていた電動服は、全身から電動機の唸うなりを上げながら胸を張った。あたかも〝科学の火〟たる電気が、異形の肉体に魂たましいを吹ふき込んだかのようだ。

　ウィン、と音を立て、電動服の腕うでが前方斜ななめ上を指した。

「この世からあらゆる事件がなくなるその日まで、〝科学の騎士〟の戦いが終わることはないのです！」

「ははあ、それはそれは」

　ヘルメットのボルトを締しめながら、ニアーラは言った。

「今はもっぱら、他紙よそ様の新聞ダネを増やしてらっしゃるようですけどねえ」

+

　その夜も、やはり霧きりは濃こく。

　ガス灯とうにぼんやりと照らされるグレート・ラッセル通りに、奇き妙みような人ひと影かげがあった。

　子供ほどの大きさの包みを小こ脇わきに抱かかえ、足早に歩を進める長身の東洋人──覇道鋼造。

　夜警の巡じゆん回かいの隙すきをつき、博物館の建物に若じやつ

干かんの損傷を与あたえながら、〝マナウス神像〟を運び出したところだ。

「大英帝てい国こくの威い信しん」は金では買えない。

　金で買えないならば、盗ぬすみ出してしまえ──

　無論、すぐに足はつくだろう。しかし、ものさえ手に入れてしまえばこちらのもの。あとは相手が警察であれ、博物館であれ、英国政府そのものであれ、相応の対価を払はらって話をつける──それが、覇道鋼造のやり方だった。

　低い唸りを上げて、覇道の前に奇妙な箱型の乗り物が走ってきた。内燃機関を搭とう載さいした馬なし馬車──〝自動車〟だ。

　自動車はわずかな音を立てて、覇道の横に停まった。

「ご苦労。ぴったり予定通りだ」

　覇道が言うと、

「恐おそれ入ります」

　御ぎょ者しや席せきでハンドルを握にぎる隻せき眼がんの執しつ事じ・クロフォードが答えた。

　覇道は自動車の座席に包みを放ほうり込み、自らも乗り込んだ。そして、クロフォードが自動車を発進させようとした時──

「覇道鋼造」

　霧の中から、低い声が呼び掛けてきた。

　次いで、コツリ、コツリとステッキの音を響ひびかせ、ひとつの人影が現れた。コートにシルクハット姿の、褐かつ色しよくの肌はだをした男だ。

　男は自動車の前に立ちふさがった。

「その像を置いて、去れ──それはおまえの触ふれるべきものではない」

「やあ」

　覇道は自動車の窓から身を乗り出し、帽ぼう子しを持ち上げた。

「君も予定通りだ。会いたかったよ、〝マスター・オブ・ネクロノミコン〟」

　コートの男──〝死霊マスター・秘法オブ・ネクの主ロノミコン〟アズラッドの物もの腰ごしが緊きん張ちようした。ステッキを棍こんのように持ち替かえながら、その手で第二指と第五指を立てたサイン、〝ヴーアの印〟を形作る。

　と──ステッキの表面に発光する文様が浮うかび上がった。その輝かがやきは見る間にステッキ全体を赤熱した鉄棒に変え、次の瞬しゆん間かん、長大な魔ま刃じん──〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟へと鍛え直した。

　アズラッドは偃月刀を構えた。その表情はすでに氷のような冷静さを取り戻もどしているが、その身の内に秘ひめた闘とう志しが、偃月刀の刀身に浮かぶ魔ま文字となって燃え上がる。

「……なぜその名を？」

「さて、ね」

　覇道はにやりと笑うと、懐ふところから長ちよう銃じゆう身しんの回転拳銃リボルバーを取り出した。

　武器を構えたふたりの男の間で、急速に空気が張り詰つめていく。

　そこに──

『やあやあやあ！』

　割われ鐘がねの如ごとき大だい音おん声じようが響き渡わたった。

『我は〝科学の騎き士し〟なりィ～～！』

　傍かたわらの建物、その三階の屋根の上に、怪かい物ぶつの目を思わせるふたつのアーク灯を背負った、ずんぐりとした人影が現れた。電動服モーター・スーツを着込んだ、自じ称しよう〝科学の騎士〟ことオーガスタ・エイダ・ダーレスだ。

エイダは電でん撃げき槍そうの石いし突づきをトンと鳴らし、さらに路上に呼び掛かけた。

『窃せつ盗とうはよくないことなのでやめるべしィ～～。それから暴力的行こう為いも直ちにやめるべしィ～～。さもなくばァ～～──』

思わず大口を開けて空を仰あおいでいる覇道に、クロフォードが声を掛けた。

「──旦だん那な様？」

「む……いや、これはいささか予定外だ」

『とぉ～～っ』

突とつ然ぜん、エイダは空中に躍おどり出た。そのまま落下するかと見えた鈍どん重じゆうな体が、次の瞬間、がくんと揺ゆれて宙に吊つられた。その体から伸のびる細いロープが、上空で直径二メートルほどの気球につながっていた。エイダは気球の浮ふ力りよくによって減速されながら落下し──

ばりん！

『きゃあっ!?』

「うおっ!?」

その片足が、覇道の自動車の屋根をぶち破った。気球は着地と同時に背中のフックが外れ、夜空に漂ただよっていく。

建物の屋根の上から、使用人姿の女が身を乗り出した。

「お嬢じよう様さま～～っ？」

『いたたたた、ふ、浮力の調節に若じやつ干かん改善の余地が──』

「お嬢さん、すまないが足をばたつかせるのはやめ──いてててて」

そうした騒さわぎの中、アズラッドはただ無言だった。前方を見み据すえる目、魔刃を構える腕うでには、いささかの揺るぎもない。そして──

突とつ如じよ、アズラッドは偃月刀を投げ放った。

「む──！」

電動服のブーツに側頭部を蹴け飛とばされながら、覇道は拳銃を撃うった。

銃じゆう弾だんはアズラッドの肩かたをかすめ、偃月刀の刃やいばは覇道の頭をかすめ──

「「Geck□□!」」

ふたりの背後で獣けものじみた叫さけびが上がり、次いで、どさりと重いものが倒たおれる音がした。

倒れたのは、二匹ひきの豹──そう、ロンドンの街の只ただ中なかに、野生の黒豹が潜ひそんでいたのだ。

片方の豹は眉み間けんを撃うち抜ぬかれ、もう片方は首を飛ばされていた。覇道とアズラッドの武器が、互たがいの背後に忍しのび寄る野や獣じゆうを倒したのだった。

空を切る音を立て、ブーメランのように戻ってきた偃月刀を受け止めると、アズラッドは野獣の骸むくろを見下ろした。

と──血にぬめるその毛皮がぞわりと動き、黒豹は見る間に黒い肌をした裸ら形ぎようの巨きよ漢かんに、さらには蠢うごめく触しよく手しゆの塊かたまりへと変へん貌ぼうし、そして最後に赤黒いタールのような粘ねん液えき溜だまりになると、石いし畳だたみの隙すき間まに染しみ込んでいった。

「やはり──」

アズラッドの呟つぶやきを、覇道が引き継ついだ。

「そう、D　　D　　ダークネス・

ドーンの獣人ライカンスロープ──我々の敵だ」

　その時、細い路地から街路ににじみ出るように、いくつもの人ひと影かげが現れた。

　特とく徴ちよう的な爬は虫ちゆう類るい面づらをした、黒い肌はだの男たち──それぞれコートや帽ぼう子しなどを身につけているが、まるで類るい人じん猿えんに押し着せたように、身に馴な染じんでいない。帽子を横向きに被かぶっている者、靴くつを片方しか履はいていない者もいる。

「「「Kurh, Oooowr!!」」」

　奇き怪かいな叫びを上げながら、黒い野人の群れが一いつ斉せいに変身した。

　膨ふくれ上がる肉体が、衣服の縫ぬい目を内側から引きちぎる。野人たちは見る間に、さまざまな野獣──豹、ゴリラ、熊くま、はては二本脚あしの肉食恐きよう竜りゆうまで──へと変貌した。

『え、え、え──なんですの!?』

　自動車はあり得ざる野獣の群れに取り巻かれた。野獣たちは頭を低く、こちらをねめ上げるようにしながら、じりじりと包囲の輪を縮める。

「──出せ、クロフォード！」

「はい、旦那様」

　クロフォードが御ぎよ者しや席せきのレバーを引くと、内燃機関の咆ほう吼こうと共に、自動車が突とつ進しんした。

「乗れ！」

　覇道が呼び掛けると、アズラッドは高く跳ちよう躍やく、自動車の屋根の上──エイダの横に飛び乗り、次いで偃えん月げつ刀とうを前方に投げ打った。弧こを描えがいて飛ぶ魔ま刃じんは、正面から迫せまるゴリラと肉食竜りゆうを斬きり伏ふせ、周囲の野獣を大きく後退させた。

　その隙間から包囲の輪を突とつ破ぱした自動車に、野獣たちは唸

うなりを上げて追いすがる。

「Grroowaaarh!!」

　側方から駆かけ寄った剣歯虎サーベルタイガーが、自動車の上に躍おどり上がった。

『きゃあ！』

　エイダは身をよじるが、右みぎ脚あしを腿ももまで屋根に突つっ込んでいるので、避よけようがない。電動服の上に剣歯虎が圧のし掛かった。短たん剣けんのような長大な牙きばがヘルメットをがりがりと齧かじり、やがて、柔やわらかな関節部分を探さぐり当て──

　赤黒い血が、ヘルメットの覗のぞき窓まどに降り掛かった。

　アズラッドが偃月刀を振ふるい、剣歯虎の胴どう体たいを両断したのだ。

　剣歯虎は落下しながら粘ねん液えきの塊になり、路上に撥はね散った。

『ど、どうも──』

　救いの主を見上げるエイダを、アズラッドは暗い目で一いち瞥べつすると、再び前方に視線を戻もどし、ただひと言、呟いた。

「──アル・アジフ」

　バララ──と紙束の舞まうような音がしたかと思うと、アズラッドのコートの懐ふところから、ひとりの少女が現れた。

　白い肌、銀の髪かみ、翡翠ひすい色の瞳ひとみ──この世のものならぬ美び貌ぼうをそなえた、妖よう魅みの化け身しん。

　魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】の存在を知らぬエイダも──彼女の理性は否定しようとしたが──この少女が現実に属さぬ存在であることを直感した。

「彼女を護まもれ」

　アズラッドが命じると、少女は目をそらした。

「たかが小こ娘むすめひとり、捨て置けばよい」

　だが、アズラッドは答えず、ただ前方に意識を向けている。アル・アジフは苦々しく口元を歪ゆがめ、

「……了りよう解かいした、我わが主あるじ」

　と言った。

『「小娘」とはなんですか！　あなたのほうが小ちっちゃいくせに──きゃあ！』

　車よりも大きな肉食竜が、唸りを上げてエイダに喰くらいついた。

　その巨きよ大だいな鼻はな面づらに、小さな白い手がひたりと当てられた。

「失うせよ、下げ郎ろう」

　瞬しゆん間かん、アル・アジフの細い腕うでに見えざる力が疾はしり、掌を通して肉食竜の体内に流れ込み、巨きよ体たいを内側から爆ばく裂れつさせた。

　返り血の雨を浴びながら、翡翠色の瞳がエイダを見下ろす。

「少しは働け──妾わらわを煩わずらわせるな、小娘」

『あっ、また「小娘」って言った！　──ンもおおお！』

　全身から電動機の唸りを上げてエイダは身を起こし、ようやく屋根から右脚を引き抜ぬいた。

『えいっ！』

　自動車に並走する虎とらに、エイダは電でん撃げき槍そうの先せん端たんを叩たたきつけた。電極がバチリと火花を散らし、虎は弾はじかれたように路面に倒たおれ、後方に流れ去っていく。

『えいっ！　えいっ！』

　エイダの電撃槍が、覇道の銃じゆう弾だんが、アズラッドの偃月刀が、アル・アジフの魔ま力りよくの一いち撃げきが、野や獣じゆ

うの群れを蹴け散ちらし、進路を確保する。自動車は群れを引き連れ、霧きりのロンドンを一路突進した。

　車上のアズラッドは、足元に身を乗り出している覇道に呼び掛けた。

「覇道鋼造、荷を捨てろ──奴やつらの狙ねらいはそれだ」

「ふふん」

　拳けん銃じゆうを連射していた覇道鋼造は、薬やつ莢きようを捨てながら答えた。

「この覇道鋼造が、手にしたお宝をみすみす手放すと思うかね？」

「引き換かえに命を失ってもか」

「そこは君の助けに期待しよう。相そう互ご扶ふ助じよはビジネスの基本だ」

「取り引きをするつもりはない」

「まあ、そう言うな」

　覇道は拳銃に弾たまを込め、

「人外の魔ま術じゆつ結社と身ひとつで戦うのは骨が折れるだろう。覇道の資金力、情報力、そして権力──利用しない手はないぞ！」

　そして、再び連射。建物の壁へき面めんを伝って飛び掛かる類るい人じん猿えんが、眉み間けんと心臓を撃うち抜かれた。

　その隙すきに覇道に躍おどり掛かった豹ひようを、偃月刀の刃やいばが両断する。

「……俺に、関かかわるな」

　アズラッドの目が暗く沈しずみ、覇道はにやりと笑った。

「ふふん、まあいいだろう……だが、どのみち君は私に関わらざるを得んよ」

自動車は疲つかれを知らぬ機械力を以もつて走り続け、やがて、野獣の群れを完全に引き離はなした。

しかし、突とつ然ぜん。

ふわり──

天から舞い落ちた羽う毛もうのように、クロフォードの目の前に、ひとりの人ひと影かげが現れた。

反射的な制動も間に合わず、自動車は致ち死しの勢いで人影に衝しよう突とつした──が、人影はまるで体重がないかのように、ふわりと背後に退ひき、その勢いをかわす。

自動車が停まると、人影──ローブを着込んだ小こ柄がらな人物は、一歩前に進み出た。フードを目ま深ぶかに被かぶり、表情は見えない。

「ミスター覇道。先ほどは配下の者が失礼をした」

しわがれた、老人の声だった。

「あなたがお持ちの、その石像──それは我わが教団から持ち出されたものでしてな。他所よその方にはなんの意味も持たねども、我らにとっては一命を超こえた価値を持つもの。どうぞお引き渡わたし願いたい……無論、ただとは言いませぬ」

老人が小さく口笛を吹ふくと、路地の奥から、ふたりの黒い巨きよ漢かんが現れた。各おのの々おの、ひと抱かかえもある革かわ袋ぶくろを手にしている。老人は革袋に無造作に手を突つっ込むと、ひとつの石くれを取り出し、覇道に手渡した。

「幸いあなたは話の分かる方と聞く。どうぞ、お好きなように値をつけていただきたい」

「なるほど──」

覇道は右手の拳銃を老人に向けながら、目をすがめ、左手に受け取ったものを検分した。卵ほどもある、ルビーの原石だった。

「確かに私は自他共に認める守しゆ銭せん奴どだ。金さえ積まれれば、どんな人間とも取り引きする」

「おお、では──」

「人間ならな」

　覇道はためらわず発はつ砲ぽうした。弾だん丸がんが老人の眉間を捉とらえ──

　だが、いかなる身のこなしか、老人は至近距きょ離りの弾丸を避よけた。フードのみが弾丸に吹き飛ばされ、その素す顔がおがあらわになった。

　いや、老人ではない。フードの下から現れたのは、女──褐かつ色しょくの肌はだを持つ美女だった。

と―それまで状じよう況きようを静観していたアズラッドが、がたりと立ち上がった。

「ウアルダ……‼」

ウアルダと呼ばれた女は、アズラッドを見上げると、紅あかい唇

くちびるを歪ゆがめ、にたりと笑った。およそ人の皮を被った魔ま物ものにしか成し得ぬ、邪じゃ悪あくな笑みだった。

　アズラッドの表情に冷水を浴びたかの如ごとき驚きよう愕がくが疾り、次いで〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟を握にぎる手に力が籠こもった。黒い刀身に浮うかぶ紅い呪じゆ紋もんが、急速にその光を増す。

「いや……ロブディ……ラアル・ロブディ‼」

　アズラッドは渾こん身しんの力を込め、偃月刀を投げ打った。伸しん張ちようした呪じゆ力りよくの刃が、ローブの女―ラアル・ロブディの左右にいたふたりの巨漢の胴どうを、一撃で切断する。

　しかし、中心にいたロブディは、瞬しゆん時じに上方に逃のがれていた。一気に五メートルほども跳ちよう躍やくし、宙を蹴けるようにしてさらに上空へ―

『飛んだ……⁉』

　ロブディは空中で両りよう腕うでのローブの袖そでをひと振ふりした。すると、その両手に真っ赤に発光する塊かたまりが現れた。卵大のルビーだ。さらに短く口こう訣けつを唱えると、ルビーはその手の中で灼しやく熱ねつの火か山ざん弾だんに変わった。

　覇道が叫さけんだ。

「いかん―車から離れろ！」

　艶あでやかな口元に邪悪な笑みを浮かべながら、ひとつ、またひとつ、ロブディは自動車に燃える石くれを投げつけ、そして、霧きりの空へと消えた。

　赤く炎ほのおの尾おを引く飛礫つぶてのうち、ひとつはアズラッドの振るう偃月刀に弾はじかれ―しかし、もうひとつは自動車の内燃機関を直ちよく撃げきした。

『きゃあっ‼』

「うおっ！」

　石像を抱えた覇道、そしてエイダとクロフォードが路上に転げ落

ち、次の瞬しゆん間かん、自動車は一気に爆ばく発はつ炎えん上じようした。

「―アル・アジフ！」

　自動車の屋根から放ほうり出されながら、アズラッドが叫んだ。

「うむ」

　アズラッドの呼び掛かけにアル・アジフが答え、そして―

　バラリ―まるで本のページを開くように、少女の肉体が空中で紙束となって解ほどけた。その一枚一枚が、魔ま術じゆつ文字を記した魔ま導どう書しよのページだ。

　炎に煽あおられたページは、渦うずを巻きながらアズラッドの体にまといつき、次の瞬間には体にぴたりと合う黒い衣服となった。生き地じの表面には発光する魔術文字が浮かび、刻々とその形を変えている。

　一いつ瞬しゆんで魔術師マギウス・の衣スタイルをまとったアズラッドは、ロブディを追って空中に跳躍した。

　その背から、悪あく魔まのような黒い翼つばさが生えた。―いや、それも衣服の一部なのだろう。翼の表面にはやはり、呪紋や魔術文字が浮かんでいる。

　黒い翼を大きくひと振りすると、アズラッドの体はロブディを追って、霧の夜空へと吸い込まれていった。

『また飛んだ……！』

　呆あつ気けに取られるエイダの目の前を、からから……と、燃え残った車輪が横切った。

　その横で、覇道もまた空を見上げていた。

「ふふん―魔導書の力、かなり使いこなしているようだな」

「―旦だん那な様」

　クロフォードが立ち上がり、乱れた身なりを整えながら言った。

「ん、どうした？」

「囲まれております」

　いつの間に追いついたのか、炎上する自動車の周囲に、熾おき火びのように目を光らせた黒い野や獣じゆうの群れが迫せまりつつあった。

+

　術衣マギウス・スタイルを身にまとう時、魔導書と魔術師は文字通り一心同体となる。

　魔導書に記された外げ道どうの知識は魔術師の血肉に染しみ渡わたり、衣服の表面に浮かび上がる魔術文字と全身から発する呪じゆ的てきな唸りバイブレーシヨンは、魔術の行使を効果的に支し援えんする。

　知は力なり──ことに、魔道の知は人間の理解を超こえた〝力〟そのものだ。

　人の意志を以もつて駆く動どうする、人外の論理。それこそが魔術の本質だ。人であり、人でない者──魔導書との合一を為なした魔術師が、超ちよう論理的な現象を引き起こし得る所以ゆえんである。

　だがそれゆえにこそ、魔術師には強固な自制が要求される。人の限界を超える力を手にした彼らをそれでもなお人たらしめるものは、自らの精神の在りようのみなのだ。

　しかし、今──

　アズラッドは我を忘れていた。五年を掛けて追ってきた怨おん敵

てき―D　　D　　ダークネス・ドーンの魔術師〝ラアル・ロブディ〟の存在、彼の精神はただその一点に集中していた。

（アズラッド―逸はやるな、アズラッド！）

　アル・アジフの言葉は、しかし、主あるじには届かない。

　飛行呪じゆ紋もんを浮うかべた魔術師マギウス・の翼ウイングが、猛もう烈れつな勢いで空を斬り裂さく。アズラッドは霧に煙けむる街を眼下に飛び抜ぬけ、月光冴さえ渡る上空に至り―超ちよう人じん的に強化されたその視力が、中空に浮かぶローブの人物を捉とらえた。

「ロブディ‼」

　アズラッドは偃えん月げつ刀とうを振りかぶった。同時に、術衣の全身にいくつものヴーアの印が浮かび〝魔ま刃じん鍛たん造ぞう〟の呪じゆ文もんを何重にも響ひびかせる。

　力を―

　　力を―

　力を与あたえよ‼

　アズラッドの周囲に、右手に持ったものと同様の、六本の偃月刀が出現した。

　その場にふわりと滞たい空くうしたそれらは、手にした偃月刀をアズラッドが投げ打つと、その後を追って飛び出した。七本の魔刃は刀身に投とう擲てき呪じゆ紋もんを浮かべてひとりでに回転し、

あるものは急激に加速、あるものは力を溜ためるように減速し、それぞれに異なった直曲の軌き道どうを描えがいてロブディに殺さつ到とうする。

バサッ──飛来する刃やいばにローブが斬きり刻まれ、ボロ布と化して落下した。

一瞬早く飛び離はなれたラアル・ロブディの体が、空中に残った。

月光を浴びて輝かがやく、褐かつ色しよくの裸ら身しん。その伸のびやかな肉体が帯びるものは、一冊の魔導書と、一本の短たん剣けんのみ。それは幻げん想そう的とも言うべき光景だったが──

「……ッ！」

アズラッドは空中に急停止した。

「動どう揺ようしたな、アズラッド」

若い女の唇くちびるから、ぞっとするようなしわがれた声が漏もれた。

ロブディの左手にある、血のように赤い革表紙の魔導書──【流血祈き禱とう書しよ】がバラリと解ほどけ、女体にまといつき、アズラッドのそれに似た深しん紅くの術衣マギウス・スタイルとなった。

次いで、ロブディは空いた左掌に右手の短剣の切っ先を当て、躊ちゆう躇ちよなく押し込んだ。白い掌が、見る間に鮮せん血けつに染まる──禍まが々まがしいエネルギーを孕はらみ、その血が発光している。

ロブディは呪文を唱えながら、左手をひと振ふりした。振り飛ばされた血液が、空中で灼しやく熱ねつの飛礫つぶてに変わる。

同時にアズラッドが飛び出した。飛礫を偃月刀の刃で弾はじきながら、ロブディに肉にく迫はく、自在に動く七本の刃で斬きり掛かかった。

ロブディは嘲あざ笑わらいながら、七重の斬ざん撃げきをかわし、距きよ離りを取った。アズラッドはそこに追いすがる。

ふたりの魔ま術じゆつ師しは、ロンドンの上空を怪け鳥ちようの如ごとく飛び回った。激しく打ち掛かるアズラッドをからかうように、ロブディの体が軽かろやかに舞まう。

アズラッドの攻こう撃げきをただ避よけるだけでなく、ロブディは隙すきをついて飛礫を撃うち込んだ。もはや攻撃しか頭にないアズラッドに代わり、アル・アジフが術衣の表面に防護呪紋を展開する。

しかし、足並みの揃そろわない術の行使は、攻撃と防ぼう御ぎよの効果をわずかずつ減じている。そこに乗じて、ロブディはほんのわずかずつのダメージをアズラッドに与えていく。

やがて、アズラッドが速度を緩ゆるめた。その息は荒あらく、褐色の肌はだにはいくつもの火傷やけどの跡あとが残っていた。最後に七つの刃を一投するが、むなしくロブディの後方に飛び抜ける。

「甘い、甘い──だが」

嘲笑うロブディの頬ほおに、すうっと血の線が走った。

何百という斬撃の果ての、ただひとつの成果だった。

「気き迫はくだけは充じゆう分ぶんといったところか──ふふ、ふ」

乾かわいた含ふくみ笑いが、ふいに、艶つやめいた女の声音に変わった。

「うふふ──あなたの刀かたな、とても熱いわ」

ロブディは頬の傷に指を当てると、ぺろりと血を舐なめ取った。

そして、術衣の胸むな元もとを大きくはだけると、にたりと笑った。

「もっとちょうだい、アズラッド──愛いとしい人」

「──貴様!!」

（アズラッド、なにか妙みようだ──挑ちよう発はつに乗るな！）

だが、その言葉はもはや、アズラッドの耳には入らない。

「ラアル・ロブディ──その顔で、その声で、口を利きくな！」

七本の偃えん月げつ刀とうが、風を切ってアズラッドの下に戻もどってきた。一本はアズラッドの手に収まり、残り六本が、その全身に突き刺ささった──いや、魔刃を構成する術式が分解され、術衣に吸収されたのだ。

「──その姿、この世から消し去る！」

六本の偃月刀の孕んでいた魔ま力りよくを吸収し、術衣の表面に発光する呪じゆ紋もんが躍おどり狂くるった。その光が、アズラッドの腕うでを介かいし、残る一本の刃に集中する。

アズラッドは偃月刀を両手で空中に突き立て、ひとつの名を口にした。

「アイオーン！」

ゴゥ──

大気が鳴動した。月が、雲が、そして大地が震ふるえた。

次元の壁かべの向こうにいる何者かが、アズラッドの呼び掛けコールに応こたえたのだ。

バララ──黒い翼つばさが解け、数十枚の長方形のページとなって、アズラッドを円形に囲んで浮ふ遊ゆうした。魔ま導どう書しよが最大の効果を発揮する〝詠えい唱しよう形態〟だ。

ページはそれぞれ、複雑な呪紋や魔ま術じゆつ文字を、目まぐるしく表示している。そこに展開されるのは、魔導書【アル・アジフ】の擁ようする最大最強の術式──〝機神召しよう喚かん〟。

アズラッドは全ぜん霊れいを込めて口こう訣けつを唱える。

永劫アイオーン！

時の歯車

断罪さばきの刃

久く遠おんの果てより来たる虚きよ無む──

永劫アイオーン！

汝なれより逃のがれ得るものはなく

汝なが触ふれしものは死すらも死せん‼

浮遊するページ群の唸うなりがそれに唱和し、その表面の発光紋もん様ようの機械的な律動が同調した。光と音が織り成す立体魔ま法ほう陣じんが空間の性質を変化させ──

ゴッ──‼

鋼の巨きよ体たいが出現した。

言語化され、圧縮され、魔導書に封ふう印いんされていた〝翼持つ鋼の神〟──鬼械神デウス・マキナアイオーンが、魔法陣の中で展開され、瞬しゆん時じに実体化したのだ。

衝しよう撃げき波はが周囲に広がり、眼下の街から夜よ霧ぎりを吹ふき飛ばした。

アズラッドは機神の体内に取り込まれた──いや、アズラッドを中心に機体が組み立てられたのだ。魔導書は詠唱形態を保ち、魔術師と鬼械神デウス・マキナの仲ちゆう介かいをする。これにより、魔ま術じゆつ師し、魔導書、そして鬼械神デウス・マキナの三位一体が成り、人造の神はその威い力りよくを振るうことができる。今や機神は術者自身であり、術者は機神そのものであった。

「オォッ‼」

アズラッド＝アイオーンはひと声吼ほえると、大気を震わせながら、鋼はがねの拳こぶしをロブディに打ち込んだ。

しかし──

鬼械神デウス・マキナの召喚は魔術師にとって最大の力を行使する手段だが、こと魔術師が相手とあっては、それが最善の一手であるとは限らない。なぜなら、魔術師同士の戦いは論理外の論理を競

うゲームであり、必ずしも攻こう撃げきの速度や重量によって勝敗を決するものではないからだ。

　現に、今も。

　ロブディの体は先ほど自動車と衝しよう突とつした時と同様、なんの障害もなくふわりと後方に下がった。山をも砕くだく機神の一いち撃げきが、なんの効果も及およぼさない。

（奴やつめ、魔術的に防ぼう御ぎよされている。通常の打だ撃げきは効かんぞ）

「ならば―灼やき尽つくす！」

　アイオーンの全身の関節から、灼しやく熱ねつの炎ほのおが噴ふき出した。闇やみ色の装そう甲こう面が見る間に赤熱し、機体の周囲に陽炎かげろうを浮うき立たせる。まるで空間自体が溶とけだすかのような光景だ。

　魔力と高熱を帯びた掌てのひらが、ロブディの体を捉とらえようと突つき出された。先ほどの打撃と違ちがい、かすっただけでも致ち命めい傷しようとなるだろう。

　しかし、ロブディは熱波に煽あおられながらひらりひらりとその手を避よけ、そして、吹き上げられた羽う毛もうさながらに、アイオーンの鼻先に現れた。

「どうしたの、アズラッド」

　女の声が、嘲笑うように呼び掛かけた。

「私はここよ―早く捕つかまえて」

「貴様―‼」

　アズラッドが激げつ昂こうした、その時。

　ロブディの左手が閃ひらめき、一度に二発の飛礫つぶてを放った。

　飛礫は過あやまたずアイオーンの両目を捉え、その場で爆ばく発はつした。

無論、それはアズラッド自身の目ではない。機体を構成する術式を修復すれば難なく回復するダメージだ。しかし、わずかの間ながら、機神の視覚は確実に奪うばわれた。

「ふふ……」

ロブディの笑い声が遠ざかる。

―目が見えない―!?

逃にげる―奴が―

ロブディが逃げる！

……逃がすものか‼

しかし、目が―おのれ‼

（アズラッド―待て！）

「オオォ‼」

アズラッド＝アイオーンが咆ほう吼こうした。

（いかん―！）

アル・アジフは機体の制せい御ぎよを奪う―が、間に合わない。

アイオーンの体内で霊れい燃ねん機関〝アルハザードのランプ〟が最大限に活性化し、術者の霊れい力りよくを急激に燃焼。全方位に向けて爆発的な熱波を発生させた。アズラッドの〝焼しよう滅めつ〟の意志が、瞬しゆん間かん、アイオーンを小型の太陽と成したのだ。

鋼はがねの機体を中心とする直径百メートルあまりの光球が、ロブディの体を呑み込んだ。

しかし同時に、その攻撃はアズラッド自身の精神と肉体の限界を超こえていた。アズラッドの意識が吹き飛び、機体を物質化している術式が力を失った。

あたかも自らの発した熱に焼き尽くされていくように、鋼の巨体が急速に分解する。やがて、アズラッドの体が剝むき出しになり、

空間に残る高熱に曝さらされた。

（くッ―）

　アル・アジフは術衣の翼つばさでアズラッドの体を保護した。魔ま導どう書しよと魔術師は、黒い繭まゆ状じようの塊かたまりとなって、ロンドンの街へと落下していった。

+

　アル・アジフは今しがたの光景を反はん芻すうした。

　熱波に焼き尽くされようとする寸前、ロブディは笑っていた。空間に嘲ちよう笑しようのみを残し、逃げおおせたのだ。

（奴は囮おとりだ）

　その真の狙ねらいはおそらく、覇道鋼造の運んでいた、石像。

　アズラッドを引き離はなして無力化すれば、あとは配下の獣じゆう人じんのみで始末できる。もはや、覇道もその周囲の人間たちも、生きてはいないだろう。

　復ふく讐しゆうの念に盲めしいたアズラッドはともかく、自分までもがラアル・ロブディの思惑おもわくにまんまと乗せられるとは―

（……してやられた）

　苦い思いを呑のみ込みながら、アル・アジフは術衣の翼を広げた。

　だらりと力を失ったアズラッドの体を翼で吊つり下げ、緩ゆるやかに降下する。傍はた目めには、巨きよ大だいな蝙蝠こうもりが人間をつかんで飛んでいるように見えるだろうか。

　アル・アジフは覇道らを残した街路の一角へと向かった。

　―魔導書として、また戦士としての千年を超える生。その中で、

彼女は幾いく多たの死に立ち会ってきた。自らの欲望のため、はたまた逃のがれ得ぬ運命のため魔に関かかわり、結果として命を落とした者たち。その数は千や二千ではきかない。今日もまた、そこにいくつかの数が加わった。

ただそれだけのことだ。

それだけのことだが──アル・アジフは能あたう限り犠ぎ牲せい者しやの死のありさまを確かく認にんし、己おのが身に記述することにしていた。〝書〟としての本能かもしれない。

ロブディと戦っていたのは、わずか数分間だ。しかし、奴やつらには充分な時間だろう。

くすぶる自動車の残ざん骸がいの周りに転がる、食い散らかされた男女の死体──アル・アジフが想像したのは、そのような光景だった。

しかし、眼下に現れたのは──

+

月光に照らされた広場の中心に、覇道鋼造とクロフォード、そしてエイダの三人が互たがいの背を守る形で立っていた。その周囲を、未いまだ十匹ぴきあまりの野や獣じゆうが取り囲んでいる。

『えいっ、えいっ！　もうっ！』

エイダが電でん撃げき槍そうを振ふり回し、野獣を撃げき退たいする。

その横から一匹の剣歯虎サーベルタイガーが躍おどり掛かったが、

「ふんッ！」

さらに横合いから飛び出した岩のような拳こぶしが、野獣の長大な牙きばを叩たたき折った。

『あらすごい！　あなた、拳闘ボクシングの達人ですのね！』

　隻せき眼がんの執しつ事じクロフォードは、エイダを横目に見ながら手の甲こうを前に向ける構えを取り、

「お恥はずかしい、ほんのすてごろベアナツクルでございます──ふんッ！」

　今度は強きよう烈れつな鉤打ちフツクで、正面のゴリラをノックアウトする。

「ふたりとも、もう少しだけこらえてくれ！」

　石像の包みを小こ脇わきに抱かかえ、拳けん銃じゆうを連射していた覇道が、

「おっ──いかん、弾たま切ぎれだ」

　と言った時──

　赤く尾おを引く飛礫つぶてが、その目の前に叩き込まれた。

　見上げれば、五メートルほどの空中に、赤い術衣を着た女が立っていた。

　覇道はにやりと笑った。

「来たか、ラアル・ロブディ」

「覇道鋼造──頼たのみの魔ま術じゆつ師しは、もうおらぬぞ」

　ロブディはしわがれた老人の声で言い、艶あでやかな女の顔で嗤わらった。

　アズラッドが消えた今、ロブディにはもはや、取り引きをする必要はなかった。

「……神像を渡わたせ」

「ふふん」

　覇道は石像の包みと空の拳銃を、足元に置いた。

「それでいい。おまえは利口者だな」

　と、ロブディが言う。

　だが、覇道は不敵な笑えみを浮うかべたまま、

「さて、おまけにこんなものはどうかね……？」

　と言うと、腰こしに革かわのベルトでくくりつけてあった革表紙の本を取り出した。

「それは―魔ま導どう書しよ！」

　ロブディは瞬しゆん間かん動どう揺ようし、そして、

「しゃッ‼」

　左手を振り、飛礫を打ち出した。

　だが、覇道の反応は素す早ばやかった。右手に印を結びながら左手で魔導書を開き―

　バララ―！

　魔導書のページが革表紙から飛び出し、覇道の目の前に紙の盾たてを作った。

　盾の表面に五ご芒ぼう星せい形の〝旧き印〟が浮かび上がり、灼しやく熱ねつの飛礫を弾はじき返した。

「おのれ……！」

　ロブディがさらに左手を振りかぶった、その時。

　ビュン―！

　横合いから、黒い刃やいばがその頭をかすめて飛んだ。

〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟だ。

　コート姿のアズラッドが、少女アル・アジフの小さな肩かたに支えられ、かろうじて立っていた。

「……ロ……ブ……ディ……‼」

　憎ぞう悪おに燃える目が、ロブディを見上げる。

　さらに──

　バラララ──‼

　突とつ如じよ、雨のような銃じゆう弾だんが石いし畳だたみに降り注ぎ始めた。

　頭部や脊せき髄ずいを真上から撃うち抜ぬかれた野獣が、次々と倒たおれ、タールのように崩くずれていく。

「──ッ⁉」

　ロブディが頭上を見上げた。その深しん紅くの術衣の表面にも、何発もの銃弾が火花を散らす。

「やれやれ、ようやく予定の時間だ」

　と、覇道が言った。

　ロンドンの上空に、月光を遮さえぎりながら、巨きよ大だいな飛行船が出現していた。そのゴンドラから、小しよう銃じゆうを持った二十人ほどの男たちが顔を出している。

「ちぃ──！」

　ロブディは覇道から飛び離はなれた。

　褐かつ色しよくの美び貌ぼうに、恐おそろしい憎悪の表情が浮かんだ。

「覇道鋼造！　我らが神像、必ず取り戻もどし、貴様の血を生いけ贄にえに捧ささげてくれるぞ‼」

　憎悪の気配をその場に残し、ロブディは建物の狭はざ間まに飛び去った。生き残った獣じゆう人じんたちはその後を追い、潮が引くように去っていった。

+

　低空飛行をする飛行船から、ロープを伝って一団の男たちが降りてきた。

　兵士のような装備を身に着けた男たちの先頭に立つのは、ただひとりだけスーツを着込んだ、学者風の男だ。

「アーミティッジ！」

　覇道はスーツの男に声を掛かけた。

「もう少し早く来てくれてもよかったんだがね。危あやうく死ぬところだった」

　スーツの男アーミティッジは、懐かい中ちゆう時計を取り出し時刻を確かく認にんすると、表情も変えずに言った。

「―いえ、時間どおりです。ミスター覇道」

　アーミティッジの指示の下、兵装の男たち―〝ミスカトニック大学図書館特とく殊しゆ資料室〟は自動車の残ざん骸がいや獣人の体組織の残留物などを手て際ぎわよく回収し、事件の痕こん跡せきを拭ぬぐい去っていく。夜明けまでに作業を終え、この場を撤てつ収しゆうする予定だ。

　そのさまを眺ながめる覇道に、歩み寄る者があった。

「―覇道鋼造」

「やあ、アズラッド。それに―アル・アジフ」

　覇道が帽ぼう子しを持ち上げると、アズラッドは言った。

「覇道鋼造。やはりおまえは……魔ま術じゆつ師しか」

「もぐりだがね」

　覇道は革かわ表びよう紙しの本を持ち上げ、にやりと笑った。

　その本を一いち瞥べつし、アル・アジフが言った。

「見たことのない魔導書だが、妾わらわに似た匂いを感じる。写本の類たぐいだな」

「ご名答。これは【死霊秘法ネクロノミコン】ウォルミウス訳ラテン語版からの翻ほん訳やく書しよ――」

　パラ――覇道がページを繰くると、ページの中身が見えた。

　それは、奇き妙みような魔導書だった。いや、そもそも〝本〟として奇妙な体てい裁さいを持っていた。

　そのページには、絵も文字も記き載さいされてはいなかった。そこにあるのは〝穴〟――規則的に穿うがたれた、無数の丸い穴だった。

『パンチカード……ですわね』

　と、エイダが首を突つっ込んだ。

『――じゃあ、これが例の〝機械翻訳〟の？』

　覇道は五角形の図形を刻印した革表紙を持ち上げ、うなずいた。

「【ネクロノミコン・機械語写本】だよ」

「機械語……？」

　アル・アジフが怪け訝げんな顔をした時、

「お嬢じよう様さま～～っ？」

　蜂はちの羽音のような音を立てながら、電動自転車に乗ったニアーラが走ってきた。

　ニアーラは覇道の横で手を振ふるエイダの姿を認めると、自転車を脇わきに停め、電動服モーター・スーツのヘルメットを外し始めた。

「まったく、急にあの変な馬車に乗って行ってしまわれるものですから、ずいぶんと心配しましたよ。おまけに、あのものすごい音に、風に、光！　まるでこの世の終わりでございましたね。いったいなんの騒さわぎで？」

　搾しぼったタオルでぞんざいに顔を拭ふかれながら、エイダは答えた。

「分かりません──うぷ──しかし、それは今から──むぷ──こちらの覇道鋼造氏に説明していただけることでしょう！」

　エイダは電動服の胸をそらし、襟えり元もとから湯気を立てながら、覇道の顔を見上げた。蒸むし上げられたように上気した頬ほおが、不敵な微び笑しようを浮うかべながら、薔薇ばら色いろに輝かがやいている。

「ミスター覇道、あらためて取材を申し込みますわ。昨日の会見は中断されてしまいましたし、それに、あの怪かい物ぶつ──いえ、未み確かく認にん生物群に、空中浮ふ遊ゆうする人物、都市上空に現れる有ゆう翼よくの巨きよ人じんに異常発光現象、加えてその〝魔ま導どう書しよ〟──ますます謎なぞは深まるばかりです」

「ふむ……よし、いいだろう」

「ええ、もちろんあなた自身のご都合というものもあるでしょう。しかし、これらの謎を目の前に引き下がることは、私のジャーナリストとしての矜きよう持じが──えっ？」

「私のほうでも、君に見せたいものがある」

　覇道は帽子を胸に当てると、いたずらっぽい笑えみを浮かべながら会え釈しやくした。

「お嬢さん、どうか、私の根城、アーカムまでいっしょに来てもらえるかな？」

「……よろこんで！」

　エイダはガシャリと飛び跳はねた。

「きゃあ、やったわ、ニアーラ！　覇道財ざい閥ばつ総そう帥すいへの密着取材よ！」

「──やめておけ」

　ガシャガシャと音を立てて浮かれるエイダを、呟つぶやくような声が引き止めた。

　コート姿の青年──アズラッドが、暗い目でエイダを見つめていた。

「闇やみの世界に、遊び半分に関かかわるものではない」

　エイダは口を尖とがらせた。

「遊びじゃありません。仕事ですわ」

「──そういう君は、これからどうする」

　覇道はアズラッドに向けて、〝マナウス神像〟の包みを持ち上げた。

「奴やつらはこれを狙ねらってくる──我々と共にくれば、手掛かりを求めてうろつく必要もないぞ」

「ラアル・ロブディは俺が斃たおす」

　アズラッドはにべもなく言った。

「だが、おまえたちの生命は保証できん。その像を置いて去れ」

「ふふん、君はどうも、取り引きというものが分かっていないようだ」

「……なめるな、人間」

　アズラッドの陰かげに寄り添そうように立っていたアル・アジフが、一歩前に進み出ると、小さな掌てのひらを覇道に向けた。

「汝なれら全員、この場でくず肉に変え、像を奪うばってもいいのだぞ」

「んまっ、なんて言い草！　盗ぬすつ人と猛たけ々だけしいとはこのことだわ！」

「黙だまれ、小こ娘むすめ」

　険を帯びた翡翠ひすい色の瞳ひとみが、エイダをにらみつけた。

　──確かに、先ほどの獣じゆう人じんとの戦いぶりから見て、この得体の知れない少女──あるいは少女の姿をしたなにか──は、人間

の五人や十人、腕うでのひと振ふりで殺してしまえるだろう。

　だが、怪かい異いへの恐きよう怖ふに屈くつすることは〝科学の騎き士し〟の矜持が許さない。エイダは電でん撃げき槍そうをトンと鳴らし、アル・アジフの瞳をにらみ返した。

「『小娘』じゃありません」

　ふたりの少女の間で、空気が張り詰つめる。

　と――

「……君こそ、あまり人間をなめてもらっては困るな。アル・アジフ」

　覇道鋼造が言った。挑ちよう発はつ的な物言いの中に、どこか、気き遣づかうような響ひびきがあった。

「人間は君が考えるほど弱くはない。そもそも、君の主あるじとて我々と同じ人間だろう」

「アズラッドは汝らとは違ちがう」

　魔導書の化け身しんは答えた。

「我わが主は目的のために命を捨て、妾わらわと同じ世界に踏ふみ込んだのだ。汝らにその覚かく悟ごがあるとでも――」

　アズラッドの手が、少女の細い肩かたに置かれた。

「アル・アジフ……要いらぬことを言うな」

　少女は物言いたげにアズラッドを見上げ、しかしその口をつぐみ、バラ――と音を立てて魔導書に変じた。

「あっ――」

　息を呑のむエイダに、アズラッドの目が止まった。

　その暗い瞳からは、いかなる感情も見ては取れない。

「な……なんですの!?」

　まなじりを決するエイダからふいと目をそらし、アズラッドは魔導書を懐ふところに収め、歩き始めた。そして、覇道とすれ違ちがいながら、視線も向けずに言う。

「覇道鋼造──おまえも魔と闘たたかう者ならば、〝共きよう闘とう〟などと甘い考えを持つな」

　覇道は帽ぼう子しを持ち上げながら、にやりと笑った。

「まあ、そう言うな」

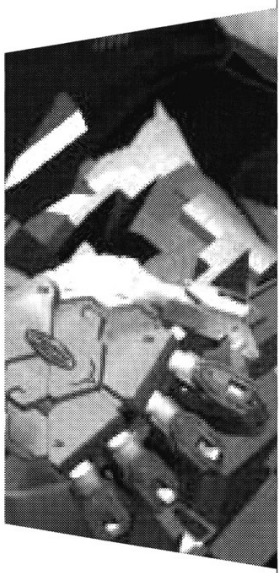
　アズラッドは応こたえず、振ふり返らず、再び霧きりの出始めた街路に消えていく。

　その姿を見送る覇道の背後で、

「ふんッ──なんなんですの、あの人。感じ悪い」

　と、エイダが鼻を鳴らした。

「それに、あの子！　偉えらそうで凶きよう暴ぼうでオカルトで──あんな子、嫌きらいです！」



第二章 胎盤都市——生ける街、生まれざる機神

〝鋼はがねの巨きよ人じん〟の話をしよう。

いや、なにも神話やおとぎ話を語ろうというのではない。私が言うのは血肉をそなえた人間、それでいて世界地図にその足そく跡せきを刻印しつつある、現代の巨人のことだ。

彼の所属するアメリカ合衆国―建国以来百余年を掛けて成長を続けてきたこの巨きよ大だい国家は、来たる新世紀を前に、大陸横断鉄道の相次ぐ開通によって完成した。南北戦争による深い亀き裂れつによって分解寸前だった国土と人心は、物流と通信を司つかさどる鉄てつ軌きのたがによって、再び強固に統一されたのだ。

その大事業は、事実上、ひとりの男の手によって成し遂とげられた。

彼はそれを成すに足る〝力〟を持っていた。自らの知力と意志力によって得た財力、財力に裏づけられた権力、権力によって発動される武力―いや、彼が真に掌しよう握あくしていたのは目に見える力ではなく、それらすべての源泉、この世の理ことわりとでも言うべきものだった。つまり、彼は経済の、社会の、世界そのものの構造と操作法を熟知し、蒸気機関を運用するがごとく、そこから望むだけの成果を引き出すことができたのだ。

「超ちよう人じん」と呼ばれ、「巨大な活力の塊かたまり」と評され、「一国家に匹ひつ敵てきする一個人」とまで言われるその男の名は〝覇道鋼造〟。

彼の祖先を生んだ黄おう金ごんの国・日本ニツポンにおいては、〝鋼造〟とは「鋼鉄を造る者」、〝覇道〟とは「征せい服ふく者しやの道」を意味するという。

私は現在、ロサンゼルスから大陸東部へ向かうサンタフェ鉄道の車中にある。

列車は昼過ぎにコロラド川を越こえ、アリゾナ準州に入った。見み渡わたす限りの荒こう野やに風化した砂岩の山が点々とそびえ立ち、赤茶けた横腹にウエハースのような地層を露ろ出しゆつさせている。

このアリゾナの荒野こそは、アメリカの原風景であると同時に、覇道鋼造の伝説の起点となる土地だ。真しん偽ぎのほどは定かでないが、今から二十年ほど前、ゴールド・ラッシュの収束しつつあったこの地にふらりと現れた東洋人の青年―若き日の覇道鋼造が、見事〝最後の大ヤマ〟を掘ほり当て東部に凱がい旋せんした、という逸いつ話わが残っている。

「一文なしでやってきて、鉄軌レールを敷しいて故郷へ帰る」とは、彼の大成功を謳うたう現地の囃はやし言葉だ。―が、遺い憾かんながら、それは完全な事実ではない。彼がサンタフェ鉄道を開通させたのは、アリゾナ時代より十年もあとのこと。その間に単なる〝幸運な男〟であった彼を〝石油王にして鉄鉱王にして貿易王、然しかして全米鉄てつ道どう網もうの七割を所有する大鉄道王〟にまで成長させたのは、彼自身のニューヨーク市場における精力的な投資活動なのだ。

その後、自ら計画したアーカム鉄道の完成と共に、覇道はその活動の本ほん拠きよを自らの故郷、マサチューセッツ州アーカムに移した。鉄道はアーカムシティを始点として東海岸の主要都市をつなぎ、そこからアパラチア山脈を越え、あるいは北回りにカナダ領を横切って、彼が開発あるいは買収した既き成せいの大陸横断鉄道に連れん絡らくする。このようにして、閉とざされた古き町アーカムは、アメリカ全土に向けて開放された。

それは同時に、アメリカ中の、ひいては世界中の富、人材、活力がアーカムへと流れ込むシステムが完成したということでもあった。事実、この時を境に、うら寂さびれた田舎いなか町まちにすぎなかったアーカムは世界最大の都市へと未み曽ぞ有うの大発展を遂とげる―〝世界の首都〟にして〝覇道鋼造の帝てい国こく〟の誕生である。

アリゾナからアーカムへ。

二条の鉄軌は無人の荒野を貫つらぬき、地平線の彼方かなた―覇道の帝国へとつながっている。

　それは〝鋼の巨人〟覇道鋼造の足跡を象しよう徴ちようする、揺ゆるぎない征服者の道なのだ。

「〝鋼の巨人〟ねえ……ふふん」

　機関車の立てる轟ごう音おんの中、エイダはその吐と息いきを耳ざとく聞き取った。

「あっ、笑った！　今、鼻で笑いましたね！　失礼な！」

　エイダはニアーラの手からタイプ原げん稿こうの束を取り戻もどすと、口を尖とがらせながら読み返し始めた。

「……どの辺がおかしかった？」

「ちょいと大おお仰ぎようじゃありませんかね」

　と、ニアーラは言った。

「ここに書いてあることっていうのは、つまりこういうことでございましょ。『覇道鋼造氏は、アメリカを丸ごと買えるほどの大金持ちであります』。ほら、一行で済んだ」

「それじゃぜんぜん駄だ目めよぅ」

「駄目って？」

「『鋼の巨人―覇道鋼造、その知られざる素す顔がお（仮）』は私が初めて世に問う本になるのですもの、そこにはそれなりの趣おもむきというか風格というか―あっ、また笑った！　ンもお！」

　エイダは原稿を両手でくしゃくしゃと丸めて捨てると、列車内に持ち込んだタイプライターに向かい、袖そでをまくった。

「いいわ、書き直します！」

「その前に、お嬢じよう様さま―アイスクリームは？」

　エイダはくるりと振ふり返った。

「いただきましょう」

　ニアーラは氷を詰つめた保冷容器からアイスクリームの缶かんを取り出し、エイダに手て渡わたした。

「……いきなり御ご立派な物を書こうとするより、まずは今まであったことを、分かりやすく順番に書いてみたらどうですかね。気に入らなけりゃ、あとからどうとでも書き直せばいいんですし」

「ふむん、理にかなった助言ですわね──あら、おいしい」

「それはどうも」

　そう言いながら、ニアーラは床ゆかに投げられた原稿を拾い、丁てい寧ねいにしわを伸のばすと、日付をつけてファイルにしまった。

「そんなの、捨ててしまってください」

「さあて、どうせあとになって『やっぱり昨日書いた文章のほうがよかった』とか言って大おお騒さわぎなさるんでしょうに」

「大騒ぎなんて、しません」

　エイダはスプーンをくわえたまま、ぷいと横を向いた。

「今からもっといいのを書きますもの」

「はい、はい」

　ニアーラは荷物の整理を始め、エイダのタイプライターが軽快な音を立て始めた。

　やがて、

「……ねえ、ニアーラ」

　タイプを打つ手をふと止め、エイダが振り返った。

「献けん辞じの言葉は〝親愛なる友、ニアーラに捧ささぐ〟と〝我わが姉にして教師、ニアーラへ〟と、どっちがいいかしら？」

　ニアーラはアイスクリームの缶をしまいながら、顔も上げずに言った。

「さてね。どちらでも、お好きなように」

それでは、ひとまず事実関係を整理。

現在──ロンドンでの出会いから約半年後、一八九×年十二月十八日。私ことオーガスタ・エイダ・ダーレスと使用人ニアーラは覇道鋼造氏に随ずい伴はんし、アーカム・サンタフェ鉄道の特別急行便によって北米大陸を横断中である。

その終点は、覇道財ざい閥ばつの本ほん拠きよ地ちにしてアメリカ最大の都市、アーカムシティ。

ロンドンからアーカムへの旅程は、通常、大西洋を西へ──リヴァプール・ニューヨーク間の定期航路を利用することになるのだが、今回は少々事情が違ちがう。覇道氏は〝東回り〟の旅程──大西洋を横断する代わりに、それ以外の部分をぐるりと遠回りする──を提案したのだ。

「ほかにも少々寄る所があってね」

というのは覇道氏の弁だが──〝少々〟とはとんでもない。それは私の想像をはるかに超こえる、空前の大旅行だった！

まず、視察や商談のために立ち寄った主要な都市だけでも、パリ、プラハ、ローマ、カイロ、ムンバイ、カルカッタ、シンガポール、ホンコン、シャンハイ、ヨコハマ、マニラ、シドニー──それらの都市間の移動は、主として鉄道及および蒸気船を利用する。そのいずれもが少なからず覇道財閥の出資を受けており、覇道鋼造のための特別便を用意することに躊ちゆう躇ちよがない。アメリカのみならず、全地球規模の輸送・通つう信しん網もうが、まさに彼個人のために完成しつつあることを、私は実感した。それは史上最大の合理主義者・覇道鋼造が世界を掌しよう握あくするための、理性の網あみとも言うべきものだ。

しかし、その網の目がこの世のすべてをすくい上げるわけではない。都市から都市への旅の合間に、自動車、飛行船、潜せん水すい艦かん（と名づけられた水中航行船！）といった最新科学によるものから、馬、駱らく駝だ、象、犬ぞりのような前時代的なものまで、ありとあらゆる移動手段を使い、私たちは網の目の隙間を駆か

け巡めぐった。ある時は知られざる未開の部族と物品を交こう換かんし、またある時は人の手の触ふれぬ自然の只ただ中なかに天然の資源を求め、そして――

　未いまだ公的な調査の手の及ばない地域に、私たちはいくつもの奇き怪かいな遺い跡せきを訪おとなった。それらは〝探検〟や〝冒ぼう険けん〟ではなく、やはり〝視察〟と言うべきだろう。ピレネー山中の洞どう窟くつに隠かくされた巨きょ大だい石像群、カイロ郊こう外がいの砂中にある無む貌ぼうの神像、ペルシアの砂さ漠ばく地帯に打ち捨てられた廃はい都と、西オーストラリアの巨きょ石せき建築――どの遺跡にもすでに、件くだんの〝特とく殊しゆ資料室〟の調査隊のキャンプが設けられ、専任のスタッフが継けい続ぞく的な調査活動を行なっていた。覇道氏はそれらの地に赴おもむいては進しん捗ちよく報告を受け取り、その後の指示を事細かに出している。その緻ち密みつさ、そして慎しん重ちようさは、あたかも樽たる詰づめのニトログリセリンを取り扱あつかっているかのようだ。

　中でも特筆すべきは、南太平洋下の海底遺跡、そして極寒の南極大陸奥地の巨大石造建築群だろう。飛行船や潜水艦によって〝前人未み到とう〟の最前線を軽々と踏ふみ越える覇道氏が驚きよう異い的ならば、その先に存在する〝遺跡〟は不可解の極きわみだ。

　人間の居住不可能な土地に、太古から存在する巨大構造物。それは誰だれがどうやって、なんのために造ったものなのか。これらは非常に学術的な興味をそそられる事象だと言えるが、覇道氏にその質問をしても、彼はいつものように謎なぞめいた笑えみを浮うかべ「その解答はアーカムに用意されている」と言うばかりだ。

　――そして現在、私はサンタフェ鉄道の車中にあり、そのアーカムシティへと向かっている。巨きょ人じんの肩かたに乗り、文字通り世界を股またに掛けたこの半年間――私の生しよう涯がいで最も刺し激げき的だった日々も、いよいよ終点へ辿たどり着こうとしている。その地には、覇道鋼造をその人たらしめる最大の秘密があるというが、それははたして、いかなる

　ドオン――

「きゃあっ!?」

突とつ然ぜんの衝しよう撃げきに、車両全体が揺ゆれた。

貨物車の一角に設しつらえられた客室キヤビンの内側は分厚いクッションで内張りされ、荷物やタイプライターは金具で固定されている。とっさに手すりにつかまったニアーラの前を、椅い子すから転げ落ちたエイダがごろごろと通り過ぎた。

「―失礼いたします」

出入り口のドアが開き、覇道鋼造の執しつ事じ、クロフォードがぬっと入ってきた。そして、足元に転がってきたエイダを人形のように両手で拾い上げ、座席に座らせると、つかつかと車窓に歩み寄った。

その時、

ドオッ！

窓ガラスを突つき破やぶって、なにものかが車内に飛び込んできた。巨大な爬は虫ちゆう類るいの鼻はな面づらだ。人間をひと呑のみにできそうな大きさのそれは、しかし窓まど枠わくがちょうど轡くつわのようになって、口を開ひらけないでいる。

「ふんッ！」

クロフォードは大きく踏み込み、岩のような正せい拳けんを放った。鼻面は巨大なハンマーに叩たたかれたように窓枠を外れ、窓の外に消えた。

鼻面の主―列車に併へい走そうしていた二脚歩行の肉食竜りゆうがもんどり打って倒たおれ、後方に遠のいていった。しかし、その体を飛び越えながら、同様の肉食竜が何匹びきも追いすがってくる。

「お嬢じようさん、無事かね!?」

窓の外から、覇道鋼造の声が聞こえてきた。列車の屋根に登っているようだ。

「はァい！」

エイダが天てん井じように向かって声を張り上げると、覇道の声

が答える。

「それはなにより！　──ところでクロフォード、すまんが手を貸してくれ！」

　次いで、機械的な銃じゆう声せいと不規則な爆ばく音おん、そして、獣けものの咆ほう吼こうが聞こえてきた。

「はい、ただ今」

　クロフォードは窓から身を乗り出して答えると、ひしゃげた窓枠を二、三度拳こぶしで叩いて直し、鉄の格こう子しを引き下ろした。

「ええと、なにかお手伝いできることはありますかしら」

　エイダが問うと、クロフォードは隻せき眼がんをわずかにほころばせて、

「それには及びません」

　と言い、割れたガラスを手早く掃はき集めて、客室から出て行った。

　やがて、窓から聞こえてくる銃声と咆吼に「ふんッ！」という気声が加わった。

「お嬢じよう様さま」

　再びタイプライターに向かうエイダに、ニアーラが呼よび掛かけた。エイダが振ふり返ると、ニアーラは鉄格子の隙すき間まから外を覗のぞきながら言った。

「──こういうことも、お書きになっておいたほうがいいんじゃないですかねえ」

　ドオン──

　肉食竜の体当たりか、爆ばく薬やくの衝撃か、列車が再び大きく揺れた。

「いいんです、こういうことは」

エイダはその場に足を踏ん張りながら、意地になってタイプを打ち続ける。

「私は覇道氏の活動の経済的、文化的意義について記述しているのです。オカルトとか獣人とか大立ち回りとか──いいんです、そういうのは！」

+

この半年間の旅の中、一行は十数回にわたる獣人群の襲しゆう撃

げきを受けていた。〝D　　D
ダークネス・ドーン〟と名乗る秘密結社の走そう狗くだ。

〈闇色のダークネス夜明け団・ドーン〉。この神秘主義の秘密結社は、創設からしばらくの間は、好こう事ず家かの文化クラブといった態ていの社交団体にすぎなかったという。

だが、ロブディの登場によって、すべてが変わった。

ラアル・ロブディ。生年及および経歴は不ふ詳しよう。一八八〇年代の入団時にはすでに老人であったと言われる彼は、瞬またたく間に結社の実権を掌しよう握あくした。彼の目的は手て慰なぐさみ程度の素人しろうと魔ま術じゆつではなく、上流社会の人間を含ふくむ団員たちの資金、権力、そして人脈だった。

ロブディは他たの団員に向精神性の薬物や東西の幻げん惑わく的な秘術を処方し、その魂たましいを呪じゆ縛ばくしていった。彼の活動に抵てい抗こうする者は次々に怪かい死しを遂とげ、従順な者もまた、ロブディに財産を残して消えていった。

いつしかD∴D∴は、ロブディと彼がいずこからか連れてきた獣人

たちに支配されていた。今やD∴D∴はロブディそのものであり、配下の獣人たちはその強力な手足だった。

彼らは〝ズアウィア〟と呼ばれる古代神を信しん奉ぽうしていた。ロブディが禁断の文ぶん献けんを元に見つけ出したという、失われた邪じや教きようの神だ。

彼らは魔ま道どうの知を以もつてこの世に覇はを唱えんと、強力な魔導書や魔術的物品を世界中から掻かき集めていた。中でも、覇道鋼造が大英博物館より持ち出した〝マナウス神像〟は彼らの邪じや神しん信しん仰こうの中ちゆう核かくをなすものであり、彼らはそれを狂きよう気きじみた熱意を以て欲ほつしていた。

そして、現在もまた。

ドドドドドッ――！

工場の機械のような規則的な音を立てながら、貨物車の屋根に設置されたガトリング機き関かん銃じゆうが火を噴ふいた。群れをなして走る肉食竜が、次々と血ち煙けむりを上げて倒れる。

機関銃を操作しているのは覇道鋼造だ。銃じゆう座ざに乗った六重銃じゆう身しんを左手で取り回し、右手で発射ハンドルを回し――そして、時おりベルトにはさんだダイナマイトを抜ぬいて、くわえた葉巻から導火線に火を移しては、群れの密集部分に投げ込む。土つち煙けむりが高々と上がり、ちぎれた肉食竜の体が空中で融ゆう解かいし、赤黒い雨となって撒まき散らされた。

一方、肉食竜の中でも身軽なものは、地上から列車の屋根に跳とび移り、覇道を直接襲おそってきた。弾だん薬やく箱を運んでいたクロフォードが、箱を足元に置き「ふんッ！」身みの丈たけを超こえる殺人蜥蜴とかげを鉄てつ拳けんの一いち撃げきで叩たたき落とした。

やがて、列車は速度を上げ、群れを引き離はなし始めた。

前方数百メートルの地点に、橋が見えていた。幅はば百メートルあまりの峡きよう谷こくを渡る大鉄橋だ。奇き妙みようなことに、この橋は都市部の大だい河か川せんに掛かるような跳ね橋の構造を持っていた。現在のような事態を想定した覇道の指示によって造られたものだ。列車が渡り切ったところで橋を上げてしまえば、恐き

よう竜りゆう群の追走を遮しや断だんできる。

　が―その時、荒こう野やに照りつける陽ひが、一いつ瞬しゆん翳かげった。列車の上空を三匹びきの翼よく竜りゆうが通過したのだ。

　翼竜はそれぞれ後こう肢しに小さな包みをつかんでおり、列車を追い抜いた先―鉄橋の上で、それをぽろりと落とした。

「いかん―停車しろ！」

　覇道が叫さけぶと同時に、前方に巨きよ大だいな火柱が噴ふき上がった。翼竜の運んできた爆薬によって、鉄橋が爆ばく破はされたのだ。

　鉄骨を支えるボルトが弾はじけ、ワイヤーがちぎれ、橋げたがゆっくりと崩ほう壊かいした。急制動を掛けられた機関車は、しかし、車輪から火花を散らしながらも勢いのままに前進を続け、ついには線路の切断部から渓けい谷こくに身を投げた。数百メートル下の谷底に叩きつけられれば、車体は全ぜん壊かい、乗っている覇道らは即そく死しだ。

　その時、

　ゴゥ―！

　叩きつけるような突とつ風ぷうと共に、対岸のはるか彼方かなたから闇色の巨きよ鳥ちようが飛来した。

　魔ま術じゆつ師しアズラッドの鬼械神デウス・マキナ、アイオーンだ。

　刃やいばのような翼つばさが、三匹の翼竜を腐くさった木の実のように弾き散らした。

　だが、列車はすでに、ゆるやかな放物線を描えがきながら落下しつつある。超ちよう常じようの威い力りよくを持つ鋼はがねの神とて、もはやこの事態を解決はできまい―が。

　アイオーンは空中に急停止すると〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟を振りかぶった。全身の表面に輝かがやく令辞コードが駆かけ巡めぐり、一瞬後、その光は偃月刀の刀身に集中した。

偃月刀を真下に投げ放つと同時に、鋼の巨きよ体たいが弾けるように分解した。

一方、巨大な魔ま刃じんは超ちよう絶ぜつ的な魔ま力りよくを孕はらんだまま地面に突つき立ち、同様に分解。地表に解き放たれた令辞コード群が稲いな妻ずまのように二条のレールを疾はしった。

その行き着く先、崩壊する鉄橋が―あろうことか―まるで時間が逆転したかのように再生した。アイオーンの機体を維い持じしていた構成術式が書き換かえられ、橋ひとつを瞬またたく間に組み立て直したのだ。空中に放ほうり出された列車もまた鉄橋の一部として軌き上じように収まり、そして、数秒で峡谷を渡わたり切った。

その直後に術が解け、鉄橋は再び崩壊を始めた。追走する二に脚きやく竜りゆうが、分解する鉄骨に巻き込まれながら谷底に落ちていく。

「―いいぞ、上出来だ！」

覇道は天を仰あおぎながら叫んだ。

その視線の先から列車の上に、降下―いや、落下してくるものがあった。魔術師のアズラッドだ。石炭車に激しい勢いで着地すると同時に術衣が解け、コート姿のアズラッドは石炭の山の上に四つ這ばい、嘔おう吐とした。

「助かったよ、〝マスター・オブ・ネクロノミコン〟。しかし―」

覇道が帽ぼう子しを持ち上げ、にやりと笑った。

「今のは〝機神召しよう喚かん〟を連続で行なうに等しい無む謀ぼうだな。君はもう少し効率的な力の使い方を学ぶ必要があるようだ」

「―その無謀、誰だれのために行なったと思っている」

魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】がアズラッドの傍かたわらで少女の姿を取り、覇道をにらみつけた。

覇道は悪びれもせずに答える。

「無論、私のためだ―だが、それはもっと大きな戦いのためである

とも言える」

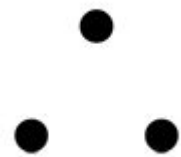
「戯たわ言ごともたいがいにせよ」

　翡翠ひすい色の瞳ひとみが、険を帯びた。

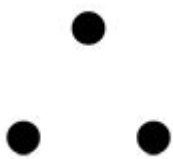
「像はどこだ」

　怨おん敵てきラアル・ロブディの求める〝マナウス神像〟を、覇道鋼造に持たせておく──それは、アズラッドの判断だった。ロブディをも手玉に取る、覇道の抜け目なさに期待したのだ。

　そして、覇道の道行きを追い続けたこの半年間、アズラッドとア



ル・アジフは何度となくD　　D



ダークネス・ドーンと接せつ触しよくし、今しがたのような戦いを繰くり広げることになった。それはアズラッドの目もく論ろむところではあったが、同時に彼の心身を急激に消しよう耗もうさせていた。

　アル・アジフはちらりと己おのが主を見やった。アズラッドは胸むな元もとを押さえ、全身の苦痛に耐たえている。もはや限界──今すぐにも、この状じよう況きように終しゆう止し符ふを打たなければならない。

　アル・アジフの手が、濃のう密みつな魔力と殺意を孕みながら、覇道に向けられた。

「……例の石像を渡せ！」

　必殺の威力を孕む小さな掌を見て、覇道は肩かたをすくめた。

「残念だが、今すぐというわけにはいかん。なぜなら……〝マナウス神像〟は何ヶ月も前に、アーカムへ運び込まれているからだ」

「なに？」

「ロンドンであれを見つけたのは僥ぎよう倖こうだった。おかげで、手品師が硬貨を持っていない手に観客の目を引き付けるように、この鉄道から奴やつらの目を引き離はなしておくことができた」

「つまり……おまえは囮おとりだったということか、覇道鋼造」

　ようやく呼吸を整え、何重もの魔ま術じゆつで体調を補整しながら、アズラッドが身を起こした。

「いかにも」

　覇道はうなずいた。

「この鉄道は私にとってのアキレス腱けんだった。覇道財ざい閥ばつの力を以てしても、五千キロに及およぶ鉄道全体を結界設備で覆おおうことはできなかったのでね。だが、この半年、我々がD∴D∴の連中を引き回している間に、この鉄道は大切な荷を運び終えることができた」

「荷だと……？」

　アズラッドの脳のう裏りに、瞬しゆん間かん、覇道と初めて出会った時の光景が蘇よみがえった。

　──貨物車を突き破って現れた、鋼はがねの拳こぶし。

「その荷とは──」

　バタン──！

　貨物車の屋根の跳はね戸どが開き、ふくれ面つらのオーガスタ・エイダ・ダーレスが、屋根の上に半身を乗り出した。

「みなさん、申しわけありませんけど、もう少し静かにしていただ

けます!?　気が散って構想がまとまりませんの！」

+

　合衆国最古の、そして最新の都市、アーカム。

　北米大陸への殖しよく民みんの最初期から存在したこの英国風の古都は、しかし、自らの生み出した一世の風雲児・覇道鋼造の手によって、世界最大の超ちよう近代都市へと生まれ変わりつつあった。

　手元の地図を見ると、格こう子し状じように区画された旧市街から東方に向かって新設の住宅地や商工業地帯が延のび、旧来の港町キングスポートをも併へい合ごうし、さらに成長を続けている様子が見て取れる。駒こま形がた切きり妻づま屋根の古い街並みを最新の高層建築が取り囲み、呑み込んでいこうとするさまは、アーカムという都市の歴史を象しよう徴ちようするかのようだ。

　―恐きよう竜りゆう群の襲しゆう撃げきから一昼夜の後、列車はニューヨークとプロヴィデンスを経由し、アーカムシティに到とう着ちやくした。

　アーカムは活気にあふれていた。車窓から見える範はん囲いだけでも、建築中のやぐらを組んだ建物がいくつもあり、その足元に往来する馬車の間で、さまざまな服装、さまざまな肌はだの色をした男女が、忙いそがしく立ち働いている。

　覇道財閥による再開発の開始以来、このアーカムに建設の槌つち音おとの絶えることはなく、新たな住居、新たな仕事、新たなチャンスが常に生まれ続けている。その結果、まるで石炭がトロッコで運ばれるように、人種、民族、年ねん齢れい性別を問わず、あらゆる種類の移民たちが、蒸気船に乗って世界中からこの都市に集まりつつあった。彼ら移民はアーカムという都市に生かされ、また同時に、彼らの持つ熱量がアーカムという複雑な機械を駆く動どうする。都市と人の群れは、その総体を以もつて、ひとつの巨きよ大だいな生命を形作っていた。

　覇道鋼造がアーカム中央駅に降り立つと、たちまちその周囲を何

十人もの人ひと垣がきが取り囲んだ。

　貿易、鉱業、建設といった覇道財閥の主要部門の統とう括かつ者しやに、州や市の行政関係者、ニューヨーク市場の大投資家といった歴々の人物らが、覇道鋼造直じき々じきのコメントやサインを求めて駆かけつけたのだ。

　覇道鋼造は、早足に歩きながら彼らに応対した。上物のスーツを着た紳しん士したちが、山出し同然といった風ふ情ぜいの覇道に追従していくさまは、ある種の滑こつ稽けいさをかもし出すと同時に、覇道鋼造という人間の並外れた活力をも表していた。

　覇道の後について歩きながら、エイダは感極きわまった様子で叫さけんだ。

「ごらんなさい、ニアーラ！　まさに〝台風の目〟ね！　この街は、いえ、今や世界中が覇道鋼造という一人物を中心に回っているのだわきゃああ!?」

　人の渦うずに巻き込まれ、くるくると回転しながら転びそうになるエイダの腕うでを、背後にいたコート姿の男──魔ま術じゆつ師しアズラッドが支えた。

「……前をよく見ることだ」

「どうも、ご親切に」

　エイダが突つき放すように言うと、アズラッドはシルクハットを目ま深ぶかに直し、何事もなかったかのように歩き出す。

「んまっ、なにかしら、あの態度！」

　エイダは両手を腰こしに当て、口を尖とがらせた。

「そりゃあ、砂さ漠ばく育ちの殿との方がたに西せい欧おう式のマナーを要求するほうが間ま違ちがっているのだとは思いますけどね、服装だけ英国紳士を真似まねても中身が伴ともなわないんじゃ逆効果ってものだわ。ねえニアーラ、あなたもそう思わきゃああ!?」

　ニアーラに向かって振ふり返った拍ひよう子しに、エイダは再びくるくると人波に揉もまれる。

　──と、その時。

「道を空けてくれ！」

　覇道鋼造の声が、駅の構内に朗々と響ひびき渡わたった。

「些さ少しような問題については報告には及ばん！　すまないが、私の時間を割さかねばならんほどの案件か否いなか、事前によく検討してからこちらに回してくれ！　『時は金なり』と言うが、覇道鋼造の時間はことに歩合が高いぞ！」

　──なんと、まあ！　仕事絡がらみとはいえ、半年もの間、世界を周遊していた人物の言葉とも思えない。

　しかし、〝覇道のひと声〟の効果は絶大だった。

　モーゼの眼前にて分かたれる紅海の如ごとく、人の海が覇道の前後に大きな道を空け、ふいに左右からの圧力を失ったエイダは、煉れん瓦がの上に尻しり餅もちをついた。

　駆け寄ったニアーラに助け起こされると、エイダは覇道とクロフォード、そしてアズラッドの背を小走りに追う。

　各おの々おのの思惑おもわくを胸に、されど覇道鋼造の威い風ふうに圧おされて物も言えずにいる人々の視線を浴びながら、エイダは揚よう々ようと胸を張り、大おお股またに歩いた。これこそは征せい服ふく者しやの道──覇道鋼造の行く手を阻はばむものは存在しない！

　と──目の前のアズラッドが急に立ち止まり、エイダはその背に鼻からぶつかった。

「もう……なんですの!?」

　アズラッドが立ち止まったのは、前を行く覇道が止まったからだ。

　覇道の正面に、スーツ姿の男が立っていた。ロンドンに現れた〝ミスカトニック大学図書館特とく殊しゆ資料室〟の飛行船部隊を指揮していた男だ。

「やあ、アーミティッジ」

　覇道が帽ぼう子しを持ち上げると、男は挨あい拶さつもせずに切り出した。

「ミスター覇道、〝マナウス神像〟について、報告の用意ができています」

「よし、聞こう」

　覇道が即そく答とうすると、アーミティッジはちらりと覇道の後方に目をやった。

　目ざとくその視線を見て取ったエイダは、

「大事なお話でしたら、部外者がいては支障があるのではありません？」

　と言って、あごをつんと突き上げた。この場合、〝部外者〟とはあくまでアズラッドのことであり、ジャーナリストである自分は例外だ。

　しかし、覇道は振り返ると、エイダとアズラッドを交こう互ごに見ながら言った。

「いや、これは君たちにとっても重要な事こと柄がらだ」

+

　覇道ら一行は二台の自動車に分乗し、アーカム中央駅から覇道鋼造の邸てい宅たくへと向かった。

　覇道邸は都心部から東にやや外れた新興開発地域の只ただ中なかにある。直径三キロほどの大まかな円形をしたその敷しき地ちは、公的な街路図には奇き妙みような空白地帯として記き載さいされている。注意深く地図を読む者ならば、大都市の中にぽっかりと空いた穴のようなその空白部分こそが、アーカムシティの真の中心であることに気づくだろう。放射状の市街鉄道、環かん状じようの大通り、その他、市営の諸設備のすべてが、覇道邸への接続を念頭に造られているのだ。

　覇道邸が単なる大だい富ふ豪ごうの私し邸ていに留とどまらず、世界経済をも支配する覇道財ざい閥ばつの中ちゆう枢すうとしての機能を負っていること、また、このアーカムがそもそも覇道のための都市であることをも併あわせて考えれば、これは別段不自然とも言えないことだ。

　すべての道はアーカムに通ず。そして、そのアーカム市内のすべての道は、この覇道邸に通じている。つまり、地球上の有形無形の活力のすべてが、この〝穴〟に流れ込む仕組みになっているのだ。

　その流れのひとつ──都心の目め抜ぬき通りを抜け、高い塀へいに囲まれた覇道邸の敷地に車が乗り込んだ時、

「──あら？」

　と、エイダが呟つぶやいた。

「なんです、お嬢じよう様さま？」

　横に座ったニアーラが言うのと同時に、運転席のアーミティッジが振り返った。

「どうしました、ミス・ダーレス？」

「あの、今──いえ、なんでもありません」

　自動車が門をくぐった瞬しゆん間かん、奇妙な感覚を覚えたのだ。まるで、なにか透とう明めいな壁かべを突つき抜けたような……だが、一種飛ひ躍やく的なその印象は、彼女自身の合理主義によって棄き却きやくされた。

　一方、前を行く車の中では、

「──結界か」

　とアズラッドが呟き、その懐ふところから発する少女の声が言葉を継ついだ。

（うむ……しかし、これほど強力かつ大規模なものは珍めずらしいな。人じん為い的な結界というよりは、むしろ地相学的な〝聖地〟に近いようだ）

「そう、東洋の風水学の応用だよ」

　横から覇道が説明を入れた。

「元来霊れい的てきな潜せん在ざい力りよくの高いミスカトニック川流域の地相に加え、このアーカムシティの都市基き盤ばん──すなわち各種交通機関に上下水道、ガス管、電でん信しん網もう、その他の厚生施し設せつ──そして、この都市に集つどい、暮らす人々の流れと勢い。これらを調整することによって、強固にして柔じゆう軟なんな生きた結界を発生させている。平たく言えば、アーカムシティの祭祀まつりの如ごとき活力の渦うずに常に取り巻かれることによって、この塀の中は呪じゆ術じゆつ的な独立状態を保っているというわけだ。並みの魔ま物ものなら、この覇道邸はおろか、アーカムの周囲百キロに近づくこともできまいよ」

「──なんのためだ、覇道」

　アズラッドが言った。抑おさえた声の中に、わずかな苛いら立だちがあった。

　彼は復ふく讐しゆう者しやであり、闇やみの住人である。それゆえに、陽ひの当たる世界とは自ら一線を画して生きてきた。だがそれに対して、光と闇の境界を軽々とまたぎ、数百万からの無む辜この民たみを平然と利用する覇道鋼造──この男こそ、一匹ぴきの魔物と言うべきではないのか。

「……おまえがそうまでして守ろうとするものとは、いったいなんだ」

「さて──」

　覇道は常の如ごとく、謎なぞめいた笑えみを浮うかべるのみだ。

　やがて、自動車が停まった。

　覇道邸の本館、左右に大きく翼よくを伸のばす四階建ての建物は、一国の宮きゆう殿でんを思わせる豪ごう壮そうなものだったが、実はそれすらも氷山の一角でしかない。クロフォードとニアーラを地上に残し、残る四人──覇道、アーミティッジ、アズラッド、そしてエイダは、蒸気駆く動どうの昇しよう降こう機きで地下深くに下りた。

数分に及およぶ長い降下の果て、昇降機のケージが止まり、一行は坑こう道どうめいた薄うす暗ぐらい通路に踏ふみ出した。通路はいくらも進まぬうちに袋ふくろ小こう路じになり、覇道は突き当たりの壁に向かって呟いた。

「──我は神意なり」

怪け訝げんな顔をするアズラッドらに向かって振ふり返ると、覇道は苦く笑しようした。

「『我は神意なりI am Providence.』。開門のための符ふ丁ちようだよ」

覇道の背後で、鉄の壁が発光する魔ま術じゆつ文字を浮かべ、重い駆動音を立てて引き上げられた。

床ゆかとの間に広がっていく隙すき間まから漏もれ出すものは、薄うすい光、唸うなりめいた音、そして、腐ふ臭しゆうにも似た濃のう密みつな気配。

「守ろうとするものはなにか……アズラッド、先ほど君はそう言ったな」

昏くらい光を背に、覇道は言った。

「私が守ろうとしているのは、この世界そのものだ」

+

〝魔ま導どう研究所〟──

便べん宜ぎ上じようそう呼ばれるこの地下施設は、覇道財閥の資金援えん助じよによって運営される、ミスカトニック大学の付属研究室である──とは言うものの、実質は魔導書を始めとする呪のろわれた資料を持て余した大学当局が、覇道鋼造にその管理を委ゆだねた、と言うのが正しい。

──そのように説明をしたアーミティッジ自身も、ミスカトニック

大学に籍せきを置きながら、覇道の片かた腕うでとして動いている人間だという。

「現在は、魔導書、アーティファクト、邪じゃ神しんの遺物、その他諸もろ々もろ―〝特殊資料室われわれ〟が世界中から収集した呪術的アイテムのうち、ミスカトニック大の秘密図書館にすら置けない最悪のものが、ここに保管されています」

「……はあ」

エイダは周囲を見回した。

まさに、最悪を絵に描いたような光景だった。

ねじくれた古木を思わせる骨格標本。呪じゆ詛その言葉にも似たかすかな音を漏らす、奇き妙みようなまだら模様の革かわ製せいの楽器。砕くだけた石版に渦うず巻まき状に書き込まれた、見たこともない複雑な絵文字。幻げん惑わくを誘さそう、この世ならぬ色彩を以もつて描えがかれた絵画。どんな使い方をするのかも、そもそも人の手で操作するように作られているのかすらも分からない道具（のようなもの）。……かと思えば、無線機や万年筆のような近代文明の産物の姿もある―が、硬かたい金属製のそれらが、まるで粘ねん土どで作った模型のようにぐにゃりと引き伸ばされ、あるいは皮ひ膚ふ病に罹かかったように表面をただれさせているさまは、やはり奇き怪かいとしか言いようがない。

分厚いガラスケースの中に、あるいは床に彫ほり込まれた魔ま法ほう円の中央に固定された、それら得体の知れない品々―施設内全体に漂ただよう禍まが々まがしい圧あつ迫ぱく感かん、病やんだ生命力とでも言うべき気配は、これらの物品に由来しているのだろう。

「あの、これはいったい―」

「ごらんの通りさ」

覇道は傍かたわらのトーテムポールの頭をトンと叩たたいた。すると、腰こしほどの高さのそれは、柱状の胴どう体たいに彫り込まれた三つの顔面で一いつ斉せいに牙きばを剝むき、怪け鳥ちようの如き叫さけびを上げた。

「きゃっ!?」

　エイダは思わず横飛びに飛び退しさり、アズラッドにぶつかった。

「し、失礼」

　取り澄ました顔を作りながら言うと、無表情なアズラッドの懐ふところから、

（……ふん）

　と、少女の声がした。

　拘こう束そく用のロープを引きちぎらんばかりの勢いでガタガタと動くトーテムポールを、もう一度トンと叩き、覇道は肩かたをすくめた。

「この研究所の戸と締じまりをうっかり忘れるだけで、世界が十回は破は滅めつするね」

「つまり、この地の結界は守りのためのものではなく、これら災わざわいの種を封ふうじ込めるためにある……ということか」

　アズラッドが言うと、

「それもあるが、それだけではない――〝パンドラの箱〟の伝説は知っているだろう？」

　覇道はそう言って、両手を大きく広げた。

「この箱の中には、この世のあらゆる災さい厄やくと共に、ひとつの希望が入っている」

「希望……？」

　周囲の物品から慎しん重ちように距きょ離りを取っていたエイダが、顔を上げた。「希望」などという言葉は、この場にはまったくそぐわないように思える。

「そう、それは人類最後の――」

　覇道の言葉を、懐かい中ちゆう時計を手にしたアーミティッジがさえぎった。

「ミスター覇道。まずは状じよう況きようの確かく認にんを願います」

　足早に廊ろう下かを歩きながら、アーミティッジは覇道に報告する。

「──〝マナウス神像〟に対しては、四ヶ月前の段階で、素材の試験及および、Ｘ線、音おん響きよう、霊れい視しによる内部観察を行ないました」

「霊視は少々気が早かったな」

　アーミティッジはうなずいた。

「担当した霊れい媒ばいが死亡しました。指示を出した私のミスです」

「いや、私が注意しておくべきだった──死体の状態は？」

「死亡までの十数秒の間に、高熱による皮膚のただれと腫しゆ瘍よう状の組織変異が全身に現れました。検死の結果、とりわけ眼球と脳の症しよう状じようが顕けん著ちよ──ヨグ＝ソトースとの接せつ触しよくに類似する状況と判断できます」

「やはりな……像の内部には〝無限の心臓〟が仕込まれていたわけだ」

「心臓……？」

　アズラッドの呟つぶやきに、懐の魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】が答えた。

（〝無限の心臓〟──〝ヨグ＝ソトースの影かげ〟の一形態。大規模な儀ぎ式しき魔ま術じゆつの中ちゆう核かくとなり、周囲の空間構造を変化させる呪じゆ術じゆつ的構造物だ。機能的には、アイオーンの中ちゆう枢すうたる〝アルハザードのランプ〟に極めて近い）

　魔導書の言葉を、覇道が引き継ついだ。

「しかし、〝アルハザードのランプ〟の影えい響きよう力りよくが術者の霊れい力りよくの限界に制限されるのに対して、〝無限の心臓〟は異界につながる門を開き、事実上無限量のエネルギーをこの

世に呼び込むことができる。これひとつで地球をも破は壊かいし得る、まさしく神の力の源泉だ」

　アーミティッジがうなずき、さらにその言葉を継ぐ。

「その力の暴発を防ぐため、現在は試験用の〝守護神機関〟の内部に安置していますが、しかし──どうしました、ミス・ダーレス？」

　無言で後に続くエイダの表情を見て、アーミティッジが言った。

「いいえ、なんでもありません」

　と言って、エイダは微笑ほほえんだ。

「実に興味深いお話ですわ」

　アーミティッジはわずかにうなずくと、報告を再開する。

「しかし、魔ま術じゆつ師しならぬ身には、その実効性は検証不可能です。対処法の手順マニユアル化が急がれていますが、現時点ではミスター覇道を始めとする少数の個人の才能に頼たよる他ほかは──」

　アーミティッジの言葉を聞き流しながら、エイダは再び眉まゆ根ねを寄せて黙だまり込んだ。

　──魔術師を自じ称しようするアズラッドや彼が連れ歩く少女（？）はもちろん、覇道鋼造とその配下の言動にも、非合理かつ迷信的な要素が多々含ふくまれる。そのことはこの半年の経験から重々承知しているし、むしろ、もつれた紐ひもの如ごとき不可解を直視し、理性の刃やいばで両断してのけることこそを自分の役割と任じてきたが……〝結界〟だの〝神の力〟だのといった言葉が当然の如く飛び交かうこの状況は、どうにも雲行きが怪あやしい。

+

　一行が通されたのは、大聖堂を思わせる巨きよ大だいなホールだった。

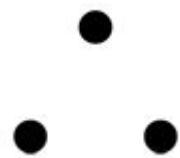
ここはある種の実験室であり、同時に〝守護神機関〟なる装置そのものである―と、アーミティッジが説明した。

天てん井じようは闇やみに呑のまれ、正確な高さは分からない。床ゆかの広さについても同様だが、おおむね巨大な円形をしていることは見て取れた。わずかな照明装置の他、調度の類たぐいは一いつ切さいない。そこにあるのはただ広大な空間と、金属製の床一面を埋うめ尽つくす複雑な魔ま術じゆつ的紋もん様ようのみだった。

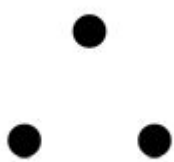
―いや、その空間の只ただ中なか、床の中央と思おぼしきあたりに、ただひとつの構造物があった。

高さ一メートル、直径三メートルほどの円形の台座テーブル。

その上に、見覚えのある物体が安置されていた。



霸道鋼造が大英博物館から盗ぬすみ出し、D



D　　ダークネス・ドーンが付け狙ねらい、そしてアーミティッジが極ごく秘ひに輸送した、〝マナウス神像〟だ。

その禍まが々まがしい姿を目にした瞬しゆん間かん、

―ざわり―

エイダは空間が変質したかのような異様な感覚を覚えた。かつて博物館でこの石像を見た時と同様―いや、この研究所内の得体の知れない気配の中で、ますますその奇き怪かいな印象は強まっている。

「これから〝無限の心臓〟を発現させ、然しかるのち再度封ふう印いんする」

　覇道は一同を壁かべ際ぎわの、床の紋様の一部が円形を成している部分に立たせた。室内でも特に魔術的防ぼう御ぎよを強化された防護円だという。

「準備はいいかね？　──では、始めよう」

　壁かべに設置された伝声管に向かい、アーミティッジが指示を出した。

「昇しよう圧あつ子し展開」

　と──重い機械音と共に、テーブルの上に何本もの金属柱がせり上がった。滑なめらかな平面と刃は物もののような辺で構成された、細長い直方体。それらが一本ずつ伸のび上がるさまは、車座に座り込んでいた人間が順番に立ち上がる仕し種ぐさを思わせた。

　やがて、すべての金属柱が二メートルほどの高さに伸び切った。〝マナウス神像〟を取り囲むように並んだそれは、巨大な歯車の歯のようでもあり、古代人の遺のこした環かん状じよう列石のようでもある。

「星せい辰しん配置を第八月・第一日に設定」

　金属柱のうち何本かが伸び縮みし、また、呪じゆ紋もんを刻印された床の一部が星座板のように回転し、特定の位置を取って止まった。

　覇道は魔導書【機械語写本】を左手に開き、右手をページの表面に走らせた。パンチカードに記述された内容を、点字のように読み取っているのだ。

　外なる虚こ空くうの闇に住まいし者よ

　今ひとたび大地に現れんことを

　我は御おん身みに願い奉たてまつる

時空の彼方かなたに留とどまりし者よ

我わが嘆たん願がんを聞き入れたまえ

覇道が口こう訣けつを唱え始めると、室内の禍々しい気配が濃のう度どを増し、床や台座、金属柱の表面に刻印された紋様が青白く輝かがやき始めた。

「機関始動。時計回りクロツクワイズ、回転数十五」

アーミティッジが命じると、台座の円周部が石柱ごと回転を始めた。外周を四秒ごとに一回転する程度の、ごくゆっくりとした速度だ。

回転に伴ともなって、円柱は一本ずつ、独特のリズムを以もつて高さを変化させた。表面の紋様も刻々と書き換かわっている。規則的な駆く動どう音おんと相まって、その光景は異形の巨きよ人じんの輪りん舞ぶを思わせる。

御おん身みは〝門〟にして〝鍵かぎ〟

〝道〟にして〝道を開く者〟

「回転数三十」

台座の回転が倍ほどに速まった。

また、機関部の駆動音とは別に、唸うなるような音が響ひびきだした。金属柱が音おん叉さのように共鳴しているのだ。

ぽこり――

〝マナウス神像〟の胸のあたりから、泡あわのようなものがにじみ出た。

不可思議な虹にじ色いろの光を放ちながらシャボン玉のように浮うかび上がったそれは、神像の頭上に滞たい空くうした。

エズファレス

オリュアラム

イリオン＝エシュティオン

エリュオナ──

「六十」

続いて、二つ、三つと〝泡〟が浮かび上がった。

その数は七、十三……いや、無数。

球体群は生き物のように脈動しながら膨ふくれ上がり、ますます多く、ますます巨きよ大だいになっていく。球体と金属柱、またそれら同士の間に電でん弧こが疾はしるさまは、あたかも巨大な発電機ダイナモのようだ。

「なに……なんですの、これ？」

エイダはあたりを見回した。覇道もアーミティッジも自分の作業に集中している。そこで、エイダはやや逡しゆん巡じゆんしたのち、アズラッドのコートの袖そでをそっとつかんだ。

オレア

オラシュム

モズィム

「百二十一」

　高速で回転する列柱は、もはや光の円えん筒とうのようにしか見えない。

　円筒の上空に、奇き怪かいな存在が顕けん現げんしていた。

総体での高さはすでに二十メートルを超こえているだろう。うねり、のたくり、脈動し、回転し、分ぶん裂れつし、融ゆう合ごうし、刻々と色しき彩さいと明度を変える、巨大な、そして微び小しような泡の群れ。円筒の中から空中に向けて、異形の泡が溢あふれ出している。

その泡のひとつひとつが、異世界に通じる次元の門だ。あるものは灼しやく熱ねつの、あるものは極寒の、あるものは猛もう毒どくの、その他の多くのものは形容すら不可能なおぞましい世界につながっている。

異形の神の鼓こ動どうが、広い室内を震ふるわせた。中央の装置、そしてこの部屋全体が、ひとつの巨大な心臓になったかのようだ。

鼓動は急速に速まっていき、そして、無数の泡の表面が、炎ほのおを、冷気を、瘴しよう気きを、唸りや笑い声、あるいは精神的な波動を──ありとあらゆるこの世にあってはならぬものを放出し始めた。

「覇道──？」

（覇道鋼造、儀ぎ式しきを終しゆう了りようしろ！　これ以上は危険だ！）

しかし、覇道はその存在から目を逸そらさず、口訣を唱え上げた。

全にして一

一にして全

全なるものは〝無限〟に通ず！

空間が決壊した。

次元の裂さけ目めから、混こん濁だくした異界が怒ど濤とうとなって押し寄せた。一層、二層、三層──床ゆかに描えがかれた七重

の魔ま法ほう円えんが、負荷に耐たえかねたように内側から弾はじけ飛んでいく。

「きゃああっ⁉」

　しがみつくエイダを背後にかばいながら、アズラッドは一歩前に出た。右手のステッキを〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟に変化させ、防ぼう御ぎよ呪じゆ紋もんを刀身に浮かべる。

　同時に、その懐ふところから魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】のページの束が飛び出し、瞬またたく間に少女の姿を取ると、アズラッドと並んで防御の姿勢を取る。

　一方、覇道とアーミティッジはその場を動かない。アーミティッジは冷静そのものの表情、覇道に至っては不敵な笑えみさえ浮かべている。

「覇道―⁉」

　四層、五層、六層―そして、最外層が弾けた瞬しゆん間かん、覇道は右手を前に掲かかげ、津つ波なみのような混こん沌とんに向かって叫さけんだ。

　　カルドゥレク―ダルマレイ―カダト‼

　荒あれ狂くるう混沌が、瞬間、意思を持つ生き物のように、ぴたりと動きを止めた。

　そして、

「逆回転カウンター！」

　アーミティッジの号令と共に、台座の回転方向が反転した。空中の球体群から発していた強きよう烈れつな圧あつ迫ぱく感かんが消え―いや、吸い込まれるような急激な減圧となった。回転する列柱によって外向きに引き出されていた力が、その方向を逆転されたのだ。

すさまじい圧力を内向きに掛かけられた球体群は、瞬間、群れなす太陽のようにまばゆく発光すると、一いつ斉せいに弾はじけて消え、解放された熱、光、音、その他諸もろ々もろの混沌の構成物は、回転する円筒の中に吸い込まれていった。

ガシュン──

台座の回転が止まり、列柱は一斉に台座に引き込まれた。

〝マナウス神像〟は、何事もなかったかのように台座の中央に佇たたずんでいる。

だが──荒れ狂う巨きよ大だいな存在の気配は、しばしの間、焦こげた金属の匂においと共に、闇やみと静せい寂じゃくの中に残留していた。

「よし、完かん璧ぺきだ」

覇道が大きく息をつき、振ふり返った。額に汗あせが光っている。

「〝守護神機関〟は第七段階までの開放に耐えられる。〝無限の心臓〟が予期せず発現しても、通常の封ふう印いん儀ぎ式しきによる対応が可能だろう」

「それを聞いて、安心しました」

相変わらず冷静そのものといった調子で言うアーミティッジだが、その肩かたから、わずかに力が抜ぬけた。この男は半年の間、覇道鋼造に預けられた〝マナウス神像〟という爆弾を、手て探さぐりで管理してきたのだ。

「……いささか驚おどろいた」

アズラッドの傍かたわらで、アル・アジフが呟つぶやいた。

「ああ……〝無限の心臓〟とやらの力は、アイオーンに匹ひつ敵てきするようだな」

「そうではない。あそこまで成長させた〝門〟を、覇道鋼造が抑え切ったことこそが驚きよう異い的なのだ。あの男の使っていた術式は妾わらわの裡うちに記き載さいされているものと変わらない。あ

の状じよう況きようでは暴走は必至だったはずだ」

　アズラッドは台座に目をやった。

「つまり、あの機械仕じ掛かけの祭さい壇だんに、特別な力があるということか」

「──その通り」

　魔ま術じゆつ師しと魔導書の会話に、覇道が割って入った。

「〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟。儀ぎ式しき魔術の無人化と高速化を目的として作られた装置だ。今はまだ実験段階だが、完全な機械化が成った暁あかつきには、術者の限界に縛しばられることなく、文字通り無限の力をも制せい御ぎよできる」

「愚おろかな……徒いたずらに〝門なる神の鍵〟をもてあそぶ者は、必ずや非ひ業ごうの最期を遂とげるぞ」

「愚かかもしれんが、目的のためには不可欠なリスクだ」

「〝目的〟！」

　腰こしを抜かし、アズラッドのコートの裾すそにすがりついていたエイダが、ぴょんと立ち上がった。

「覇道鋼造の行動の基き盤ばんとなるもの、それこそはこの取材の焦しよう点てんとも言える最重要のテーマですわ！　で──その目的とはなんですの？」

「百聞は一見にしかず」

　覇道は含ふくみのある笑みを浮うかべると、踵きびすを返した。

「行こう。次こそが一番の出し物だ」

+

　魔ま導どう研究所よりさらに深い、覇道邸てい地下の最深部。先

ほどの〝実験室〟などの何百倍も広い、造船所を思わせる巨大工場の中央に、それはあった。

「あの、これって……」

　エイダはぽかりと口を開けながら、上方を仰あおいだ。

　その視線の先にあるものは――

　鋼はがねの、骸むくろ。

　もとより生命のないものを〝骸〟と呼ぶのもおかしな話だが、エイダがそのように感じるのも無理はない。

　直立すれば十階建ての塔とうほどにもなるだろうか。巨大な人型をしたそれは、今は首筋から背中にかけての何点かを支点に、天てん井じようからクレーンで吊つり下げられている。顔をうつむかせ、背を丸め、手足をだらりと垂らし――おそらく、人体の機構を模した構造物が〝脱だつ力りよく〟の際に自然に取った姿勢なのだろうが、その姿勢が胎たい児じと縊い死し体たいを混ぜ合わせたような奇き怪かいな印象を形作っている。

〝死〟の印象をもたらすものは、姿勢だけではない。ところどころ分厚い鋼板に鎧よろわれてはいるものの、それの全身の七割ほどは、人間じみた骨格や複雑な機械装置を剝むき出しにされ、まるで体内の組織を剝き出しにした人体標本のようだ。

　さらに、鋼の巨きよ体たいの周囲には作業用の足場が組まれ、小さな人間が――いや、それが大きすぎるのだ――体中のいたるところで部品の交こう換かんや点検を行なっている。このありさまもまた、動物の死し骸がいにたかる蟻ありや蛆うじ虫むしの群れを思わせる。

　総じて、無機物を用いて死と腐ふ敗はいを表現したオブジェのような、不気味な印象であった。

「……これって、なんですの？」

　エイダは顔をしかめながら振り返った。

「やはり……鬼械神デウス・マキナか。アリゾナから運んでいたものだな」

傍らのアズラッドが呟くと、エイダはますます眉み間けんのしわを深くする。

──やっぱり、これもそういうのの仲間なのね。

思えば、この奇怪な死にかけの巨人は、どこかしら、〝自じ称しよう魔ま術じゆつ師し〟アズラッドの操あやつる巨人〝アイオーン〟に似た感じもする。どの道、真っ当なものではあるまい。

「うむ。お嬢じようさん、紹しよう介かいしよう」

覇道はエイダの表情を意に介かいさぬ様子で、右手を大きく〝骸〟に向けて広げた。

「鬼械神デウス・マキナ〝デモンベイン〟だ」

ゴゥ──

工場内の空気が震ふるえた。

名を呼ばれた〝骸〟が、覇道の呼び掛かけに応じるかのように、その体を震わせたのだ。

作業中の工員が、一いつ斉せいに飛び退のいた。

巨体を支える鎖くさりや足場がぎしぎしと音を立て、心臓の位置に当たる汽罐ボイラー状の部品から鋼の全身にかすかな光の波が疾はしり、四し肢しの末まつ端たんに至って消えた。

「い……生きてる!?」

思わず非科学的な感想を漏もらすエイダに、覇道はうなずいた。

「まだ生まれていないがね。……彼こそは人類最後の希望、アーカムの子にして世界の守護者──そして、私の〝目的〟だ。アーカムシティも覇道財ざい閥ばつも、すべては彼のために存在する」

「……〝魔を滅ぼすものＤＥＭＯＮＢＡＮＥ〟か。名前だけは勇ましいな」

再び脱力し、ぐったりと吊り下げられた巨体を見上げながら、アル・アジフが言った。

「それにしても、鬼械神デウス・マキナを工場で作ろうとは……妙みようなことをする」

　場内の様子から見て、少なくともここ数ヶ月の間は同様の作業が継けい続ぞくされているのだろう。本来なら〝機神召しよう喚かん〟の術式によって一いつ瞬しゆんのうちに組み上げられ、術を解けばその場で分解される鬼械神デウス・マキナを、何ヶ月も──おそらくはこの先何年もの時間を掛けて、あえて物理的に組み立てる。その行こう為いに、いったいなんの意味があるのか。

　アル・アジフの疑問に、覇道が答えた。

「デモンベインは厳密には魔ま術じゆつによって造られた鬼械神デウス・マキナではなく、鬼械神デウス・マキナを模して造られた機械人形オートマトンとでも言うべきものだ。素材の調達には一部錬れん金きん術じゆつを使用したが、個々のパーツは純じゆん粋すいな通常物質で作られている。また、その動力源は、胸部に組み込まれた新型の〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟によって機械的に汲くみ出される、異界の熱量──この意味が分かるかね？」

「えっ？　さ、さあ……」

　ふいに水を向けられてあわてるエイダに代わり、アズラッドが答えた。

「つまり……この鬼械神デウス・マキナは術者の霊れい力りよくに拠よることなく存在し、活動する」

「そう、機体の制せい御ぎよには魔ま術じゆつ師しの能力を必要とするが、そのことによって術者の命を削けずることはなく──むしろそれを補強しながら、何時間でも何日間でも、いや、理論上半永久的に稼か動どうすることが可能だ」

「永久に動き続ける鬼械神デウス・マキナだと……？」

　アル・アジフが眉まゆをひそめた。

「馬ば鹿かな……それはまるで神そのものだ。もしそんなものが存在すれば、確実に世界の理ことわりが歪ゆがむぞ」

「世界はすでに歪みつつある」

と、覇道は言った。

「アル・アジフ、君も気づいているだろう。君たちのかかずらわっ

ているD　　D　　ダークネス・ドーンの活動とて、世界規模の異変の、ほんの一いつ端たんにすぎん。ここ数十年の間に顕けん著ちよな、怪かい事件の頻ひん発ぱつ、いくつもの魔術結社の暗あん躍やく、異形の眷けん属ぞくの跳ちよう梁りよう―これらはすべて予兆だ。近いうち……あと三十年もしないうちに、世界は決定的に変質する。現世と彼ひ岸がんを隔へだてる壁かべが崩ほう壊かいし、くびきを解かれた混こん沌とんが人間の世界を蹂じゆう躙りんする、〝怪かい異いの世紀〟の始まりだ」

「言われるまでもない。そのような事態を防ぐためにこそ、我らは戦っている」

「人知れず孤こ独どくな戦いを続け、己おのが身を削って世界を救う―か。大した美談だな」

覇道は皮肉めいた仕し種ぐさで肩かたをすくめた。

身を乗り出すアル・アジフの肩を、アズラッドが押さえた。覇道は言葉を続ける。

「今までなら、それでもよかっただろう。だが、ひとりの人間の力には限界がある。下級神の眷属やわずかな次元の綻ほころびを相手にしているうちはまだいいが、もし〝旧支配者〟そのものと直接に相見あいまみえたならば、人間の魂たましいなどは即そく座ざに焼き切れてしまう」

「そのようなことは……」

「そのようなことは、もとより承知している」

口くち籠ごもるアル・アジフに代わり、アズラッドが言った。

「―それが魔ま導どう書しよとの契けい約やくというものだ」

「だが、それは貴重な才能を持つ魔術師を犬死にさせていいという意味ではない」

「なに……!?」

　アル・アジフの翡翠ひすい色の瞳ひとみが、険を帯びた。

「はっきり言おう。君たちの鬼械神デウス・マキナ・アイオーンでは、この先の百年を戦うことはできない。今、我々に必要なのは、終わりなき戦いを戦い抜ぬくことのできる、無敵にして不ふ滅めつの人造神だ」

「ふん、大きく出たな」

　アル・アジフはデモンベインの方向をあごで指した。

「……このまがい物がそうだとでも言うつもりか」

「まがい物なればこそ、だ」

　と、覇道は答えた。

「そもそも、鬼械神デウス・マキナは人間のために作られるものではない。彼らの本質は人外の論理の顕けん現げんであり、術者はこれに適応するために自らも人外の存在と化すか、さもなくば過度の負担を強しいられ、消しよう耗もうし尽つくして死んでいくのみだ。その点は君たちのアイオーンも例外ではない。―しかし、デモンベインは違ちがう。彼こそはこの世界に唯ゆい一いつの、人間のための鬼械神デウス・マキナなのだ」

「ふん、どうだか―」

「―すばらしいわ！」

　それまで神しん妙みように話を聞いていたエイダが、突とつ如じよ、ポンと手を打ち合わせた。

「つまり、この巨きよ人じんの使命は、これまで出会ったような怪生物や怪現象に対たい峙じし、それらを駆く逐ちくすることにあるのですね!?」

エイダは腰こしに手を当て、鋼はがねの巨きよ体たいを見上げた。

──機械力を以もつて魔を払はらう〝科学の巨人〟。そう思って見てみれば、第一印象の異様さも薄うすれ、おどろな巨きよ大だい骨格さえも頼たのもしく思えてくる。加えて、あの〝自じ称しよう魔ま術じゆつ師し〟コンビの使う、いんちき臭くさい空飛ぶ巨人の機能を技術的に再現し、しかもそれ以上の力を持つ──という点も、まったくもってすばらしい。

「ふむん……なんだか他人とは思えませんわね。それに、その骸がい骨こつっぽいお顔も、よく見ればけっこうハンサムかも。ああ、ミスター覇道の駆かるこの英知の巨人が、恐きよう竜りゆうとか魔ま法ほう使つかいとかいったややこしいのをドバーンと蹴け散ちらすさまが目に浮うかぶようですわ！」

鼻息も荒あらく腕うでを組み、なにやらいいように納なつ得とくしてひとりうなずくエイダを無視し、アズラッドは覇道に言った。

「仮にこの鬼械神デウス・マキナがおまえの言う通りのものだとしても、俺にはなんの関係もない。……俺は俺の戦いをするのみだ」

「関係は大ありだ、アズラッド。君たちには魔と戦う使命があり、ここにはそのための唯一の手段がある。ならば、採るべき道もまたひとつだ」

覇道はデモンベインを背にして立つと、両手を左右に広げた。

「我々と共に〝神の胎たい盤ばん〟たるこのアーカムシティを守り……そして、完成するデモンベインに乗って戦え」

「えっ？」

「今、なんと……？」

エイダとアル・アジフが声を上げ、アズラッドは無言のまま、いぶかしげな表情を浮かべた。

「デモンベインの操縦には魔ま術じゆつ師しが必要だ。それも優ゆう秀しゆうな者であるほどよい。その点、〝マスター・オブ・ネクロノミコン〟ならば申し分ない」

　覇道はアズラッドを正面から見つめた。いつになく真しん剣けんな表情だった。

「アズラッド、君が世界を守れ」

「──断る」

　アズラッドは即座に答えた。

「俺がおまえと共に戦うことはない」

「なぜだ──己おのれの復ふく讐しゆうのためか」

　覇道は眉まゆをひそめた。

「しかし、君の力はそんなことに使うべきではない。それが分からん君ではないはずだ」

「……おまえのやり方は好かない。それだけだ」

　そう言って、アズラッドはちらりとエイダを見た。

「な、なんですの？」

　アズラッドはそれには答えず、

「出し物は尽きたようだな……帰るぞ」

　と言って、踵きびすを返した。

　コートの背を小走りに追ったアル・アジフが、バラリと紙束に変じ、魔導書の姿になってアズラッドの手に収まる。

　アーミティッジが覇道の表情をうかがい、小さくうなずくと、アズラッドの後を追った。

「地上までご案内いたします」

　覇道はしばらくデモンベインを見上げていたが、アズラッドの足音が聞こえなくなると、ふと、息をついた。ほんの一いつ瞬しゅん、体がひと回り小さくなったかのように見えた。

「……ほんと、なんなのかしら、あの人！」

　アズラッドの去った戸口を、こちらは肩かたを怒いからせながら見送っていたエイダが、ふんと鼻を鳴らした。

「ミスター覇道、あの手合いに拒きよ絶ぜつされたからといって、気にすることなどありませんわ！　このオーガスタ・エイダ・ダーレスの筆による『鋼の巨人──覇道鋼造、その驚おどろくべき使命（仮）』が出版された暁あかつきには、全世界があなたの行動を理解し、惜おしみない協力を申し出ることになるのですもの。そうなれば、その……魔術師？　なんて、百人でも千人でも、向こうから好きなだけやって来ますわ！」

「いや……彼の言う通りだよ」

「ええ、ええ、そうですとも。だいたいああいう一いつ匹ぴき狼おおかみ気取りの人って、根はただの気取り屋に決まってるんです。なーにが『おまえのやり方は好かない』ですか。ほんとはあのカラスみたいな変なのよりも、この大きくて強そうで（慣れればわりと）格好いいデモンベインにちょっと触さわってみたいくせに──え、『彼の言う通り』って？」

「実際、私のやり方には問題があった。反省している」

　覇道は後ろを向いたまま頭を掻かき、そして、再びデモンベインを見上げた。

「お嬢じようさん、取材はこれで終わりだ。ロンドンに帰りたまえ」

「……はい？」

+

　日暮れと共に、雨が降り始めた。

　霧きりと夕ゆう闇やみに急速に煙けむっていく景色の中、人の流れが足早に変化し、商店は店じまいを始め、また、いくつかの街路にガス灯が点ともり始め、ミスカトニック川の水門が調整され……それらの動きが複雑に影えい響きようし合い、都市の霊れい相そう

を微び妙みように変化させていく。

　気候、時刻、星の巡めぐり、その他諸もろ々もろの要素を統合しながら、都市全域の霊れい的てきな防備を常に最高の状態に保つ。なるほど──その点において、覇道鋼造の言葉に偽いつわりはなかった。

　大通りを見下ろしながら、アズラッドは感かん嘆たんすると同時に、それを確かく認にんさせるためにホテルの最上階をあてがう覇道のやり口に、辟へき易えきもしていた。

（覇道鋼造の申し出……あれは悪いものではなかった）

　懐ふところから、アル・アジフがぽつりと言った。

（〝デモンベイン〟と言ったか──まがい物とはいえ、あの鬼械神デウス・マキナには確かに力がある。また、覇道鋼造とその配下の能力も疑いようはない）

「俺には関係のないことだ」

（妾わらわとて馴なれ合いは好まぬ。だが、汝なれの背中を守る者は必要だ）

「守るつもりも、守られるつもりもない」

（……汝は他人に気を遣つかいすぎる）

　アル・アジフは苦々しく言った。

（妾とて、他人を巻き込むことを望みはしない。しかし、魔ま道どうの力とは本質的に不自然を孕はらむものだ。そのひずみを一身に引き受けようとすれば、誰だれよりも先に汝自身が破は綻たんする）

「アル・アジフ。おまえこそ、要いらぬ気を遣うな」

　アズラッドは静かに言った。

「俺はラアル・ロブディを追い、斃たおす。それだけだ。それ以外のことに興味はない」

（……そうだったな）

それきり、アル・アジフは沈ちん黙もくした。

アズラッドは窓まど際ぎわから部屋の中央に戻もどると、ランプに灯ひを点した。

テーブルの上に広げられているのは、アーミティッジの〝特とく殊しゆ資料室〟が収集した、魔ま術じゆつ師しラアル・ロブディに関する資料だ。その内容には、アズラッドにとって既き知ちの情報も含ふくまれていた。しかし、彼が何年も掛けて断だん片ぺん的に得た情報を網もう羅らした上に、さらなる知識と共に体系化が為なされたそれは、覇道の組織力をうかがわせるに充じゆう分ぶんなものだ。

──別れ際、アズラッドにファイルを手て渡わたしながら、アーミティッジは言った。

「ミスター覇道から言こと伝づてです。『時間が惜しい。雑用は早く済ませるように』と」

つまらない冗じよう談だんだった。アーミティッジの事務的な口調で言われれば、なおさらだ。

アズラッドは無言でうなずき、ファイルを受け取った。しかし、自分が復ふく讐しゆうを果たしたのちの時間というものが、どうしても──仮定の上でさえも──想像できなかった。

アズラッドは読みかけていたページに目を落とした。

〝マナウス神像〟の出所を辿たどる調査の過程で発見された、ある学者の手記だ。

一八八×年　七月三日──

マナウスからアマゾン川の支流のひとつをはるかに遡さかのぼり、我々は現地の言葉で〝神の吼ほえる森〟と呼ばれる地にたどり着いた。風穴かなにかの自然現象だろう、どこからか、この名の元となった低い唸うなりのような音が聞こえている。

現地人との交流の専門家としてこの隊に加わった私だが、少なくとも私の知る限りでは、ここまで〝森〟の中に踏ふみ込んだ人間はいないはずだ。

マナウスでポーターとして雇やとい入れた混血の現地人カボクロたちもまた、この土地になんらかの畏い怖ふを抱いだいているようだ。カトリックの神に祈いのりつつ、「この森には〝違ちがう神〟がいる」と言う。

この調査行の主しゆ催さい者しやであるラアル・ロブディ師は、そんな彼らの態度を「迷信だ」と言って、鼻で笑う。「聖書の神も、土着の神も、どちらもひとしく迷信だ」と。〈闇色のダークネス夜明け団・ドーン〉という結社に属する彼は、無神論者の神オカル秘テイス家トなのだ。

七月七日──

「これ以上進んでも、なにも見つかるまい」

もう引き返そう、という私の提案を、ロブディ師は退しりぞけた。彼には未いまだ、なんらかの確信があるらしい。

日暮れ近く、遠い森の中を行く巨きよ大だいな影かげが見えた。カボクロたちは不安な様子でささやき合っている。

七月九日──

夜半、何者かにキャンプが襲おそわれ、我々は三人のポーターと荷物の大半を失った。

喰くい散らかされた死体の周囲に、巨大な足あし跡あとがあった。鰐わにのものに似ているという。

その日のうちに、残りのポーターはすべて逃にげた。

いや、ただひとりエステヴァンという若いカボクロのみが残った。スペイン語に加えて英語が堪たん能のうなため私やロブディ師に目を掛かけられ、「俺は選ばれている」と口くち癖ぐせのように

言っていた彼は、仲間の反感を買い、置き去りにされたのだ。

「くやしいこと、ないです。俺は、選ばれたですから」

そう言う瞬しゆん間かん、ふてくされたような表情が、卑ひ屈くつさと尊大さの入り混じったものに変わるさまが印象に残った。

七月十一日──

わずか三人の探検隊は、食料を切り詰つめながら森を分け入った。

夜間は交代で火の番をするが、緊きん張ちようの連続と睡すい眠みん不足は、五十を超こえたこの身にはいささか応こたえる。

とはいえ、ロブディ師は確か私よりも十歳以上年上のはずだ。若いエステヴァンでさえ疲つかれを見せ始めているというのに、彼の精力は底知れず、森を行く足取りにも迷いがない。

ところで、日中、直立歩行する鰐のような──いや、化石から復元された肉食恐きよう竜りゆうそのものといった姿の生物が、ほんの十数メートル先を通っていった。

小しよう銃じゆうを握にぎり締しめ息を潜ひそめていると、彼は我々に気づいた様子だったが、空腹ではなかったのか、そのまま歩いて行ってしまった。どうやら命拾いしたようだ。

七月十二日──

知られざる部族と遭そう遇ぐう──こんな土地に人間が定住できるとは驚おどろきだ！

しかし……彼らが我々と同じ〝人類〟に属するのか、私には判断がつかない。大おお柄がらな体格に黒こく檀たんのような皮ひ膚ふ。類るい人じん猿えんと爬は虫ちゆう類るいを合わせたような無毛の頭部。進化論者の言う〝失われたミツシング・輪リンク〟に相当する種族かもしれない。

彼らはいくつかの単語と歌うように尾おを引く独特の発声のほかには、ほとんど言語をもたないようだ。身み振ぶり手て振ぶりで意い思し疎そ通つうを図はかってみたところ、たいへん友好的で、我々に食料と仮の住居を提供してくれた。

ロブディ師は言う。

「彼らに言葉を教えてみよう。使い物になるかもしれん」

まるで動物に芸を仕込もうとでもいうような口調に、私はいささかの嫌けん悪おを覚えたが、このような傲ごう慢まんさは彼の性格上の長所、すなわち並外れた行動力、カリスマ性などと表ひよう裏りをなすものだ。この人じん跡せき未み踏とう──失礼、住人がいるが──の土地にあっては、そうした資質こそが重要であることを認めないわけにはいかない。

七月十五日──

一昨日、エステヴァンが消えた。日暮れまでと昨日いっぱいを使って捜したが行方ゆくえは知れず、今朝になって、喰い散らかされた死体が発見された。豹ひようの仕し業わざだろうということだったが、奇き妙みようなことに、死体の頭部だけは見つからなかった。

現地人には埋まい葬そうの習慣はないらしかったが、ロブディの指示で、集落の外れに穴を掘ほり、彼の死体──残ざん骸がい──を埋うめた。

それは痛ましい出来事だったが、その間にも現地人たちとの交流は大きく進んだ。

先日、ロブディ師の態度に非難めいたことを言いながら、私こそが彼らを未開部族と侮あなどっていたことを、ここに詫わびねばなるまい。身振りを交えながら言葉を交かわした数日の間に、彼らは初歩的な英語をマスターしてしまったのだ。

彼らの頭脳は恐おそろしく明めい晰せきだ──私が興奮気味にそう言うと、ロブディ師は謎なぞめいた笑えみを浮うかべ、

「なに、餌えさを工く夫ふうしてみたのだよ」と言った。

新たに会え得とくした言語で、彼らは自分たちのことを〝ズアウィアのしもべ〟と呼んだ。

〝ズアウィア〟とは彼らの信しん奉ぽうする神の名だ。厳密には、彼らが歯の間や喉のどの奥で立てる複雑な音を伴ともなって発音されるものだが（私には再現できなかった）、ここでは便べん宜ぎ上じよう〝ズアウィア〟と表記する。

「われわれ……ズアウィア……に……選ばれている」

〝選ばれている〟。

彼らの発音するその言葉は、まるで死んだエステヴァンが教え込んだように、彼の口癖そのものの抑よく揚ようを持っていた。

七月十八日――

〝しもべ〟たちはロブディ師となにごとか話し合ったのち、我々をひとつの施し設せつへ案内した。

それは素そ朴ぼくな、しかし壮そう大だいな、石造りの神しん殿でんだった。中央の祭さい壇だんには高さ二メートルほどの石柱が円形に並んでいる。この新たな大発見に興奮する私に、ロブディ師は冷れい笑しよう的な一いち瞥べつを投げると、

「やはり――〝滴したたる闇やみ〟の神殿だ」

と、呟つぶやいた。

彼はこの神殿の存在を知っていた。

いや、〝しもべ〟たちに崇あがめられるその神殿こそは、神秘家としての彼が長年捜さがし求めていたものであり、今回の探検の目的であったのだという。ならば、この状じよう況きようは大成功と言うべきだろう。

「彼らに協力を仰あおいで、一いつ旦たんマナウスに戻もどろう」

と私は提案した。しかし――

「そして、案内に立った〝しもべ〟を、檻おりに入れて本国に送ってしまおう、というのかね？」

　そう言われて、口くち籠ごもった。

　内心にそのような考えがなかったと言えば、嘘うそになる。檻に入れるかはともかく、民族学、歴史考古学、言語学上の大発見の〝生きた標本〟を本国に連れ帰ることができたらと──

　利己的な功名心を見み透すかされた私が恥はじ入っていると、ロブディ師は呟いた。

「今はもっと大事なことがある」

「大事なこと……？」

「いずれ人間の世界には帰る──だが、それは奴ど隷れいとしてではなく、支配者としてだ」

　酷こく薄はくな笑みを伴うその物言いにひどく邪じゃ悪あくなものを感じて、私は口を閉とざした。

　七月二十四日──

　ロブディ師は〝しもべ〟たちへの影えい響きょう力りよくを急速に増している。

　彼らは元来従順な性質──「奴隷根こん性じよう」とロブディ師は言うが、むしろ宗教的な奉ほう仕しの感覚に近いと思われる──を持っており、強い意志を持つ者に自然と従うようだ。

　それをいいことに、ロブディ師は例の神殿──〝しもべ〟たちにとってもっとも重要な宗教的儀ぎ礼れいの場に踏ふみ込み、祭さい祀しを積極的に取り仕切っている。

　彼らの独自の禁きん忌きに触ふれはしまいか──という私の懸け念ねんを彼は鼻で笑い、

「なに、やり方はこちらのほうが詳くわしいくらいだ」などとうそぶくばかりだ。

「―いあ！　いあ！　ロブディ！」

　原始的な石造りの祭壇を囲み、〝しもべ〟たちはロブディ師を称たたえ上げる。派手な羽はね飾かざりをつけて祭壇に立つロブディ師は、彼らの神そのものになったかのようだ。

　七月三十日―

　ロブディ師が死んだ。

　件くだんの儀ぎ式しきの最さ中なか、興奮した〝しもべ〟の群れに呑のみ込まれ―止めるひまもなかった―もみくちゃにされるのが遠くから見えた。哀あわれ、異郷から訪おとずれた司祭は一転して生いけ贄にえとされてしまったのだった。

　その後、埋葬（皮肉にも、その慣習はロブディ師が伝えたものだ）される直前の死体を見た。ロブディ師があの傲ごう慢まんな嗤し笑しようを浮かべることは、もはや永久にない。彼の顔は、死の寸前の恐きよう怖ふと驚きよう愕がくに固まっていた。側頭部には拳こぶし大だいの穴が空けられ、そして―ああ、なんということだ！　脳のう髄ずいは残らず掻かき出されていた！

「なぜ彼を殺した」

〝しもべ〟のひとりを捕つかまえて詰きつ問もんしたが、要領を得ない答えが返ってくるのみだ。

「……ロブディ、ころした。〝しもべ〟、しなない。ロブディ、しなない」

「君たちはロブディを尊敬していたのではないのか」

「ロブディ、そんけい……いあ！」

　瞬しゆん間かん、ぞくりと異様な感覚を覚えた。それはおそらく、生物としての人間が自分と異なる種類の生物に対して抱いだく、本能的な警けい戒かい心しんだった。

〝しもべ〟たちは我々と同じ五体を具そなえているが、そこに宿る魂たましいは、人間とは完全に異質なものなのだ。

私は今や、この地に存在するただひとりの人間だ。

現在、なるべく〝しもべ〟たちとは接せつ触しよくを避さけているが（少なくとも、彼らには私に対する積極的な敵意はないようだ）、周囲は果てのない密林。私が文明世界に帰き還かんする望みはほとんどない。いずれ、私の脳髄も彼らの祭礼に供されることになるのだろうか。

八月一日―

ロブディ師が、私の前に現れた。

驚愕する私に向かって、常の通り傲慢な表情を浮うかべ―いや、今やその表情は〝しもべ〟たちと同様の気配を伴ともなっていた。

「あなたは死んだはずだ―私は確かにあなたの死体を見た！」

「復活したのだよ―神の力で」

ロブディ師は平然と答えた。彼が口にする〝神〟という言葉に、ひどく違い和わ感かんがあった。

「あなたは……神を信じなかったはずだ」

「雲の上から人を指図する、名目だけの神はな」とロブディ師は言った。「しかし、この地の地下に住まう神、本物の力ある神は別だ」

ロブディ師はにたりと笑った。背筋のそそけ立つような、ひどく不ふ吉きつな笑えみだった。

八月九日―

少なくとも、彼らは邪悪な生物ではなかった―善悪とはあくまで人間の行動に対して用いられる価値基準だからだ。密林によって隔かく離りされたこの地で、彼らはただ、彼ら自身の論理のもとに生存していただけだ。

しかし、今や〝邪悪〟はこの地に持ち込まれた。

ロブディ師の指示の下もと、連日の祭祀はますます熱ねつ狂きようの度を増している。獣けもののように四つ這ばいになって吼ほえ猛たけり、頭を越こす高さに跳はね上がりながら怪け鳥ちようの如ごとき叫さけびを上げる彼らの姿は、とても人間とは思えない。

ある日―熱狂が最高潮に達した神殿に、恐ろしい供く物もつが運ばれてきた。

最初、それは腐くさりかけた果物くだものの山かと思えた。

だが、そうではなかった。

それは〝首〟だった。豹ひようや鰐わに、大だい蛇じや、それに、何種類もの恐きよう竜りゆう―近きん隣りんに棲せい息そくする、ありとあらゆる大型動物の頭部が、輿こしの上に山と積まれ、運ばれてきたのだ。

続いて、酸さん鼻びを極きわめる光景が展開された。彼らは各おのの々おの、さまざまな生き物の生首を手に取り、その鋭するどい歯で爪うりを噛かむように頭ず蓋がい骨こつを噛み割った。そして、中の脳髄をココナッツミルクのようにすすり始めたのだ。

そして、さらに衝しよう撃げき的、いや悪夢的な現象が起こり始めた。彼らひとりひとりの肉体が、奇き怪かいな変容を遂とげ始めたのだ。骨格がよじれ、筋肉が膨ふくれ上がり―やがて彼らは、それぞれまったく別の生き物に変へん形ぎようした。豹の頭を食った者は豹へ、鰐の頭を食った者は鰐へ。つまり―彼らは他の生物の脳髄を喰くらい、その存在に成り代わるのだ！

彼らの神〝ズアウィア〟が、地の底からうめき声を上げている。タールの海のような黒い野や獣じゆうの群れが、うねりながらそれに唱和した。

なにか私には理解できない論理によって、彼ら〝しもべ〟たちは己おのが主たる神と共にこの地に縛しばられていた。彼らは力ある存在だが、能動的な知性をもたぬがゆえに、状じよう況きようを打開できずにいた。

そこに、ラアル・ロブディが現れた。

彼の強力な意志の下もと、邪じや神しん崇すう拝はいの儀式は進行する。

その儀式が完かん了りようした時、彼らの神は解放され、彼らもまた自由を得るだろう。見えざる檻おりは開け放たれ、狂くるった野獣の群れが、いや、もっと恐おそろしく禍まが々まがしいもの、人類の天敵とも言うべきなにかが、我々の世界になだれ込むのだ。

それは、この世の終わりと言うべき状況かもしれない。

ああ、たったひとりの男の存在によって、人間の時代は終わろうとしているのだ。

八月十五日―

なぜそんなことをしたのか。恐きよう怖ふに駆かられて―としか、言いようはあるまい。

私は彼らの隙すきをつき、祭さい壇だんから神像を盗ぬすみ出した。

この像こそが、あの忌いまわしい〝ズアウィア〟崇すう拝はいの儀ぎ式しきの中ちゆう核かくとなるのだ。像を失えば、儀式は中断を余よ儀ぎなくされる。終末的状況の到とう来らいを、多少なりとも遅おくらせることができるのだ。―狂いかけた頭で、私はそう考えていた。

いくらも行かないうちに、〝しもべ〟たちに気づかれ、恐ろしい追つい跡せきが始まった。類るい人じん猿えん、豹、大蛇、肉食竜りゆう―何百という野獣から構成された群れが、地じ獄ごくの軍勢のように私を追ってきた！

無我夢中だった。私は密林を闇やみ雲くもに駆け、ひたすらに駆け続け―どこをどう通り抜ぬけたのか、気がつくと、像を抱かかえたままマナウスの街の外れに倒たおれていた。

遭そう難なん者しやそのものの風ふう体ていを引きずって、私はこの調査行の拠きよ点てんとして利用していた宿を訪おとずれた。宿の主人は私の顔と金かね払ばらいのよさを覚えていたので、本国に手紙を書いて援えん助じよを待つ間、私にひと部屋を貸すこと

を、快く承知してくれた。

現在、その一室で、私はこの──おそらくは最後の──手記を書いている。この文章がしかるべき人の目に触ふれ、密林に潜ひそむ危機についての警告となることを切に願う。

像は別の場所に隠かくした。詳くわしくは、ここには書けない。

私が読み返すかもしれないからだ。

思えば──なぜ、老人と言っていい年ねん齢れいの私が、子供ほどもある石像を抱かかえて数十キロにも及およぶ密林を駆け抜けることができたのか。なぜ、恐るべき獣人の追走を振ふり切ることができたのか。そして、このペンを握にぎる手の指の太さ、肌はだの黒さはどうしたことだ。

私には、私であり続ける自信がない。

遠く風に乗って、歌うような声が聞こえてくる。今ではその意味が理解できる。あれは呼び声なのだ。逃にげた仲間を呼び戻もどすための。また、彼らの時、暗黒の時代を招来するための──

アーミティッジ付記──

以上はマナウスの古いホテル〝オオオニバス〟の主人から入手した、人類学者エドワード・モルガン教授が残したものと思われる手記の写しである。

〝オオオニバス〟主人の話によれば、先代の主人は〝鰐の親父おやじ〟というあだ名で呼ばれていたという。──というのも、彼は酔ようと決まって「人食い鰐」の話を繰くり返したからだ。

曰いわく「そのとき俺は見た。一匹ぴきの真っ黒な鰐が学者先生の部屋から逃げてったのを、確かに見たんだ」そして「鰐は先生の服を着て、二本脚でひょこひょこ歩いていった」と。

アズラッドはファイルを置いた。

霸道の収集したこのような資料は、アズラッド自身の持つ情報を裏づけこそすれ、あらたな展望を示すものではなかった。霸道の情報網の有効性を否定するつもりはないが、魔ま術じゆつ師しロブディは合理の網に掛かかる性質の存在ではないのだ。

この五年間、アズラッドは片時も休むことなく魔術師ラアル・ロブディを追ってきた。闇やみに消えゆく気配を捉とらえ、路地に残るかすかな足そく跡せきを辿たどり、時にはその実態に肉にく迫はくし―だが、ロブディはそのたびに、アズラッドの手をすり抜け、嘲ちよう笑しようを残して逃げ去った。その存在はタールのようにつかみどころがなく、しかし同時に、決して拭ぬぐい切れぬ粘ねん性せいを帯びていた。

―そもそも、ラアル・ロブディとは何者か。

邪じや神しんの力を手に入れた老魔術師か、魔術師の人格を奪うばった名前のない魔ま物ものか、それとも、そのどちらとも言えぬ、得体の知れない怪かい物ぶつなのか。彼について知れば知るほど、その正体は分からなくなっていく。

それを言うならば、自分自身についても同様だ。アズラッドは自らを復ふく讐しゆうの機械と化してロブディを追ってきた。今では、生まれついての本来の自分がどれほど残っているのか、自分でも分からない。ひょっとすると〝本来の自分〟など最初からいなかったのではないか―そのようにさえ思えてくる。

アズラッドは自らの体内に巣食う虚きよ無むを確かく認にんするように、じっと目を閉じた。虚うつろな精神に反はん響きようするように、アーカムシティの活気がかすかな気配として伝わってくる。人の力によって魔を退しりぞける都市。ならば、この場にいる自分は、少なくともまだ、怨おん霊りようや〝歩く死者〟の類たぐいではないということか。

―当分は、この街に留とどまることになるか……。

霸道鋼造の作った、巨きよ大だいなパンドラの箱―このアーカムシティに直接乗り込んでくることはできないにせよ、ロブディは〝マナウス神像〟の入手のためにこの地に関かかわらざるを得ない。そこに、アズラッドの打つべき次の一手も発生する。

ゲームの主導権は、未いまだ霸道の手にある。

決して気に入りはしないが、その力を利用せざるを得ない状じよう況きようではあった。

+

アーカム発の夜行列車は、ニューヨークへと南下していた。そこから蒸気船でリヴァプールへ渡わたり、そして鉄道でロンドンへ──半年間に及ぶ大旅行の帰路は、わずか三日間で終しゆう了りようする予定だ。

エイダたちにあてがわれた一等客室は、覇道鋼造の専用車両のそれより広く快適だったが、みじめな気持ちがそれで拭えるというものではなかった。

〝特別な旅〟は、もう終わってしまったのだ。

□□D　　D　　ダークネス・ドーンの情報収集力は素人しろうと以下だ。一いつ般ぱん客きやくに混じって旅行をする限り、彼らに足取りをつかまれることはない。それが覇道の判断だった。

「魔術師ラアル・ロブディ──奴やつは部下に恵めぐまれていないのさ」

地下工場で、覇道は言った。

「事実上、敵はロブディという一個人でしかない。残りはみな傀かい儡らいや奴ど隷れいにすぎず、ロブディの指示がなければ靴くつ紐ひもひとつ満足に結べない連中だ。そしてそのロブディは、今までそうであったように、これからも私に掛かりきりにならざるを得ない。──つまり、この覇道鋼造に関わらない限り、君の身に危険が

及ぶ可能性はごく低い」

　エイダの肩かたに、覇道の手が置かれた。

「君はロンドンに帰りたまえ。今後はあまり怪あやしげなことには首を突つっ込まないことだね。……なにごとも、平へい凡ぼんが一番だよ」

「はあ。ええ、その……でも、なぜ急に？」

「用が済んだからだ」

　覇道は鋼はがねの巨きよ体たいを見上げた。

「このデモンベインの解体運うん搬ぱんが終了するまでの半年間、私はロブディを引きつけておく必要があり、その間の護衛として〝マスター・オブ・ネクロノミコン〟アズラッドを利用した。あの扱あつかいにくい男を、私がどうやって動かしたと思うね？」

「え……さあ？」

「君だよ」

　どこか自じ嘲ちよう的な表情で、覇道は笑った。

「あの男には、妙みように生き真面目まじめなところがあってね。闇の世界に一いつ般ぱん人じんを巻き込むことを極度に嫌きらう。そこで私は君に同行してもらい、彼の騎き士し道どう精神に期待した。彼はなにも知らない君を守るために戦うだろう、と──実際その通りになったが──つまり、君は彼を釣つるための餌えさだったというわけだ」

「……そんな……」

「私としてはもうひと押し、彼をデモンベインに乗せるところまで持っていきたかったが、さすがにそれは虫がよすぎたようだ。……まあいいだろう。当面、彼の役目は終わった。君もまた然しかりだ」

　覇道は肩をすくめた。

「さてお嬢じようさん、アーカムシティを観光していくならクロ

フォードに案内させるが、どうするね？」

「……その必要はありませんわ」

　エイダは努めて平静を保ちながら答えた。

「わ、私は早く帰って、『鋼の巨きよ人じん（仮）』の出版準備に……」

「──ああ、すまないが、その本が出版されることはない」

「え？」

「私の行動については、秘密にすべき部分が多々あるのでね。君の原げん稿こうは私が買い取ろう」

「え、だって……そんな！」

　エイダは訴うつたえるように覇道を見上げた。

「じゃあミスター覇道、ひょっとして、あなたは最初からそのつもりで……!?」

　覇道は無言。それが答えだった。

　エイダは肩を落とし、うつむいた。

「……分かりました……でも……ひとつだけ、言わせてください……」

　不意に真っ赤になった顔を上げると、エイダは覇道の頬ほおを平手で張った。

「私、あなたを軽けい蔑べつします！」

　覇道は揺ゆるぎもせず、エイダを見下ろした。冷たく重い、鋼の彫ちよう像ぞうのような態度だった。

「──気が済んだかね」

　そう言って、覇道は踵きびすを返した。

「では、行きたまえ。私は忙いそがしい」

―そして現在。

「……あの人はほんとに〝巨人〟なんだわ」

客車の揺れに身をゆだね、寝しん台だいの上で毛布を被かぶってべそをかきながら、エイダは言った。

「だから、私たちみたいな一般人はアリンコかなにかと同じで、その足で踏ふみ潰つぶしても気づきゃしないのよ。ああ、私、悲しさと口惜くやしさで胸が潰れてしまったみたいよ。いいえ、本当に潰れて死んでしまえたらいいんだわ。魂たましいを踏み潰されて失った後も、抜ぬけ殻がら同然の肉体で生きていかなきゃいけないなんて、とても残ざん酷こくなことですもの。ねえニアーラ、あなたもそう思うでしょ」

「はいはい、まったくその通りで」

「でも、私がここで憤ふん死ししてしまったら、それはジャーナリズムの敗北というものだわ。いつか、覇道鋼造とアーカムシティと〝科学の巨人〟のなんたるかを私の筆で暴あばき立て、国際的なベストセラーにしてやるんだから」

言うことは勇ましいが、毛布に包くるまったままではいささか説得力に欠けると言わざるを得ない。そこに、ニアーラが追い討うちを掛ける。

「そうですねえ、でも、覇道様がいやというものを、置いてくれる書店がありますかねえ」

「そしたら、チラシに刷って空中からばらまいてやるわ！」

「あら、『革かわ表びよう紙しの立派な本にする』って言ってたのはおやめになったので？」

毛布の塊かたまりから、エイダの頭が飛び出した。

「混ぜ返さないでください！　私は報道というものの社会的意義を……もおぉ！」

再び毛布を被って丸くなったエイダの背を、ニアーラの手が優やさしく叩たたいた。

「ほんとに、社会的意義ってのはたいへんなことでございますねえ」

「 ～～……」

　エイダは黙だまり込み、しばしの間、列車の振しん動どうのみが客室に響ひびいた。

　やがて、毛布の中から白い手が伸のび、黒い手を握にぎった。

「……ねえニアーラ……あなたは私の味方よね？」

「そりゃあ、もちろん」

「……あたしを騙だましたり、いつの間にかいなくなったりしないわよね？」

「しませんとも」

「……約束よ？」

「ええ、約束しますよ」

「ほんとに……約束よ……」

　やがて、ニアーラの手を握ったまま、エイダは寝ね息いきを立て始めた。

+

　―夢に見るのは、いつも同じ通り。

エイダの心の市街図に、消えない血の染しみで印をつけられた場所だ。

ロンドンには珍めずらしい、蒸むし暑い夜。空は曇くもり、雨の先さき触ぶれの湿しめった匂においが漂ただよい始めていた。

父娘おやこふたりでの観劇の帰り──エイダは父の大きな手を全身で引きながら、月のない、暗い夜道に、愛らしい歌声を響かせる。

「『アイスクリーム！　アイスクリーム！　はやく食べないととけちゃうよ！』」

「……しぃ」

父は唇くちびるに指を当て、優しく言った。

「静かにしなさい。街の人はみんな、もう寝ねているからね」

エイダは肩かたをすくめ、自分の口元を手で押さえた。

そして、あたりをうかがいながら、内ない緒しよ話ばなしのように言う。

（……ア・イ・ス、クリーム……！）

その時、路地から人ひと影かげが飛び出した。

闇やみの中に、のっぺりと白い顔が浮うかんで見えた。

隈くま取どりのほどこされた目鼻が、恐おそろしい笑えみを浮かべていた。

エイダは悲鳴を上げた。

その声に弾はじかれたように、ぎらりと光るものが突つき出され、父の体に吸い込まれた。

白い顔の怪かい物ぶつは身をひるがえし、闇の中へ駆かけていった。

蒸し暑い夜だった。

石いし畳だたみの上に落ちた紙かみ袋ぶくろから、溶とけたアイ

スクリームが流れ出していた。

　父の体からも、驚おどろくほど大量の血が流れ出していた。

　心臓の横に、ナイフの柄えが突き立っていた。

　白いクリームと赤い血が、入り混じりながら石畳の隙すき間まに流れ込んでいった。

「おとうさま⁉」

　小さなエイダは、両手で父の背をゆすった。

「おとうさま……おとうさま‼」

なにが起こったのか理解することもできず、ただ、その場で泣き叫さけんだ。

……だが、エイダは知っている。

大人になったエイダは、すでに知っている。

あれは〝怪物〟などではない。いつも公園の前にいて、エイダを見るとくるりととんぼを切ってくれた、道どう化けのなりをした大道芸人だ。

その日に至る数日の間、たまたま実入りが少なく、病気の息子むすこのために薬とパンを買う金もなかったのだ。日が暮れてしまえば、道化に小銭を投げる者もなくなる。彼は化け粧しようを落としもせず、路地の片かた隅すみでただ途と方ほうに暮れ、そして――

――金持ちの旦だん那なを刃は物もので脅おどして、いくばくかの小銭を恵んでもらう。

思いつめたその行ないの末、少女の悲鳴に驚き、手元を狂くるわせたのだった。

エイダは知っている。

自分の父を殺したのは〝怪物〟などではなく、また、ひとりの貧しい男でもない。社会に巣食う貧ひん困こんと、市街の端はし々ばしにわだかまる夜の闇だ。

もしも、あの日彼らが出会った街路に、ただ一本の街灯があれば――

男は裕ゆう福ふくそうな紳しん士しが連れている、顔見知りの少女に気づいたことだろう。

「あら、おじさん！」

少女も彼の存在に気づき、手を振ふりながら駆け寄ったことだろう。

「おとうさま、この人ったらすごいのよ！　ねえおじさん、おねがい！　いつものくるりをおとうさまに見せてあげて！」

彼は憔しよう悴すいした顔に精せい一いつ杯ぱいの笑えみを浮かべ、その期待に応こたえたことだろう。慈じ悲ひ深いダーレス卿きようは彼の窮きゆう状じようを知ると、とんぼ返り一回の見料をソヴリン金貨で支し払はらったことだろう。また、幼いエイダはとっておきのアイスクリームを、病気の子供に譲ゆずったことだろう。

娘は父を尊敬し、父は娘を誇ほこりに思い、道化は彼ら父娘に深

い感謝の念を抱いだきながら、温かな気持ちでそれぞれの家路へとついたことだろう。

ただ一本の街灯があれば。

しかし、〝今〟――

少女は石畳にうずくまり、父の背をゆすっている。

雲はますます低く、湿しめった風が吹ふき始めている。

黒々とそびえる街並みの中、少女はただひとり、物言わぬ〝死〟に触ふれている。

その小さな姿を、夜の闇が塗ぬり込めていく。

（今行きます！）

声にならない声で、エイダは叫んだ。

（私が、そこを……照らします！）

電動服モーター・スーツを着て、蓄ちく電でん池ちとアーク灯を背負って――

全身から電動機の唸うなりを上げ、気球の浮ふ力りよくで大きく跳ちよう躍やくしながら、風のように馳はせる。

しかし――鬼き神じんの勢いで疾しつ走そうしてもなお、〝その場所〟への距きょ離りは縮まらない。むしろ、走れば走るほどに、ゆっくりと遠ざかっていく。

（今行きます……今……今……！）

闇の中に浮かぶ、少女の小さな背に向かって、エイダは懸けん命めいに手を伸のばす。

しかし、その手は決して届きはしない。

やがて、ヘルメットの覗のぞき窓が湯気で曇り、額から垂れた汗あせが目に入った。

暑い。

息が苦しい。

薄うすい空気を少しでも多く吸い込もうと、エイダはふいごのように息をつく。

手足がしびれ、足元の感覚もおぼつかない。

熱と酸欠に朦もう朧ろうとしながら、エイダは必死で前進する。

しかし、もう、息が──

+

「苦しい──ヘルメット──外して！」

荒あらい息をつきながら、エイダは毛布をはね除のけた。

「はぁ、はぁ……あら？」

汗をかいた頬ほおに、冷たい空気が触れた。頭から毛布を被かぶって寝ねたために、窒ちつ息そくする夢を見ていたのだ。

客室内は、自分の手も見えない闇やみ。ゴトゴトと、鉄道の振しん動どうが寝しん台だいから伝わってくる。

エイダはゆっくりと深呼吸した。

闇は苦手だった。寝しん室しつのランプも、エイダが寝た後にニアーラが消すのが常だ。

「ニアーラ……灯あかりを点つけてください」

エイダは闇の中に呼び掛かけた。

しかし、返事はない。

「……ニアーラ？」

エイダは耳をすませた。もとより、わずかな気配を探さぐるには

列車の音がうるさかったが、同じ室内にいる人間の体温や匂においのようなものが感じられない。

　なにか用事があって、客室を出ているのだろうか……でも、こんな夜中に？

　エイダは毛布を引き寄せ、ぎゅっと身を縮めた。闇は苦手だった。

「ニアーラ……いないの？」

　闇の中に潜ひそむなにか──灯りの下でなら「そんなものはいない」と言い切れるのだが──に聞きとがめられまいとするかのように、エイダは小声で言った。

　と──

（……はいはい、お嬢じよう様さま）

　闇の向こうから、ニアーラが答えた。廊ろう下かのドア越ごしなのか、その声は妙みように遠い。

「なんだ……いるならさっさとお返事なさい」

　とたんに気が大きくなって、エイダは安心半分にぼやいてみせる。

　ニアーラは苦く笑しよう混じりに言った。

（少し、席を外していましたものでね）

「……どちらに行ってらしたの？」

（ちょいと、お迎むかえを呼びに）

「〝お迎え〟……？」

　ロンドンへの帰路は、目立たないように一いつ般ぱんの旅行客として旅をすることになっている。覇道財ざい閥ばつの送り迎えなどはないはずだ。──そもそも、走行中の列車から、どこに誰だれを呼びに行くというのか。

　怪け訝げんに思いながらも、エイダはニアーラに言った。

「とにかく、中に入っていらっしゃいな」

　と、その時、月明かりがカーテン越しに客室に差し込んだ。ニアーラの声のするほう、エイダが廊下だと思っていた方向から。

　──エイダは車窓の外と話をしていた。

「ニアーラ!?」

　エイダは窓に駆かけ寄り、カーテンを開け、そして息を呑のんだ。

　月光の下、何十頭という肉食竜りゆうが列車に併へい走そうしていた。上空には数頭の巨きよ大だいな翼よく竜りゆうに混じって、深しん紅くの翼つばさを広げて飛ぶひとりの女の姿があった。

　だが、その光景を悪夢的なものにしているのは、もっと違ちがうものだ。

　列車をひとまたぎにできるであろう巨大な怪かい物ぶつが、太い柱のような三本の脚を動かし、恐おそろしい速度で走っていた。鉤かぎ爪つめを持つ腕うでを伸しん縮しゆくさせ、触しよく腕わん状の頭部を天に振ふり立て──象の鼻にも似たその先せん端たんが、エイダの覗のぞく窓に近づいた。そこには人面の大だい蛇じやの如ごとく、長い髪かみをなびかせ眼鏡めがねを掛けた、黒い肌はだの女の顔があった。

「さあ、お迎えが参りましたよ、お嬢様」

　と言って、それはにたりと笑った。

+

「……あの子はニューヨークに着いたころかな」

　執しつ務む室しつでタイプ紙の分厚い束をめくりながら、覇道は呟つぶやいた。

　コーヒーを覇道の前に置きながら、クロフォードが答える。

「さようですな。それほどご心配なら、せめて途と中ちゆうまでなりとも送って差し上げればよろしかったかと」

「私がいっしょにいては、かえって彼女に危険が及およぶ。それに……」

　覇道は言い訳がましく付け加えた。

「……私はなにかと忙いそがしいんだ」

　クロフォードはわずかに右の眉まゆを持ち上げた。

「―その書類は最優先の懸けん案あんというわけですな」

　隻せき眼がんの視線の先には、覇道の手にした紙束があった。覇道は苦く笑しようすると、紙束―エイダから没ぼつ収しゆうした草そう稿こうをデスクに置いた。

「これにはまいったね。私のことを、まるで英えい雄ゆうか半神のように書いてある。お嬢じようさん、さぞかし失望しただろうな」

「さて、旦だん那な様は英雄と呼ぶに足るお方であると存じておりますが」

「よしてくれ。私は非力な男だよ。二十年も前に、ここ一番の大勝負に負けたんだ」

「私の経験から申し上げますと―」

　クロフォードは両りよう拳こぶしを胸の前に構えた。

「打ちのめされてなお立ち上がる者は、決して〝負けた〟ことにはなりませんな」

「ふむ、物は言いようだ。私としては、いっそ、ゆっくり地面に伸のびていたい気分だがね」

　覇道が言ったところに、かすかな女の声が割って入った。

（―駄だ目め駄だ目め、それじゃあ全然つまらない。覇道様にはまだまだがんばってもらわなけりゃあ、いけません）

「誰だ!?」

　覇道が叫さけび、クロフォードが身構えた。

「まあまあ、そんな大声を出さなくても」

　施せ錠じようされていたはずのドアをあっさりと開けて入ってきたのは、肌の黒い、眼鏡を掛けた三十前の女──

「ニアーラ？　エイダお嬢じよう様さまとご一いつ緒しよでは……!?」

「……待て、クロフォード！」

　ニアーラに歩み寄ろうとするクロフォードを、覇道が制した。右手にはデスクから取り出した拳けん銃じゆうを構えている。

「ええ、ほんのさっきまでご一緒だったんですけどねえ」

　覇道の剣けん幕まくに怖おじもせず、ニアーラは口の端はしをきゅうっと吊つり上げて笑った。どこか人間離ばなれした笑えみだった。

「なるほど……おまえだったとはな。半年も騙だまされていたとは、私もほとほと間ま抜ぬけだ」

苦り切った様子で覇道が言うと、

「ふふん、そうお気になさることはありませんよ」

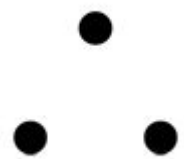
ニアーラは腰こしに手を当て、ぐっと顔を突つき出した。

「他のみなさんと違ちがって、あたしゃあ人間である時には本当に人間なんですから。お気づきにならないのも無理はありません」

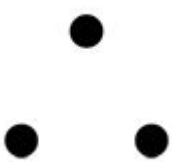
「それゆえに、この結界都市にも人間として出入りできる……か」

「旦那様──」

主人を危険から守るべく、クロフォードが一歩進み出た。が──



「……いや、クロフォード、この女はD　　D



ダークネス・ドーンではない。はるかに性質たちの悪いものだが、直接に危害を加えてはこない」

「そうそう、あたしゃあ、なにも手を出したりしませんよ。ただ、あっちこっちにちょっとずつ顔を出して、ゲームが面おも白しろくなるように場を整えるだけ……」

「〝整える〟？　〝かき回す〟だろう？」

ニアーラは肩かたをすくめた。

「さて、どうとでもお好きなように」

　覇道らの表情をうかがいながら、ニアーラは言葉を続けた。

「それじゃあ、またちょいとかき回させていただきましょうか……というのも、うちのお嬢様が、つい先ほど、例のＤ∴Ｄ∴に捕つかまってしまいましてねえ」

「エイダお嬢様が⁉」

「……おまえが引き渡わたしたのか」

「ええ、覇道様が案外お嬢様を気に入ってらしたことも言い添そえましてね。──あちらのロブディ様は、お嬢様と〝マナウス神像〟を交こう換かんしたいと言っておいでです。つきましては、明日の夜〇時、ブルックリンのレッド・フック埠ふ頭とうに、像を持ってお越こしくださるようにと──そうそう、必ず覇道様おひとりでお願いしますよ。ほんと、あちら様ったらこういう事にうといんですから、あたしがちゃんと気をつけなけりゃあ、ね」

「エイダは無事か」

「さあて、そうでなければ取り引きにならないのですけど……なにしろこういう事にうとい方々ですからねえ」

　ニアーラは口元に手を当て、くつくつと笑った。

「私の可愛かわいいお嬢様が、しつけの悪いケダモノにお尻しりをかじられでもしたらと思うと……ふふ……あはははは！」

「話はそれだけか」

「ははははは！　ははははははははは！」

　ニアーラは天を仰あおぎ、狂くるったように哄こう笑しようするのみだ。

　その頭部に銃じゆう口こうを向け、覇道は言った。

「用が済んだなら、ここから立ち去れ──ナイアルラトホテップ‼」

「ははハはハハははははハハハハハハ──！」

　自らの本質に近いその名を呼ばれ、ニアーラの存在が変質した。

三つの目が炎ほのおを噴ふきながら見開かれ、巨きよ大だいな黒い翼つばさが部屋いっぱいに広がり、さらにその体中から触しよく腕わんが、鉤かぎ爪つめが、不定形の肉にく塊かいが飛び出し──

ボッ──!!

わずかな爆ばく発はつ音おんと共に、その怪物は消しよう滅めつした。

魔まの存在を許さない、アーカムシティと覇道邸ていを包む〝場〟が、それを異なる時空間へと弾はじき出したのだ。

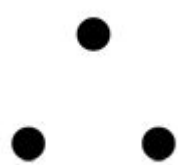
室内には、腐ふ臭しゆうにも似た魔の気配と、嘲ちよう笑しようの残ざん響きようのみが残った。

+

ニューヨーク市ブルックリン区、レッド・フック。

ロードアイランド島の西せい端たん近く、イースト川の河口部を挟はさんでガヴァナーズ島に向かい合う位置に、その地区はある。

シリア人、イタリア人、スペイン人、黒人──雑多な人種が流れ込み、入り混じった結果として生まれた混こん沌とんとした空気が、堅けん固ごだが猥わい雑ざつな煉れん瓦が造りの街並みのそこかし



こに淀よどんでいる。なるほど、D　　D

ダークネス・ドーンの獣じゆう人じんが潜ひそむにはうってつけの場所だと言えた。

　覇道は貧ひん民みん街がいから海岸通りに抜ぬけ、指定の場所、油染じみた埠頭の外れに至った。日中ならば往来する蒸気船の汽笛や荷に揚あげ作業の喧けん騒そうに満ちているこの界かい隈わいも、深夜とあって、ただひっそりと佇たたずんでいる。

　桟さん橋ばしの端はし近くに立ち、葉巻を取り出して一服していると、ほどなく、倉庫の陰かげから十数匹ひきの野や獣じゆうがのそりと現れた。ニューヨーク湾わんを背にした覇道の退路を絶つように、桟橋の口を半円状に取り囲む。

　野獣の群れの中から、深しん紅くの術衣をまとった女―魔ま術じゆつ師しラアル・ロブディが歩み出た。

「覇道鋼造」

　夜目にも艶あでやかな紅あかい唇くちびるが、しわがれた老人の声を発した。

「……確かに、ひとりで来たようだな」

　ロブディは上空を警けい戒かいするように見上げた。三頭の翼よく竜りゆうが、音もなく旋せん回かいしていた。これならば、覇道の飛行船部隊も近づけまい。

「像は持って来たか」

「ああ」

　覇道が抱かかえてきた包みをほどくと、〝マナウス神像〟の姿が現れた。

「こちらに渡せ」

「その前に、ダーレス嬢じようを返してもらおうか。……なに、どうせ逃にげ場ばはないんだ。こちらの用事を先に済ませてもいいだろう」

　覇道は懐ふところから筒つつ状じようの物体―ダイナマイトを取り出した。

「―いやと言うなら、この場で像を砕くだく」

「……よかろう」

　振ふり向いたロブディの背後から、二匹の巨大な類るい人じん猿えんに両りよう脇わきから腕うでをつかまれたエイダが現れた。憔しよう悴すいしている様子だが、怪け我がはないようだ。

「……ミスター覇道！」

「お嬢さん―」

　覇道はエイダに言った。

「すまないが、いつものように、もっと友達らしく呼んでくれるかな……〝がっちりステイーリイゴールディ〟と」

「はい、ゴールディさん！」

　エイダは解放され、覇道に駆かけ寄ってきた。

「ふむ……なによりだ」

　覇道はいつの間にか取り出した【機械語写本】を左手に広げ、口こう訣けつを唱えながら、破は邪じやの印を結んだ右手をエイダの額に押し当てた。

　すると―

　ぎゅっ、と声を立て、エイダに擬ぎ態たいしていたものが、赤黒い粘ねん液えきの塊かたまりとなって飛び散った。

「少なくとも、エイダの脳はまだ喰われていないようだな」

　覇道はロブディに向かって、にやりと笑った。

「今度は本物を頼たのむ」

　ロブディは苦々しい表情と共に手を振った。

　先ほどと同様──今度はぐったりと気を失ったエイダが引き出され、数メートル離はなれた位置に横たえられた。覇道は像を置いて歩み寄り、注意深くエイダの体を調べると、

「……本人だな」

　と言って、ようやく息をついた。

「取り引きは成立だ」

　覇道はエイダを抱かかえ上げながら言った。

「像はそこに置いて行く。道を空けてくれ」

「その必要はない」

　ロブディの顔に、鬼き気き迫せまる表情が浮うかんだ。

「ここより生きては帰さん」

　じりじりと迫せまる野獣の群れを前に、覇道は肩かたをすくめた。

「……まいったね。これだから素人しろうとは困る」

「なに……？」

「ビジネスの基本は、まず第一に〝誠実〟であること。そして──相手の〝不実〟に対する備えを怠おこたらないことだ」

　その時、覇道の背後で急激に海水が盛り上がり、巨きよ大だいな鋼はがねの鼻はな面づらが飛び出した。

　覇道財ざい閥ばつの所有する〝潜せん水すい艦かん〟だ。

　はね散らされた水が豪ごう雨うのように降り注ぐ中、潜水艦の側面の丸窓がいっせいに開き、何十丁もの小しよう銃じゆうの銃じゆう身しんが飛び出した。

「なッ!?」

　同時に―

　夜の闇やみを引き裂さいて、黒い流星が飛来した。

　上空の警戒に当たっていた翼竜の間をすり抜ぬけ、超ちよう高空から地表に向かうそれは、術衣姿マギウス・スタイルのアズラッドだ。

「―アイオーン!!」

　ゴゥ―!!

　灼しやく熱ねつする鋼の拳こぶしが〝部分召喚〟によって異空間から飛び出し、ラアル・ロブディに叩たたき込まれた。

　ロブディは間かん一いつ髪ぱつ直ちよく撃げきを避さけたが、巨大な砲弾の如ごとき一いち撃げきは桟橋の中ほどを打うち砕いた。

　傾かたむいた桟橋の上から、〝マナウス神像〟が横ざまに転げ落ちていく。

「よし―退たい却きやくだ、アズラッド!!」

　エイダを抱え上げながら、覇道が叫さけんだ。

「像を回収しろ！」

　しかし―

　復ふく讐しゆうの好機を目の前にして、アズラッドの自制は緩ゆるんでいた。

「オォッ―!!」

　鋼の腕をもう一本喚よび出し、ふたつの手でロブディにつかみ掛かる。

　その隙すきに、D∴D∴の類人猿が桟さん橋ばしの破損部を飛び越こえ、像を拾い上げると、仲間の下へ投げ込んだ。

　一方、上空に逃のがれたロブディの視線の先に、潜水艦の甲かん

板ばんに登りつつあった覇道と、彼が背負うエイダの姿があった。

「おのれ―死ね、覇道……ッ‼」

　ロブディが灼熱の飛礫つぶてを撃うち出した。

　瞬しゆん間かん、アズラッドは躊ちゆう躇ちよした。

　―ロブディへの攻こう撃げきと、覇道らの保護。ふたつの行動の優先順位が、明めい瞭りようになっていなかった。

　迷いが、隙となった。

「―ッ！」

　アズラッドはアイオーンの腕うでに込められていた霊れい力りよくを術衣の翼マギウス・ウイングに回し、瞬間的に急加速し、ロブディと覇道の間に割って入り、防ぼう御ぎよ姿勢―しかし、間に合わない。

　肩、腿もも、脇わき腹ばら―三発の飛礫がアズラッドの肉体をえぐった。

　ロブディは空中でさらに腕を振ふり被かぶる。

　が―

「―撃て‼」

　覇道の号令と共に、小しよう銃じゆう弾だんの嵐あらしがロブディを襲おそった。

「……ちッ！」

　ロブディが飛び下がった隙に、潜水艦の昇しよう降こうハッチからクロフォードが飛び出し、エイダとアズラッドを艦かん内ないに運び込んだ。最後に覇道を収容すると、潜水艦は急速に潜せん航こうした。

第三章 邪神咆吼——神の国、終末の呼び声

復ふく讐しゆうは矛む盾じゆんの上に成り立つものであり、それがゆえ、必然的に魔まの要素をも孕はらむ。

人は復讐者に生まれつくのではない。人であることをやめ、復讐者という名の魔ま物ものとなるのは〝持たざる者〟ではなく、〝失った者〟だ。

ある者にとっては富、ある者にとっては栄えい誉よ、ある者にとっては信念──陽光の下もと、正常に生まれ育ってきた者が、各おのの々おのの人生をかけて築き上げ、手に入れたなにか。自らの魂たましいともいえるそれを突とつ然ぜんに、そして永久に失った時、その空くう隙げきに忍しのび込む闇の囁ささやき──取り戻もどすことが不可能ならば、より多くを破は壊かいせよ──のために、人は復讐者となるのだ。

復讐者アズラッドの体内に存在する闇、人の形をした空くう洞どう──

彼女の名を〝ウアルダ〟という。

ウアルダ。

明めい敏びんな知性を帯びて輝かがやく瞳ひとみ。軽かろやかな詩のように響ひびく声。

月の光を浴びる、伸のびやかな褐かつ色しよくの肢し体たい。

花弁のような唇くちびる、薔薇ばらの香かおりの君。

ウアルダ。

平へい凡ぼんな青年にすぎなかったアズラッドが手に入れた、ただひとつの宝。口にするたび、心を喜びで満たしたその名は、しかし、ある日を境に彼の魂を呪じゆ縛ばくする言葉となった。

　──ウアルダの叔父おじ、ワッハーブはテヘランの豪ごう商しようであり、骨こつ董とうの収集家でもあった。中国の壺つぼ、アフリカの仮面、東とう欧おうのからくり時計──彼は聡そう明めいな姪めいを助手に、東西の珍ちん奇きな古美術品を買い漁あさっていた。

「叔父様ったら、本当に子供みたいなのよ」

　鈴すずのように笑いながら、ウアルダは言った。

「今日も、お客様にお宝をさんざん自じ慢まんしていたかと思ったら、『売ってくれ』って言われたとたんにあわてて仕し舞まい込んじゃって」

「それは、さぞかし価値のあるものだったのだろうね」

　アズラッドは遠えん慮りよがちに、自らの考えを口にした。

「……僕には、骨董のことはよく分からないけれど」

「なら、勉強ね？」

　そう言って、ウアルダは背後に隠かくしていた物を、両手でアズラッドの目の前に突つき出した。

　それは、ひと抱かかえもありそうな一冊の書物だった。赤い革かわ表びよう紙しのべたついた光こう沢たくは、まるで鮮せん血けつを塗ぬりたくったようだ。

「これは……？」

「ふふ……叔父様があんまりびくびくしてらっしゃるものだから、ちょっといたずらして、持ってきてしまったの。それにあなた、変わった本がお好きでしょう？」

　実際、これといった趣しゆ味みのないアズラッドではあったが、外国の書物を開くことは好んでいた。意味の分からない異教の文字を眺ながめるだけで、漠ばく然ぜんと全体の意味をつかみとる、そのような才が彼にはあった。それゆえに、幼少の折から許されてワッハーブの蔵書を紐ひも解とくうち、いくつかの外国語を自然に覚え、若くして重用されるようになったのだ。

　ワッハーブはこの青年の才能を愛し、ウアルダは彼の控ひかえめ

な誠実さを愛した。

　主人の縁えん者じやである上、五つも年上のウアルダは、若いアズラッドにとってはただ憧あこがれるばかりの、半ば雲上の存在だったが、ワッハーブは笑いながら言った。

「なにごとも神の思おぼし召めすまま。預言者ムハンマドの最初の妻は、十五も歳上だった！」

　親のないアズラッドは、子のないワッハーブの養子として迎むかえられ、そして、義理の従姉いとことなったウアルダを娶めとった。彼が受け継つぐことになった権力や巨きよ財ざいをうらやむ者は多かったが、アズラッドが真に欲ほつしたのは美しい妻だけだった。

　未いまだ少年の面おも影かげを残すアズラッドに対し、ウアルダは母のように、姉のように、時にはやんちゃな妹のように接した。それらすべての振る舞まいを、アズラッドは深く、静かに愛した。

　彼の人生は、平へい穏おんで、満ち足りていた。

　そのような人間が手を触ふれるべきではない物が、この世には存在する。

　ウアルダの持ち出した【流血祈き禱とう書しよ】は、その最たる物だった。

　いつもの彼ならば、昼のうちにそれを持ち主の下に返していただろう。しかし、魔が差したと言うべきか──アズラッドはその本を手元に置き、その日の仕事を終えたのち、ランプの灯あかりの下で紐解いた。

　古い羊皮紙を綴とじたページには、これも鮮血を思わせる真っ赤な顔料で、なにごとか記されていた。見たこともない文字だ。東洋の漢字とも違ちがう……いや、そもそもこれは文字なのか？

　アズラッドが異形の書物に見入っていると、灯とう心しんの不具合か、ランプの光がちらついた。

　朽くちかけた羊皮紙が、一いつ瞬しゆん、ぴくりと震ふるえた。渦うずを巻いて絡からまりあう深しん紅くの描びよう線せんが、生き物のように蠢うごめき、アズラッドの指に絡みついた。

「──ッ!?」

　アズラッドは手を引いた。

　……いや、錯さつ覚かくだ。

　凹おう凸とつのある紙面が光の加減で微び妙みように陰いん影えいを変えたため、文字が動いたように見えたのだ。

　アズラッドの理性はそのように判断し──しかしそれ以外の、彼の才能の核かくを成す部分は、もっと禍まが々まがしい、言葉にならない感覚を捉とらえていた。

（……今日は、少し疲つかれているのかもしれない）

　いずれにせよ、アズラッドは聡明で堅けん実じつな男だった。彼は本を閉じ、慎しん重ちように──いささか慎重すぎるほどに──しっかりと布で包み、鍵かぎつきの鞄かばんに入れた。そして、鞄を床ゆかの片かた隅すみに置くと、神の名を呟つぶやき、二度と触れようとはしなかった。

　その夜、アズラッドが訪おとなった寝しん室しつは無人だったが、少しの間待っていると、ウアルダが現れ、とばりの陰かげで寝ね化け粧しようを整え始めた。

「ごめんなさい。昼間のお客様がまたいらして、また売るの売らないのって──ねえあなた、例の本はどこに置きました？」

「明日、僕が返しておこう」

　と、アズラッドは答えた。

「あれには、なるべく触れないほうがいい」

「私、なんだか不安で……なんだか気味の悪い人だったものだから」

　そう言って、ウアルダはアズラッドの肩かたにすがった。

「……あの本、あなたの部屋に置いてあるの？」

　アズラッドは妻の細い体を抱だき締めながら言った。

「僕が義父ちち上うえと話し合って、きちんと取り計らうよ」

　──その夜のウアルダは、常より激しかった。かつてない、全身に絡みつくような感覚が、アズラッドを幻げん惑わくした。

　夫の体の上で息を切らせながら、彼女は言った。

「やっぱり心配だわ……ねえ、本はちゃんとしまってあるの……？」

「大だい丈じよう夫ぶ、鞄に入れて鍵を掛かけたから……」

「そう……それなら安心ね……うふふ──」

　その時、ウアルダの口元に、見たこともない歪ゆがんだ笑えみが浮うかんだ。しかし、そう気づくまもなく、アズラッドの意識は急速に闇やみに沈しずんでいった。

　──ワッハーブとウアルダの死体が発見されたのは、翌朝のことだ。少なくとも夜半まで商談をしていたという応接室で、並んで殺されていた。死体は側頭部を割られ、脳をきれいに掻かき出されていた。

　誰だれが、なんのためにそのようなことをしたのかは分からない。

　この一件でワッハーブの財産を受け継ぐことになるアズラッドにも一応の嫌けん疑ぎが掛かったが、骨こつ董とう品ひんの保管室が荒あらされていたことから、物取りのしわざだろうということになった。

　……いったいなにが起こったのか、なぜこのようなことが我わが身に降り掛かったのか。

　アズラッドには理解できなかった。

　彼は商いを畳たたみ、屋や敷しきの一角に引きこもった。

　あの最後の日に、ワッハーブを訪おとずれたという客──使用人の言葉によれば、小こ柄がらな老人──は、〝ラアル・ロブディ〟と名乗ったという。人を雇やとって調べさせたところ、ロブディなる人物は〈闇色のダークネス夜明け団・ドーン〉という英国の秘密結社

の幹部であることが分かった。

　だが、そこまでだった。

　アズラッドはそれきり、ロブディの足取りを見失った。彼が今、どこで、なにをしているのか。なんのためにワッハーブを訪問したのか。それは分からない。

　彼の幸福を破は壊かいしたものがなんなのか。

　あの日、彼の部屋から鞄ごと持ち去られた赤い本は、いったいなんだったのか。

　そして、あの最後の夜、アズラッドと臥所を共にしていた者は、いったい何者だったのか。

　結局、彼にはなにも分からなかった。

「──そりゃあ、分かるはずがない」

　と、黒い肌はだをした男は言った。

　事件からすでに半年──そのころには使用人すら近づけることはなく、屍しかばねの如ごとき空くう虚きよな日々を送っていたアズラッドだが、エジプトから来たというこの訪問者がラアル・ロブディの名を出したと聞き、会ってみる気になったのだ。

　黒い男は続けて言った。

「相手は魔ま術じゆつ師し、人の理ことわりで捉えられるものではない。しかも、彼は今や、忌いまわしき【流血祈き禱とう書しよ】──ズアウィア神を祀まつりその力を引き出す、極めて強力な魔ま導どう書しよを手にしている」

「それが、なんだ」

　アズラッドは言った。淀よどんだ瞳ひとみの奥に、新たな火が点ともりつつあった。

「俺は、奴やつを……ロブディを……捕つかまえて……殺す……！」

「ははは、その意気やよし、だ。しかしどうやって？　このままでは、その怒いかりにのぼせた脳みそを、かの魔人の夕食に供するだけだね」

　黒い男の言葉の端はし々ばしは嘲ちよう笑しよう的で、必ずしもアズラッドに対して好意的ではなかった。しかし同時に、この男が発する言葉が尋じん常じようの理を超こえた真実であることを、アズラッドは直感していた。アズラッドが押し黙だまると、男は続けて言った。

「分からないなら教えてあげよう。目には目を、魔導書には魔導書を──君自身が魔導書を得て、魔術師となればよい。幸い、君には天てん賦ぷの才がある。〝最強の魔導書〟を従したがえ、最強の魔術師になることさえ可能だろう……そう、〝死霊マスター・秘法オブ・ネクの主ロノミコン〟にさえね」

　黒い男は席を立った。

「とにかく、まずは魔導書を探すこと、魔道に踏ふみ込み、ロブディと同じ世界に属すること。それが、君の復ふく讐しゆうの大前提だよ。──話はこれで終わりだ」

「待て」

　男の背に、アズラッドは声を掛けた。

「おまえは何者だ。奴の……ラアル・ロブディの仲間ではないのか」

「私は誰の仲間でもないよ。強しいて言えば、ゲームに奉ほう仕しする者──といったところかな」

「ゲーム……？」

「そう、ゲームだよ」

　黒い男は振ふり返ると、にたりと笑った。魔ま物ものの笑みだった。

　──そして、アズラッドは行動を開始した。

　その第一歩は、魔導書の探たん索さくだ。

アズラッドはワッハーブの骨董がらみの交友関係を端はしから当たった。彼らの中にはこの世の裏に潜ひそむ事情、殊ことに図書館や宝物庫に眠ねむる奇き書しよのうわさを知る者がいた。それらしき物が見つかれば、アズラッドは財産を湯水のように使い、それを買い求めた。金で買えぬものならばワッハーブの遺のこした骨董との交こう換かんを提案し、それも叶かなわぬとあれば、恫どう喝かつし、強ごう奪だつし、あるいは騙だまし取った。

それは、かの怨おん敵てきラアル・ロブディの行動の再現でもあった。

魔導書が人を魔に変える──あの黒い男が言ったことは、むしろ逆であったかもしれない。

魔と化した者が魔導書と出会うのだ。

魂たましいに穿うがたれた空くう洞どうを復讐の熱で満たし、アズラッドは奔ほん走そうした。魔導書との出会いを待たずして、彼の精神は魔物と化しつつあった。

かつて、彼の求めたものは、ただひとつだった。

そして、今、彼の求めるものも、ただひとつだ。

最愛の女と、最大の怨敵。

追いすがる彼を振り返る、褐かつ色しよくの美び貌ぼう。

混こん濁だくした彼の精神の中で、すでに両者の区別はつかなくなりつつあった。

+

「ウアルダ……‼」

アズラッドは上体を起こした。胸に巻かれた包帯に、大きく血がにじんだ。

彼を悪夢の世界から引き戻もどしたのは、少女の呼び掛かけの声だった。

「アズラッド──妾わらわの言葉が理解できるか、アズラッド？」

「ウ、ア、ル……ダ……？」

アズラッドは荒あらい息をつきながら視線をさまよわせた。

その顔を覗のぞき込んでいた少女──アル・アジフは、自らの衣服が血に濡ぬれるのにも構わず、アズラッドの上体を抱だき止めた。

「落ち着け、アズラッド──精神を集中し、肉体を制せい御ぎよせよ」

「……ああ……分かった、アル・アジフ」

やがて、アズラッドの呼吸が整い、その頬ほおと視線に生気が蘇よみがえった。自らの肉体に賦ふ活かつ呪じゆ文もんを掛け、体調を快復させたのだ。

「お加減は……？」

クロフォードが呼び掛けると、アズラッドは無言でうなずいた。

魔ま術じゆつ師しという存在は、意識を保っている間は極きわめて不死に近い。だが、それは回転する独楽こまがかろうじて平へい衡こうを保つような、危あやういものだ。未いまだ彼は重傷者であり、ほんの一いつ瞬しゆんの気の緩ゆるみが命取りとなりかねないのだ。

「あの……アズラッド、さん……？」

寝しん台だいの傍かたわらに座っていたエイダが、おずおずと声を掛けた。

「私……その……私のせいで……」

口くち籠ごもるエイダに一瞬だけ目を留め、それからアズラッドは室内を見回した。

さほど広くはない客室だ。アズラッドの寝ねている寝台の他ほか

に、椅い子すや医い療りよう器具が持ち込まれ、即そく席せきの病室となっている。

「ここは……？」

「アーカムの覇道邸ていだ」

　と、アル・アジフが答えた。

「覇道┄覇道はどこだ？」

　寝台に手をつき、アズラッドは起き上がった。怪け我が人にんとは思えないしっかりとした仕し種ぐさだったが、包帯ににじむ血が、じわりと広がった。

　あわてて立ち上がったエイダが、アズラッドを支えようとした。が┄

「下がれ、小こ娘むすめ！」

「……ハイ」

　アル・アジフに一いつ喝かつされ、すとんと腰こしを下ろした。

「そもそも汝なれが┄」

　追い討うちを掛けようとするアル・アジフを抑おさえながら、アズラッドが言った。

「気にするな、ダーレス。……元より、君には関係のないことだ」

　憂うれいを帯びた褐色の顔に、ほんのわずか、気き遣づかうような微び笑しようが浮うかんだ。エイダの初めて見る、彼の人間らしい表情だった。

　クロフォードが、アズラッドのコートを持ち出してきた。

「お目覚めになり次し第だい、主人の下もとにご案内するよう、言いつかっております」

「ああ、頼たのむ」

　広げられたコートに腕うでを通すと、アズラッドはアル・アジフ

と共に、ドアに向かって歩き出した。

　そして、

「どうぞ、お嬢じよう様さまもごーいつ緒しよに──」

　クロフォードが促うながしたが、エイダは椅子に座ったまま動かない。

「……あとで、行きますから……」

　うつむいたまま言うと、クロフォードはゆっくりとうなずいて、部屋を出て行った。

　室内には、エイダだけが残った。

　せめて、アズラッドの意識が戻るまで──そう言ってこの客室に詰つめていたが、今となってはもう、自分がこの屋や敷しきにいる意味はない。

　いや──もはや世界中のどこにも、自分がいるべき場所などないのだ。

　半年前、意い気き揚よう々ようとロンドンを発たった時には、自分が世界をも変えるつもりでいた。しかし、今や自分は、世界の──世界に含ふくまれる闇やみの重さに押し潰つぶされようとしていた。

　エイダは気づいていた。

　──父の屍しかばねの傍らで泣いていたあの夜から、自分は一歩も進んではいなかったのだ。

　やがて、エイダは寝台に俯うつぶし、嗚お咽えつを漏もらし始めた。

+

「これまでの調査から推定される〝ズアウィア神しん殿でん〟の位

置は、およそこのあたり──」

　覇道の執しつ務む室しつのデスクに広げられた巨きよ大だいな南米大陸地図、その一点にアーミティッジは指を立てた。ギアナ高地の南西部だ。

　その指が一いつ旦たん引き戻もどされ、地図の北ほく端たんから大西洋を渡わたり、アマゾン川の河口から大陸内部に入っていった。そして、最初に示した地点に向かって、ぐるりと渦うずを巻くように指先を動かしながら、アーミティッジは言葉を続ける。

「アーカムから潜せん水すい艦かんあるいは高速蒸気船でマナウスまで三日、汽艇ランチでネグロ・ブランコ川とその支流を遡さかのぼること四日、そして密林を徒歩にて踏とう破はすること七日──順調に行っておよそ二週間の行程です」

「それでは遅おそすぎる」

　覇道は首を横に振ふった。

「〝マナウス神像〟を手に入れた今、ロブディはすぐにでも翼よく竜りゆうを駆かって神殿へ戻り、邪じや神しん復活の儀ぎ式しきを再開するだろう。我々は能あたう限りの速度で奴やつを追わなければならん」

「しかし、これは我々の採り得る最短の──」

　アーミティッジの言葉をさえぎり、覇道は地図に指を走らせた。北端から、まっすぐ神殿の位置へ。

「すでに丸二日後おくれをとっているが、飛行船ならば最大速度で直行しておよそ五十時間。奴らとほぼ同時に到とう着ちやくできる」

「無む謀ぼうです、ミスター覇道」

「飛行船は空中からの攻こう撃げきに対して無力です。敵てき陣じん営えいに翼竜がいる以上──」

「……それは、俺が引き受ける」

　会話に割って入ったのは、アル・アジフを連れ、包帯の上にコー

トを羽織ったアズラッドだ。その後ろに、彼を案内してきたクロフォードが立っている。

「やあ、起きたか」

　片手を上げる覇道を正面から見み据すえ、アズラッドは言った。

「覇道、俺を決戦の地まで連れて行け。あとのことまでは保障できんが、それまでは俺がおまえたちを守る──この条件では不服か？」

「とんでもない」

　覇道は肩かたをすくめた。

「私もそう提案しようと思っていた」

「しかしアズラッド、あなたは戦える体では──」

　アーミティッジを制して、覇道が言った。

「そう言ったところで引き下がる男でもないだろう。最強の魔ま術じゆつ師しの力、せいぜい利用させてもらう──それでいいな？」

　物言いたげに口を尖とがらせるアル・アジフを抑おさえ、アズラッドはうなずいた。

「──よし、これで決まりだ」

　覇道は振り返った。

「アーミティッジ、飛行船の手配を──」

『お待ちください！』

　割われ鐘がねのような声が、執務室に響ひびき渡った。

　両開きのドアの向こうに、潜せん水すい服ふくを着たゴリラのような、異形の巨きよ体たいが立っていた。

　電動服モーター・スーツ姿の、オーガスタ・エイダ・ダーレスだ。

「お嬢じようさん……!?」

『ミスター覇道、私もお供させていただき──』

　全身から羽虫のような電動機の音を立て、エイダは大またに室内に踏ふみ込んだ。と──背はい嚢のうの上じよう端たんがドア枠わくに当たり、彼女は仰あお向むけにひっくり返った。

『──きゃああっ!?』

　転てん倒とうの衝しよう撃げきで、畳たたまれた気球が背嚢から飛び出し、自動的にガスが充じゆう塡てんされ始める。

　ぶしゅううぅ～～ッ！

『ふぐぅ～～～～ッ!?』

　その場でふくらみ始める気球に半ば埋うもれ、じたばたともがくエイダを、クロフォードが助け起こした。

　アズラッドがわずかに眉まゆをひそめ、アル・アジフは苦々しく顔をしかめた。

「──ミスター覇道？」

　アーミティッジが振り返ると、

「あー……うむ」

　覇道は頭を掻かいた。

　エイダが自分の首のあたりをいじると──改良された新型金具によって──電動服のヘルメットがぱかりと跳はね上がった。

「ぷはっ！」

　真っ赤に上気した顔、泣き腫はらした目。しかし、その瞳ひとみは決然たる意志を秘ひめて輝かがやいていた。

「引けと言われても引き下がりはしませんわ、ミスター覇道！
〝科学の騎き士し〟の歩むべき道は、前進あるのみなのですから!!」

　──先ほどのような、暗く、寒く、そしてみじめなどん底の状態は、オーガスタ・エイダ・ダーレスの原風景だ。

しかし、それは同時に、彼女の爆ばく発はつ的な行動力の源泉でもあるのだった。

+

約五十時間後──

地平線の彼方かなたまで黒々と茂しげる大密林の上空を、四隻せきのノイエ・ツェッペリン式飛行船が編隊を組んで航行していた。

アーカムから直線距きよ離りにして約四千五百キロ。覇道財ざい閥ばつの飛行船団は、大西洋バミューダ海域及およびカリブ海東部の上空を抜ぬけ、赤道直下・ギアナ高地南西部に到とう達たつした。そこまではなんの障害もなかった──が、旅程の最後の数時間に

至って、D　　D　　ダークネス・ドーンの猛もう攻こうが始まった。

密林の彼方から飛来した数十頭の翼よく竜りゆうの群れが、雲うん霞かのようにざわめきながら船団に迫せまりつつあった。南米大陸に到達してより、三度目の襲しゆう撃げきだった。

ほどなく飛行船のゴンドラからガトリング銃じゆうの射しや撃げきが始まったが、万が一にも自分や味方の船体に弾たまを撃ち込むことがないよう、射角は限られている。翼竜は射撃の及ばない上空から船団に接近し、咆ほう吼こうを放ちながら一いつ斉せいに飛び掛かかった。その鋭するどい爪つめは、硬こう式しき飛行船の船せん殻かくとガス嚢のうをやすやすと引き裂さくだろう。

と、その時──先頭の飛行船から、小さな黒い影かげが飛び出した。飛行形態の術衣をまとったアズラッドだ。アズラッドは船団の中央から高空に飛び出し、そして──

「アイオーン！」

　空中に鬼械神デウス・マキナアイオーンを召しよう喚かんした。

　大気を爆裂させながら出現した鋼はがねの巨体は、瞬しゆん間かん、鋼の翼つばさを広げて滞たい空くうすると、両手を左右の腰こしの脇わきの空間に突き込み、ふたつの鋼の塊かたまりを抜き出した。巨きよ人じん用にあつらえられたかのような、長銃身の回転拳銃リボルバー──その形状は覇道鋼造の携けい帯たいする拳銃に酷こく似じしていた。

　つい先日まで、アズラッドは銃を握にぎったことがなく、そのため彼の攻撃のイメージは偃えん月げつ刀とうによる剣けん戟げきに限られていた。長大な魔ま刃じんを振ふりかざして突とつ進しんし、あるいはそれを投げつける──空を飛ぶ敵に対して、それはあまりにも非効率的な力の用いようではあった。

　しかし、現在──

「オォッ‼」

　アイオーンは二丁の拳銃を前方に構え、連射した。〝砲ほう弾だん〟と呼ぶにふさわしい巨人サイズの拳けん銃じゆう弾だんが、ガトリング銃のような勢いで発射される。激しく回転する輪胴シリンダーの中に直接生み出される呪じゆ力りよくの弾だん丸がんは、アズラッドの霊れい力りよくと集中力が続く限り尽つきることはない。

　覇道は船団の出発直前に、アズラッドに拳銃を貸し、数十発試射させた。それだけでアズラッドは拳銃の構造を直観的に把は握あくし、〝魔刃鍛たん造ぞう〟の呪じゆ文もんを利用して自らの魔ま銃じゆうを作り出すことができた。類たぐいまれな応用力と言えた。

　翼竜群の密集部分に一気に数十発の巨きよ弾だんが撃ち込まれ、数頭の翼竜が粘ねん液えきの塊と化して飛散すると、群れの足並みが乱れた。アズラッド＝アイオーンは連射を止め、勢いを失った一頭一頭を狙そ撃げきし、確実に仕留めていく。

　やがて、十頭あまりの翼竜が倒たおされると、群れは散り散りになって飛び去っていった。D∴D∴の翼竜群は一度に勝負を決めようとはせず、その攻撃は散発的、波状的に行なわれていた。

翼竜群が視界から消えると、アイオーンの巨きよ体たいが分解した。その中から現れたアズラッドは先頭の飛行船に飛び込み、船室で術衣を解くと、ひと塊の血を吐はいて床ゆかに倒れた。

「アズラッド、意識を保て‼」

少女の姿を取ったアル・アジフが、アズラッドの頭を抱かかえ込んだ。

「―気を失えば死ぬぞ！」

駆かけ寄ったクロフォードがアズラッドの腕に高こう濃のう度どの強きよう心しん剤ざいを注射した。アズラッドの体が二度、三度と大きく跳ね上がり、全身に開いた傷口から鮮せん血けつが飛び散った。

全身全ぜん霊れいを用いる最大の術式〝機神召喚〟の行使の後に訪れる、一いつ瞬しゆんの虚きよ脱だつ状態―半ば自らの意志力によって生命を維い持じしているアズラッドにとって、それは致ち命めいの一いち撃げきに等しい。これが、翼竜群の〝波状攻撃〟の効果だった。

「アズラッドさん、アズラッドさん、しっかり‼」

エイダがアズラッドの手を握り、必死で呼び掛ける。

「小こ娘むすめ！　役に立たんのなら黙だまっておれ！」

「でも……！」

「―アズラッド」

覇道鋼造の声が、アズラッドに呼び掛けた。

白目を剝むきかけていたアズラッドが意識を取り戻もどし、血の気を失った唇くちびるが身しん体たい賦ふ活かつの呪文を唱えた。大きく息をつきながら、アズラッドは上体を起こした。

双そう眼がん鏡きようを片手に窓から前方を見ながら、覇道は問うた。

「―アズラッド、アイオーンはあと何度喚よべる」

「もうこれ以上は―」

　言い掛けるアル・アジフを抑おさえ、

「あと一度……いや、喚ぶだけなら二度だ」

　と、アズラッドは答えた。

「ふむ。最後の一回は、ラアル・ロブディと刺さし違ちがえるために……か。ならば、なるべく一度で済ませよう」

「―それは、おまえが判断することではない」

　タオルで血を拭ぬぐいつつアズラッドが言うと、覇道はにやりと笑いながら振り返った。

「君の判断よりは的確だぞ」

　アル・アジフが眉まゆをひそめたが、アズラッドは相手にせず、無言で口元を拭った。

　覇道は次いで、ゴンドラ内の全員に聞こえるように叫さけんだ。

「次回の襲しゆう撃げき時じに〝タンポポ作戦〟を決行する！」

+

　翼よく竜りゆう群の四度目の襲撃は、わずか三十分後に行なわれた。

　彼らの本ほん拠きよであるズアウィア神しん殿でんが、すでに十キロほどの距きよ離りに近づいていた。彼らにとっても、もはや後はない。覇道の一派を―ことに鬼械神デウス・マキナアイオーンを―自分たちが全ぜん滅めつしてでも止めるつもりだ。

　しかし、殺さつ到とうする翼竜に対し、唯ゆい一いつの抵てい抗こう手段であるはずのアイオーンは出しゆつ撃げきしてこない。

　代わりに一隻せきの飛行船が速度を上げ、船団の中から突とつ出

しゆつしてきた。翼竜群は反射的に飛び掛かかっていく。

と―その飛行船が、突とつ然ぜん自爆した。水素を充じゆう満まんさせたガス嚢のうが数頭の翼竜を巻き込みながら爆ばく発はつし、残った船体も炎えん上じようしながら密林に落下していく。

四隻の飛行船のうち三隻は、無線によって操そう舵だされる無人船だ。

船団の中から、もう一隻飛行船が進み出た。

翼竜たちは警けい戒かいし、遠巻きに見守る―が、その飛行船がゆっくりと包囲を突とつ破ぱしていくに至って、看過し切れずに飛び掛かる。

しかし、この一隻もまた囮おとりだった。しかも、単なる囮であるのみならず、ガス嚢の間に爆ばく薬やくを満まん載さいした、空飛ぶ爆ばく弾だんなのだった。再び自爆する飛行船に、さらに数頭の翼竜が巻き込まれ、残りは十頭足らずとなった。

そして、さらにもう一隻。

この一隻は、はたして囮か否いなか―

警戒の視線の中、三隻目の飛行船が船体の数箇か所しよから煙けむりを噴ふきだし、翼竜群は悲鳴を上げて飛び離はなれた。

しかし、爆発はしない。これは煙えん幕まくだ。

長い灰色の尾おを引き、飛行船の船首を先頭にした煙の大だい蛇じやが、密林の上空をうねりながら進んでいく。その頭から、ぽろぽろと小さな塊かたまりが落下した。

直径二メートルほどの気球にワイヤーで吊つり下げられた、ずんぐりとした人ひと影かげ。エイダの電動服モーター・スーツを元にした複製品だ。

これが覇道の言う〝タンポポ作戦〟―三十体の電動服は、煙幕にまぎれ、タンポポの綿毛のように風に吹ふかれながら、次々と密林に降下していった。

エイダはその降下部隊の先頭に、電動服の基き礎そ設計者兼けん

運用経験者として参加していた。

『きゃあああ～～～～ッ！』

　足そつ下かに地面が急速に迫せまり──密林の狭はざ間まに忽こつ然ぜんと、放射状の都市構造が見え始めた。

　──前日、飛行船の中では、降下作戦の説明のため覇道鋼造が一枚の地図を広げていた。大ざっぱな手て描がきのそれは、かつて密林の神殿に踏ふみ込んだ学者が残したメモを元に描えがかれたものだという。

「あら、これって──？」

　地図を覗のぞき込んだエイダが呟つぶやいた。

　この、神殿を中心にした放射状の通路、河川や丘きゆう陵りようの配置──

「ああ」

　覇道はうなずいた。

「アーカムシティの構造に酷こく似じしている。この支流がミスカトニック川、この石柱群がアーカム旧市街、これらのラインが新旧アーカム街かい道どう。神殿本体は覇道邸ていに当たるわけだ」

「……そんな偶ぐう然ぜんって、あり得るのかしら」

「偶然ではないよ、お嬢じようさん。彼らにとっての邪じや神しんズアウィア、我々にとってのデモンベイン──」

　覇道は地図上の神殿を、トンと指で突ついた。

「これは〝神〟を顕けん現げんせしめることを目的とする風水的システムの、必然的構造なんだ」

　──そして、今。

『きゃあ、あ、あ、あッ！』

　ガシャガシャン！

悲鳴を上げながら降下したエイダは、幅はば広ひろい石いし畳だたみの街路の上に接地し、対地速度をいなすためにそのまま十メートルほど走ると、足元につまずき、前のめりに一回転して止まった。

「──お嬢さん、怪け我がはないか」

声を掛け、エイダの電動服を引き起こしたのは、同様に電動服を身に着けた覇道鋼造だ。

エイダはヘルメットを撥はね上げて答えた。

「はい、あの、慣れていますから！」

「それはなにより──ところで、ここがどこだか分かるかね？」

エイダは前日に打ち合わせた集合地点を思い出し、着地直前に上空から見えた〝街路〟と照合しながら答えた。

「ええと、〝旧市街〟の──」

「そう、〝ピーバディ広場〟。目的地までは、わずか二、三キロだ」

覇道は満足げにうなずいた。

やがて、街路のあちこちから、降下した電動服の一団が現れた。各おのの々おの、手持ち式に改造したガトリング銃じゆうを抱かかえている。

整列と点呼の後、覇道は拡声器のスイッチを入れた。

『我々はこれより〝旧アーカム街かい道どう〟を通り、〝覇道邸〟へ向かう。降下時に負傷した者はこの場に留とどまり、回収を待て──』

先せん端たん科学の粋すいたる重武装の電動服部隊は、石造りの古代遺い跡せきの中を、早足で行軍し始めた。

覇道の横に並んで小走りになりながら、エイダはヘルメットを開け、耳をすませた。電動機の唸うなりと装具のがちゃつく音の中、得体の知れない鳥や獣けものの鳴き声──密林の音が、かすかに聞こ

えてくる。

　──しかし、この〝街〟の様子はどうだろう。

　何百年もの間、手入れをする者もなかったはずの〝街〟は、しかし、密林に呑のまれることもなく、静せい謐ひつな様子でたたずんでいる。まるで、この土地が生命の侵しん入にゆうを拒こばんでいるかのようだ。

　そう思っていると──

　ドクン──

　地の底から響ひびくような振しん動どうが、あたり一帯に──おそらく、この遺跡全体に──響いた。

　ドクン──

「これは……？」

「──いよいよ始まったな」

　覇道が呟いた。

「これは、邪神の心音だ」

+

「□□Ia!」

「□□Ia!」

「Ia! Zs-awia!」

　遺跡の中心、神しん殿でんの中ちゆう核かくたる環かん状じよう列石を何重にも取り巻き、ズアウィアの〝しもべ〟たちは轟とどろくような礼らい賛さんの叫さけびを投げる。

　列石の中央の高い祭さい壇だんに立ち、ズアウィア神そのものの

ようにその声を受け止めているのは、深しん紅くの術衣―魔ま導どう書しよ【流血祈き禱とう書しよ】をまとった女、魔ま術じゆつ師しラアル・ロブディだ。

　ロブディは祭壇の中央に、ひと抱えほどの角張った石柱―いや、石像を設置した。かつてこの地から盗ぬすみ出された〝マナウス神像〟が、十年の時を経て帰き還かんしたのだ。

「□□Ia! Ia!」

〝しもべ〟たちの叫びが、ひときわ高まった。

　ロブディは神像の前にひざまずくと、両りよう腕うでを大きく広げた。赤い術衣がどろりと溶とけ、タールのように足元に溜たまった。褐かつ色しよくの裸ら身しんを露あらわにしながら、ロブディは神像を掻かき抱いだく。張り詰つめた腿ももの間に挟はさまれた石柱は、鉱物製の男根を思わせた。

「□□Ia! Ia!」

「Ia! Zs-awia!」

「Ia! Zs-awia!」

「Ia! Zs-awia□□」

「はぁ……ふぅ……」

　高まる歓かん声せいの中、頬ほおを上気させ、荒あらい息をつきながら、ロブディは乳ち房ぶさを、腰こしを、神像に擦こすりつけ始めた。溶けた術衣が血の触しよく手しゆとなり、褐色の肌はだと黒い石の表面を這はい回る。そのさまはまさに、邪じや神しんとの交合そのものだった。

　これこそが、ズアウィア神復活の儀ぎ式しき。

　邪じや悪あくなる魔術師ラアル・ロブディの、積年の野望。あるいは人類の発生以前にこの地に封ふうじられた邪神そのものの、幾いく億おく年ねんの渇かつ望ぼう―

　ひとたび地の底より解き放たれれば、ズアウィア神は瞬またたく間にこの星を呑のみ込み、宇宙の理ことわりをも書き換かえるだろ

う。

　それは、世界の終しゆう焉えんと言ってよい事態だ。

　今行なわれているのは、この世の終わりを生み出す儀式なのだ。

「Ia! Zs-awia!」

「Ia! Zs-awia!」

「Ia! Zs-awia!」

「Ia□□」

　いつしか、周囲を囲む〝しもべ〟たちは、人間の姿を捨て、思い思いの獣となって、互たがいに犯おかし合い、喰くらい合い始めた。言葉にならない唸りと咆ほう吼こうの渦うずが、混こん沌とんの渦となって環状列石の周囲を巡めぐる。

　覇道鋼造かアーミティッジ――理を以もつて魔道を研究する者が見たならば、原始的なこの儀式が、アーカムの〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟と同様の構造を持っていることに気づいただろう。狂きよう騒そう的な霊れい気きの渦が祭壇を囲んで回転し、列石の中央の神像を活性化させるのだ。

　はたして――

　神像の胸のあたりから、虹にじ色いろに光る泡あわのようなものが、ぽこりとにじみ出した。

　それは―いつ瞬しゆん空中に留とどまったのち、ロブディの胸に吸い込まれるように消えた。

「ああ――！」

　ロブディが髪かみを振ふり乱し、頭をのけぞらせた。

　続いて、二つ、三つ、四つ――次々と生まれる泡も、同様に褐色の肉体に収まっていく。

「ああ――ああ――‼」

　後頭部が地に着くほどにのけぞり、自らの乳房を揉もみしだき、

下腹部のみを神像に擦り付けながら、ロブディの体がびくびくと震ふるえた。その痙けい攣れん的な律動に合わせ、強大な呪じゆ力りよくを孕はらんだ血の触手が、祭壇の床ゆかに彫ほられた溝みぞに染しみ込んでいく。

　ドクン――

　ドクン――

　地の底から、ズアウィア神の鼓こ動どうが聞こえてきた。

　環状列石がその響ひびきに共きよう振しんし、空間自体を震わせていく。

「はあ――ああ――」

　ドクン――

「ああ――‼」

　ドクン――‼

　ロブディの悩のう乱らんに合わせ、邪神の鼓動も高まっていく。

「あああああ……‼」

　やがて、ロブディが絶頂を告げようとした時――

　ドォッ――‼

　神しん殿でんの一角に火柱が立ち、〝しもべ〟たちの動きが乱れた。

『やあ、ラアル・ロブディ！』

　覇道鋼造の声が、拡声器を通して響き渡わたった。

『お楽しみに水を差してしまったかな⁉』

　同時に、〝しもべ〟の群れの中に、電動服モーター・スーツの一団が突とつ入にゆうした。

　統制を失った獣じゆう人じんたちが右往左往する中、ダイナマイ

トで突とつ破ぱ口こうを開き、ガトリング銃じゆうで周囲をなぎ払はらいながら、〝科学の騎き士し団〟は祭さい壇だんに殺さつ到とうした。

「おのれ―覇道！」

ロブディは両手に灼しやく熱ねつの飛礫つぶてを発生させ、先頭を切って走る電動服に撃うち込んだ。

ふたつの飛礫のうち、ひとつは彼が手に持ったガトリング銃を打ち落とし、もうひとつは電動服の胸を直ちよく撃げきした。

しかし、彼の勢いは止まらない。祭壇のはるか手前を踏ふみ切り、驚きよう異い的な跳ちよう躍やくを見せ、そして―電動服を内側から割って、術衣姿マギウス・スタイルの男が飛び出した。

「おまえは―!?」

その言葉が終わらぬうちに、〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟が褐色の胸を貫つらぬいた。

術衣の男―アズラッドの暗い瞳ひとみが、ロブディを見み据すえていた。

―魔ま術じゆつ師しラアル・ロブディは、ついに斃たおされた。

通常の刀とう剣けんならいざ知らず、〝死霊マスター・秘法オブ・ネクの主ロノミコン〟が致ち死しの呪じゆ文もんを込めた魔ま刃じんを受けた以上、魔ま人じんロブディといえども、融ゆう解かいしながら飛び散るしかない。

誰だれもがそう思った時―

（まだだ、アズラッド！）

アル・アジフが叫さけんだ。

豊かな胸から偃月刀の柄つかを生やし、ロブディが微笑ほほえんでいた。

「……あなただったの、アズラッド」

その声はいつものしわがれた老人のものではない。若い女──ウアルダの、艶つやめいた声だ。

（──此奴こやつ、すでに邪じゃ神しんと融ゆう合ごうしている！）

その通りだった。

ロブディの肉体の一部ともいえる〝血の術衣〟は、先ほどの儀ぎ式しきの際に、その一部を地下深くに伸のばし、ズアウィア神と接せつ触しよくしていた。今のロブディは、すでに邪神の端たん末まつとも言うべき存在となっていた。

ロブディの胸で、偃月刀が消えた。魔ま力りよくによって構成された刃やいばが、強制的に解かい呪じゆされたのだ。魔刃の消えた胸むな元もとには、傷ひとつ残っていない。ロブディが、一歩踏み出した。──いや、その表情、その仕し種ぐさは完全に、アズラッドの妻、ウアルダのものだった。

「来てくれて、うれしいわ」

ウアルダは花のように微笑んだ。

アズラッドは飛び下がろうとした。しかし、足元に溜たまった血が触しよく手しゆを伸ばし、アズラッドの脚を、そして全身を絡からめ取りつつあった。

敵が邪神の無む尽じん蔵ぞうの生命力を得た今、これを斃す手段はただひとつ──

「アイオ──」

だが、彼が自らの鬼械神デウス・マキナの名を呼ぼうとしたその口を、ウアルダの唇くちびるが塞ふさいだ。

（……今までつらかったのね、アズラッド）

ウアルダの声が、アズラッドの体内に直接響いた。

（でも、もう苦しまなくてもいいの）

（あなたはもう戦わなくていいのよ）

「ふざけるな、ロブディ──俺の妻を騙かたるな！」

（うふふ……）

ウアルダが笑った。幸福に満ちていたあのころの、堅かた物ぶつのアズラッドを優やさしくからかう時、そのままの微笑だった。

（ふざけてなんかいないわ）

（そもそも私はロブディなんかじゃない、なんでもないものよ）

（ラアル・ロブディの顔をしていたのは、ただそれが便利だったから）

（あなたが望むなら、ずっとウアルダでいてあげるわ）

（ずっと……この世の終わりまで）

「くッ──アイオーン！」

アズラッドは再びアイオーンを召しよう喚かんしようとした。だが、自らの分身であるはずの機神は、なんの反応も返さない。攻こう撃げきの意志、破は壊かいの意志──鬼械神デウス・マキナを駆く動どうするための決定的な要素が、今のアズラッドには欠けているのだ。なぜならば──

（なぜなら、今あなたは、とても満足しているから）

（だって、あなたはもう一度私が欲しかっただけなんだから）

（いいえ、強がっても駄だ目めよ。あなたのことはなんでも分かってる）

（……たとえ私を殺して世界を守っても、そこにはあなたの居場所はないわ）

（それ以前に、私をもう一度失うことに、あなたは耐たえられない）

（だから……もう、終わらせてしまいましょうよ）

（来て、アズラッド。私とひとつになるの）

（〝死霊マスター・秘法オブ・ネクの主ロノミコン〟の血と魂たましいは、ズアウィア復活のための、この上ない呼び水となるわ）

「語るに落ちたな――」

アズラッドは言った。

「おまえはウアルダではない……地上への復活を目もく論ろむ邪神だ……！」

（ええ、だから？）

（それは私がウアルダになれないという意味ではないわ）

（よく考えて。私たちの目的はひとつよ）

（あなたが真に壊こわしたいものは〝ウアルダのいない世界〟。ねえ、そうでしょう？）

―アズラッド、どうしたアズラッド―

―気をしっかり持て、アズラッド―

遠くで自分の名を呼ぶ者がいる―が、よく聞き取れない。

代わりに、アズラッドはウアルダの言葉を反はん芻すうした。

「ウアルダの……いない、世界……」

この五年間、彼がさまよってきたそこは、冥めい府ふにも似た、暗く空くう虚きよな世界だった。

アズラッドの頭を、ウアルダは温かな胸に掻かき抱いだいた。

（そうよ、アズラッド）

（そんな世界はもう要いらない）

（あなたには、私がいるんだから……）

「ウアルダ……」

アズラッドは目を閉じた。あまりにも疲つかれていた。

―少し、休もう。

そう思った。

だが―

『―おやめなさいッ！』

気き迫はくのこもった大だい音おん声じようが、あたりに轟とどろいた。

祭さい壇だんの下に、一体の電動服が仁に王おう立だちになって

いた。ひとりだけ、ガトリング銃じゆうではなく電極付きの竿さおを構えている。オーガスタ・エイダ・ダーレスだ。

『いやらしいことをして懐かい柔じゆうしようとしても無む駄だです！　なぜなら―きゃあ！』

　横合いから襲おそってきた黒くろ豹ひように、『えいっ！　もうっ！』とエイダは電でん撃げき槍そうを叩たたきつけ、再び祭壇を見上げて胸を張った。

『なぜならアズラッドさんは―私たちの魔術師は、正しき世界のために戦う、正義の人なのですから！　お分かりですか!?　分かったら、さっさとパンツをお穿はきなさい！』

　アズラッドは一いつ瞬しゆん呆あつ気けに取られた。

　ヘルメットの中で小鼻を膨ふくらませる少女の顔が、目に浮うかぶようだった。

　そのイメージは朝の光のように目ま映ばゆかった。眠ねむりを妨さまたげるに充じゆう分ぶんなほどに。

　続いて、いくつかの声が耳に飛び込んできた。

『アズラッド、どうした!?』

（―女から離はなれろ、アズラッド‼）

　アズラッドを抱だくウアルダの腕うでに力がこもった。赤い蔦つたのような触しよく手しゆが、ふたりの体を固く縛しばり付けていく。

「無駄よ、この人は私の―」

　ゴッ―‼

　その言葉を言い終えぬうちに、巨きよ大だいな鋼はがねの拳こぶしが彼女の体を捉とらえた。

　密着したふたりの体の間に、アイオーンが召しよう喚かんされたのだ。

鋼の拳は血の触手を引きちぎりながら突つき出され、ウアルダの体を空中に突き飛ばした。

+

統とう率そつ者しやを失った野や獣じゆうの群れを、電動服モーター・スーツの隊列は蹴け散ちらしていった。豹が、ゴリラが、肉食竜りゆうが、銃じゆう弾だんに貫つらぬかれては赤黒いタールの塊かたまりとなって、石いし畳だたみの上に崩くずれていく。

その狂きよう騒そうを背後に聞きながら、アズラッドは地面を見下ろしていた。

そこには、先ほどまでウアルダの形をしていたものがいた。

アイオーンの一いち撃げきを受け、さらに地上に叩きつけられ―半ば体の輪りん郭かくを失った血とタールの塊の中から、ウアルダの顔が、泥でい水すいに落とした仮面のようにアズラッドを見上げていた。

「ア、ズ、ラ……ド……」

ズゥ……―

アズラッドの頭上に、巨大な鋼の手が現れた。先ほどと同様、部分召喚されたアイオーンの右みぎ腕うでだ。

「……ウアルダ、君はもう死んだのだ。誰だれにとっても……俺にとっても」

静せい謐ひつな口調とは裏腹に、頭上に振ふり上げられた鋼の拳は陽炎かげろうをまとって赤熱していた。

「……さらばだ」

灼しやく熱ねつの拳が地面に振り下ろされ、そして―

石畳を割って飛び出した岩の掌が、鋼の拳を受け止めた。

「□□!?」

　反射的に飛び退のいたアズラッドを追って、石柱のような腕がもう一本飛び出し、空中に襲おそい掛かる。その手首を、咄とつ嗟さに召喚されたアイオーンの左手がつかみ止めた。

　ドクン――

　邪じゃ神しんの鼓こ動どうが、神しん殿でん全体を震ふるわせた。

　ドクン――

　ドクン――

「「「Grroowrech!!」」」

　奇き怪かいな叫さけびを上げながら、野獣の群れが一いつ斉せいに融ゆう解かいし、赤黒い生きた波となって祭壇に打ち寄せていく。

　儀式はまだ終わっていないのだ。

『な、な、なんですの!?』

　あわてて周囲を見回すエイダの頭上に、崩ほう壊かいする神殿のかけらが降り注ぐ。

　エイダの背を押しながら、覇道が叫んだ。

『――退たい却きやくだ！　全員〝ピーバディ広場〟へ!!』

　ドクン――

　ドクン――

　地鳴りと共に大地が揺ゆらぎ、祭壇の地下から伸のびる二本の石の腕――アイオーンとつかみ合った状態のそれが、さらに伸び上がった。そして、石畳を振り落としながら、腕の主が上体を起こす。それはアイオーンに匹ひつ敵てきする巨きょ体たいを持つ、石造りの神像だった。

「こんなものが地下に……!?」

（いや……違ちがうぞ、アズラッド！）

　そう、それは地下に格納されていたのではない。祭壇を、石柱を、神殿の床ゆかや壁かべを構成する石材が、巨大な人型へと再構成されつつあるのだ。

　頭部、胸、腰こし──地面から抜ぬけ出るように成長しながら、巨きょ像ぞうはアズラッドに圧のし掛かかった。城じょう壁へきの如ごとき胸むな板いたで、このまま押し潰つぶす構えだ。

　その巨大な重量を支えるアイオーンの二本の腕に、超ちょう常じょう的な力がこもる。引き換かえに外傷の魔ま術じゆつ的な保護が弱まり、アズラッドは全身から流血し始めた。

　術衣の翼つばさがばらりと解け、環かん状じょうの〝詠えい唱しょう形態〟を取った。

「ア……イ……オーン……！」

　ゴゥ──！

　巨像を押し返し、胸部にアズラッドの体を取り込みながら、瞬またたく間に鋼の巨体が構成された。それに伴ともなって発生した衝しょう撃げき波はによって、周囲の石柱がなぎ倒たおされ、巨像の体が積み木の塔とうのように揺らぐ。

　──だが、巨像は崩れない。石材のブロックの間に赤黒いタールのような物質が充じゆう塡てんされ、その巨体を強固に支えているのだ。

　ドクン──

　ドクン──

　巨像はさらに、腰から下、二本の脚あしを形作りながら立ち上がった。その足元に打ち寄せる、液化した〝ズアウィアのしもべ〟たちが、巨像に吸収され、その体をさらに成長させていく。

　やがて、アイオーンとつかみ合ったまま、石造りの巨きょ人じんが完成した。黒ずんだ石材と赤黒いタールからなるその巨体は、身長にしてアイオーンとほぼ同等、重厚な印象を持つ角ばった胴どう体たいや手足は、アイオーンよりふた回りほど大きい。

「これは──」

（鬼械神デウス・マキナ!?）

『そうだ……！』

　アズラッドらの問いに答えるように、地上から覇道が叫んだ。

『それは邪神の力を制せい御ぎよするために作られた〝巨神のイメージ〟──最も原初的な鬼械神デウス・マキナだ‼』

「そうとも……」

　石とタールでできた巨像の胸に、デスマスクのような面が浮うかび上がった。ねじくれた古木のような、醜みにくい老人の顔だ。

「ズアウィア神の力を得て、儂わしはすべてを手に入れる」

　しわがれた声で老人は言い、そして、

「──作りましょう、アズラッド……私たちの世界を」

　その顔は見る間に、艶あでやかな笑えみを浮かべる女のものとなった。

（アズラッド……落ち着け）

「……ああ」

　アル・アジフの呼び掛けに、アズラッドは冷静に応こたえた。これまでのような激げき烈れつな怒いかりはなく、ただ痛ましい想おもいのみがあった。

「ウアルダ……もう、終わりにしよう」

　アズラッド＝アイオーンは両りよう腕うでに力を込めた。右拳こぶしが巨像の掌てのひらを砕くだき、左手が石造りの手首を握にぎり潰した。

　ゴォ──！

　一度に両手首を破は壊かいされた巨像が、獣けもののような咆ほう吼こうを上げた。と──腕わん部ぶの石材が組み変わり、赤黒い

タールと共に、新たな手首を作り上げる。

一方、アイオーンは自由になった両手にヴーアの印を結び、空中から二本の偃えん月げつ刀とうを抜き出し、そして、再びつかみ掛かってくる巨像の両腕を断ち落とした。

だが、巨像は胸板の中心から新たな腕を生やし、アイオーンの両りよう肩かたをつかむ。

（ち―これではきりがないぞ！）

瞬しゆん間かん的な攻こう防ぼうにおいては、巨像はアイオーンの敵ではない。だが、無限とも思える再生力によって泥どろ仕じ合あいに持ち込まれてしまえば、持久力に欠けるアイオーンは自じ滅めつすることになる。

その時―

『アズラッド！』

地上から、覇道が叫んだ。

『そいつの体から〝無限の心臓〟を―〝マナウス神像〟を分ぶん離りしろ！』

「なるほど……」

アズラッドの脳のう裏りに、覇道がアーカムで行なった実験の様子が蘇よみがえった。儀ぎ式しきによって活性化し、異界のエネルギーを呼び込む神像……それがこの巨きよ像ぞうの力の源か。

アイオーンは片足を巨像の腹に当て、力任せに蹴けり離はなした。アイオーンの肩かたに食い込ませた指をぼろぼろと落としながら、巨像はよろめき、三歩後退する。

次いで、アイオーンは偃月刀を捨て、回転拳銃リボルバーを両手に喚よび出した。

「オォッ―!!」

ドドドドドドドドッ―!!

胸に、腹に、腿ももに、腕に、顔に──数十発の呪じゆ力りよくの銃じゆう弾だんがひと息に撃うち込まれ、巨きよ岩がんを打ち砕く。しかし崩ほう壊かい寸前の巨像は、赤黒い不定形部分を震ふるわせながら、瞬またたく間に再生していく。

アイオーンの目は、そのさまを冷静に観察していた。

巨像の全身を巡めぐる、禍まが々まがしい再生のエネルギーの渦うず。その源は──

鋼はがねの手が抜ぬき手の形に構えられ、巨像の胸の中心──そこに浮き出ていたウアルダの顔面に、突つき込まれた。

──ウアルダ……。

巨像の背から、石せき塊かいを撒まき散らしつつ鋼の拳が突き出した。指の隙すき間まから虹にじ色いろの光が漏もれている。

ゴ……──

突とつ如じよ、赤黒いタールが粘ねん度どを失って溶とけ落ちた。呪術的な補強を失い、ただの不安定な石せき塔とうと化した巨像は、ゆっくりと崩くずれ始めた。

アイオーンもまた構成術式を解かれ、空中にアズラッドを残して消え去った。

鋼の掌てのひらからこぼれ、地上に落ちた石塊──祭さい壇だんの破片から転げ出した〝マナウス神像〟に、覇道が駆かけ寄った。未いまだ低い唸うなりを上げ、虹色の〝異次元の泡あわ〟を吐はき出し続けるそれを、封ふう印いんの口こう訣けつを唱えながら黒い布で包み、ロープで結束する。

『よし──上出来だ』

術衣の翼つばさを広げ、傍かたわらに降りてきたアズラッドに、覇道は言った。

しかし──

ドクン──

邪じや神しんの鼓こ動どうは、まだ止まらない。

ドクン──

『……急ぐぞ‼』

覇道は〝マナウス神像〟を右みぎ肩かたに担かつぎ、術衣を解き血まみれの姿で片かた膝ひざを突くアズラッドを左ひだり腕うでで立たせると、エイダや部下を逃にがした方向へと走り出した。

少女の姿を取り、アズラッドを反対側から支えながら、アル・アジフが言った。

「ここを放ほうっていくのか──邪神は今すぐにも目覚めるぞ！」

『だから、急ぐんだ』

覇道は言った。

『封印の儀式を行なおうにも、神しん殿でんがこのありさまだ。アーカムの施し設せつに持ち込むしかないだろう』

神殿の敷しき地ち全体が激しく震え、石いし畳だたみが大きく陥かん没ぼつした。

『おおっ⁉』

覇道は反射的に、電動服の胸むな元もとに設置されたコードを引いた。

バシュウ──！

背はい嚢のうから飛び出した気球に、急速にガスが充じゆう塡てんされる。降下用よりも浮ふ力りよくの大きい、脱だつ出しゆつ用気球だ。

『──つかまれ！』

アズラッドとアル・アジフを抱かかえたまま、覇道の電動服はゆっくりと上じよう昇しようを始めた。

その足元で、大地が雪崩なだれのように崩れ落ちた。

　そのあとに現れたものは、〝穴〟―いや、〝口〟。腔こう腸ちよう動物のそれを思わせる、巨きよ大だいな口だった。その直径は、およそ三十メートルといったところか。この神殿が―いや、この遺い跡せき全体が、鉱こう床しようのように地下に眠ねむる不定形の存在の上に建っていたのだ。

「これが……邪神ズアウィアとやらか……！」

　アル・アジフがそう呟つぶやいた時―

　RrrLooOooOooooooooohh□□!!

　神殿の中心部を丸々呑のみ込みながら、なおも満たされぬ飢き餓がを訴うつたえるように、邪神は奇き怪かいな咆ほう吼こうを上げた。

「くッ―‼」

　アル・アジフは咄とつ嗟さに魔ま力りよくの障しよう壁へきを張はった。さもなくば、覇道はともかく、衰すい弱じやくしたアズラッドは邪神の咆吼の直ちよく撃げきを受け、狂きよう死ししていただろう。

　邪神の〝口〟の周りに生えた赤黒い触しよく手しゆがざわざわと蠢うごめき、その先せん端たんを伸のばしてきた。触手の狙ねらいは気球―いや、覇道の担いだ〝マナウス神像〟だ。

「覇道―もっと急げ！」

　ズアウィアの触手の動きはごくゆっくりとしたものだったが、気球の上昇速度より若じやつ干かん速いようだ。このままでは、アル・アジフの危き惧ぐする通り、神像もろとも捕とらえられ、呑み込まれてしまう。

「覇道―」

　覇道に抱えられたアズラッドが言った。

「俺を放せ……自分で飛ぶ」

『無理だな』

　覇道はにべもなく答える。

『今の君には、術衣マギウス・スタイルをまとうだけの集中力もあるまい』

「それでも、重量は減る。おまえとアル・アジフは助かるかもしれん」

「──馬ば鹿かを言うな、アズラッド！」

『やれやれ……アズラッド、君には欠けているものがふたつある』

　覇道は言った。

『〝計画性〟と〝粘ねばり強さ〟。重要なのは精神の持久力だ。私に言わせれば、すぐにあきらめる奴やつというのは、要するにただのものぐさだな』

「……それが、どうした」

『つまり、旅行に出る前に、帰りの便を手配しておいたほうがいい、ということさ──そら、お迎むかえだ』

　覇道が促うながした方角から、二隻せきの飛行船が急速に近づいてきた。

「──ミスター覇道！　アズラッドさん！」

　ゴンドラの窓から鉤かぎつきのロープを垂らしながら、エイダが手を振ふった。

　アズラッドらと共に無事ゴンドラに収容されると、覇道は全速上昇を指示した。

　急激に遠ざかる〝マナウス神像〟の気配に、邪神は触手をいっぱいに伸ばしたが、もはやそれは〝手〟の届かぬ領域に上昇していた。

　しかし、

　ゴゴゴ──！

　地鳴りと共に、密林が小山のように盛り上がった。樹木や岩石を

なぎ倒たおし、巻き込みながら現れたそれは、赤黒い粘ねん液えきと触手の巨大な〝渦うず〟だった。

「おお……っ⁉」

　それを見た瞬しゆん間かん、覇道鋼造さえもが思わず声を上げた。

　その大きさは直径は百メートル、二百メートル──いや、そんなものではすまない。それは生命の常識的規模をはるかに超こえた、地理的、気象的現象なのだった。

　GrrAooooOooorroohh□□!!

　咆吼と共に、〝渦〟はその体を構成する粘液の大部分を鞭むちのような一本の触手と化し、毒どく蛇じやが獲え物ものを襲おそうように上空に打ち出した。

「面おも舵かじ！」

　覇道の指示で飛行船の針路が逸それ、危あやういところで船体をかすめた赤黒い大だい蛇じやは、地表に落下していった。

　飛行船はさらに高度を上げた。同様の攻こう撃げきがあったとしても、もはや届きはしないだろう。羽根でも生やして飛んでこなければ──

　すると、地表でとぐろを巻き、再び蠢く触手の塊かたまりとなったズアウィアの体から、二枚の巨きよ大だいな皮ひ翼よくが生えた。

　赤黒い体液を垂らし──その一いつ滴てき一いつ滴てきが大樹をなぎ倒している──地じ響ひびきを立てながら、邪じや神しんは飛び立った。巨大な皮翼を力強く打ち振り、船団にぐんぐん近づいてくる。その触手の数本が長く伸び、飛行船の一隻を捕とらえると、強ごう引いんに手た繰ぐり寄せた。全長二百メートルの超ちよう飛行船が、この空飛ぶ怪かい物ぶつに対しては、ひと呑のみにできる餌えさでしかない。

　密生する触手の中に、巨大な口が開いた。

　その時──飛行船が爆ばく発はつした。この一隻も、囮おとりの

〝飛行船爆ばく弾だん〟だったのだ。

　巨大爆弾の直撃を受け、邪神は失速した。巨大な皮翼のひとつは半ばもげ、大きな肉にく塊かいがぼたぼたと落下していく、が──

「お……落ちません！」

　エイダが叫さけんだ。

　邪神は落下中に翼を再生し、上じよう昇しようしてきた。再び距きよ離りが詰つまってくる。

　しかし、

「……いや、大だい丈じよう夫ぶだ」

　双そう眼がん鏡きようを覗のぞきながら、覇道は言った。

「翼の動きが鈍にぶっている……奴は疲ひ労ろうしているぞ」

　はたして、再び追いつくかと思われたのはほんの一いつ瞬しゆんだった。邪神は加速を急速に鈍らせ、やがて眼下の密林へと落下していった。

+

　──千年を悠ゆうに超こえる時の中で、魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】を所有した魔ま術じゆつ師しの数は、十や二十ではない。

　各おのの々おのの時代において〝死霊マスター・秘法オブ・ネクの主ロノミコン〟を名乗ったのは、さまざまな立場の人間だった。男もいた。女もいた。若者も老人もいた。そして、そのひとりひとりに、その者自身の動機があった。ある者は爛ただれた欲望のため、ある者は鋼鉄の信念のため、そしてある者は灼しやく熱ねつの復ふく讐しゆうのために禁断の書を手に取り、魔道に踏ふみ込んだのだ。

　魔術師の目的はそれぞれに異なっていたが、魔導書の目的は常に

ひとつだった。

　──己おのれと契けい約やくした魔術師の魂の燃焼を以もつて、人類に仇あだなす魔を焼しよう却きやくする。

　魔導書【アル・アジフ】はそのために記され、着実にその使命を果たしてきた。

　わずか数ヶ月で己おのが魂を燃焼し尽つくす者、何十年もの彷ほう徨こうの末、磨すり切れるように死んでいく者、あるいは爆発的な力の放出に耐たえかねて即そく死しする者──術者をひとり使い切るたびに、アル・アジフはその存在を、数行の圧縮記述として己が体内に焼き付けてきた。

　その数行が、重かった。

　呪じゆ文もんや予言、邪神群の情報、鬼械神デウス・マキナの構成術式に至るまで、ありとあらゆる禁断の知識をその身に蓄たくわえた最強の魔導書【アル・アジフ】は、しかし、己が身に埃ほこりのように蓄ちく積せきされる、いくつもの小さな人生の重さに苦しんでいた。巨大な人外の力と、ひとりの少女の心という、彼女の存在自体が孕はらむ矛む盾じゆんから発する、根源的な苦痛だった。

　新たな一節を己が身に刻印するたび、彼女自身の魂は重く呪じゆ縛ばくされ、身動きが取れなくなり──いつしか彼女は、生命を持たぬ只ただの書物のように成り果てていた。

　それゆえに、さる収集家の書庫の片かた隅すみで埃を被かぶっていた彼女を何者かが手に取った時も、魔導書【アル・アジフ】はなにも感じず、考えず、なんの反応も示さなかった。

　錠じようの下りた封ふう帯たいが解錠の口こう訣けつで難なく解かれ、そのページが数十年ぶりに開かれた時も、彼女はそれを浅い夢のようにしか理解していなかった。

　しなやかな、それでいて力強い若い男の指が、彼女のページの上を幾いく重えにもなぞり、その体内に隠かくされた秘密を余さず暴あばき、読み取っていく。

　いつしか彼女は、男の傍かたわらに立って、そのさまを眺ながめていた。

―いつか遠い昔にも、このようなことがあったような気がする。

その時の男は、若者ではなく、老人だった。

その老人は、書を読み込むのではなく、書き綴つづっていた。

老人の名は、狂きよう詩人アブドゥル・アルハザード。彼女の〝父〟だった。

目の前にいる青年は、決してアルハザードに似ているわけではない。その容姿も仕し種ぐさも、まったく別物だ。しかし、それでも目に見えないなにか―身にまとう狂きよう気きの残のこり香がのようなものが、どこか似ていた。

数時間か、数日か……いや、数週間にも及およんでいたかもしれない。すべてのページに目を通した青年が、静かに彼女の名を呼んだ。

「〝アル・アジフ〟」

バララ―

魔導書【アル・アジフ】のページがほどけ、渦うずを巻き、傍らで見ている彼女になった。

―汝なれは何者か。

その問いを、アル・アジフは口にしなかった。

言うまでもなく、互たがいが理解していた。魔導書を紐ひも解とき、その内容を理解し、書に宿る精せい霊れいを喚よび出した者―彼こそは運命に定められし、新たな〝マスター・オブ・ネクロノミコン〟だった。

アル・アジフの顔を、アズラッドは見下ろした。

「―我わが名はアズラッド」

暗い目の底に、静かな狂気が漂ただよっていた。

「魔導書【アル・アジフ】……我は汝なんじと契約する」

アズラッドはアル・アジフの顔を上向かせ、その唇くちびるに口

づけた。

　目を閉じてその行こう為いを受け容いれながら、アル・アジフは思った。

　──このような目をした人間は、早く死ぬ。

　なぜなら、アズラッドのそれは、一見静かに、しかし狂くるおしいほどに、死に場所を求める者の目だったからだ。

+

　出発より、わずか四日と半日。電でん撃げき的な速度と手て際ぎわで〝マナウス神像〟を取り返した一行は、現在、アーカムへの帰路の最終過程にあった。

　貿易風と偏へん西せい風ふうの影えい響きようのため、アーカムへの帰路は北米東海岸をなぞるように弧こを描えがくコースを取る。一同の乗った飛行船はロングアイランド島をかすめ、ナラガンセット湾わんを右手に望みながら、ロードアイランド州に上陸した。

　双そう眼がん鏡きようを目に当てる覇道に、やがて、プロヴィデンスの街並みが見えてきた。

「よし──あと三十分で到とう着ちやくだ。アーカムに連れん絡らくしてくれ」

「かしこまりました、旦だん那な様」

　無線電信装置に向かったクロフォードが、アーカムに待機しているアーミティッジへ、モールス符ふ号ごうによる通信を送った。

　ほどなく、アーミティッジから〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟の起動準備をして待つ旨むねの返信が届いた。

　未だ活性状態にある〝マナウス神像〟を〝守護神機関〟によって速すみやかに鎮ちん静せい化かさせれば、力の源を遮しや断だんさ

れた邪じや神しんズアウィアはこの世界における存在を維い持じできず、消しよう滅めつする。

「……どうにか逃にげ切ったな」

　覇道の肩かたから、わずかに力が抜ぬけた。

　危あやうい勝利ではあったが、これでまた、人類はしばらくの間、生き延びることができる。三隻せきの飛行船を消費し、数名の負傷者を出したものの、この上ない首しゆ尾びと言えた。

　その最大の功労者たるアズラッドは、床ゆかに敷しかれた毛布の上に横たわっていた。

「あの、そろそろ着陸の準備を──」

　そう言って、エイダがアズラッドの顔を覗のぞき込んだ──しかし、返事はない。

「きゃあ、死んじゃった!?」

「よく見よ、うつけ」

　枕まくら元もとのアル・アジフが振ふり返った。

「峠とうげは越こえたと覇道も言っておったろうが。今は寝ねておるだけだ」

「ああ、びっくりした」

　エイダはアル・アジフの横にぺたりと座った。

「だって、あの年中難しい顔をしてた方が、あんまり穏おだやかなお顔をなさってるんですもの」

「ああ……」

　生返事を返しながら、アル・アジフはアズラッドの顔に目を戻もどした。

　満身創そう痍いのアズラッドは、しかし、エイダの言う通り、今は安らかに寝ね息いきを立てている。

―アズラッド……汝の戦いは、終わったのだな。

アル・アジフは思った。

―それでよい。

闇やみの世界に深く踏ふみ込みながら、自らの戦いを戦い抜き、陽ひの光の下もとに帰き還かんする……たまさかには、そういう者がいてもよい。

「……礼を言う」

　アル・アジフが、ぽつりと言った。

「はい？」

　エイダは思わず後ろを振り返り、それから自分の鼻先を指した。

「〝礼〟って……私に？」

「他ほかに誰だれがおる」

「え、だって私、別になにもしてませんし――」

「いや……アズラッドが燃え尽きずに済んだのは、あるいは汝なれのためであるやもしれぬ」

　と、アル・アジフは言った。

「闇の淵ふちを覗いてなお、光射す世界に立って物を言う――闇に生まれた妾わらわにはできぬことだ。アズラッドの魂たましいをこの世に引き止めたのは、汝や覇道鋼造のような者らかもしれぬ」

「はあ」

「アーカムに着き次し第だい、アズラッドを――我が主あるじを、おまえたちの世界に返そう。妾は妾の、汝らは汝らの、それぞれの世界に生きるべきなのだ」

「あら、その必要はありませんわ、アル・アジフ」

「なに……？」

「あなたたちが闇の世界に生きていると言うなら、私はそこを照らしてみせましょう。魔ま導どう書しよにしても、鬼械神デウス・マキナにしても、ミスター覇道はすでにその技術的再現を成し遂とげつつあります。あなたたちのいるそこも、じきに理性の輝かがやきを以もつて照らされる〝光の世界〟に変わるのですわ」

　勝ち誇ほこったように言うエイダに、アル・アジフは毒気を抜かれた顔で答える。

「なにを、馬ば鹿かな……」

「いや……案外と、そういうことになるかもしれん」

　そう言いながら、アズラッドが体を起こした。

「覇道――俺の用事は済んだ」

「手て際ぎわは今ひとつだったがね」

　窓辺に座っていた覇道が答えた。

　アズラッドは覇道の軽口を無視して言葉を続ける。

「体が空いてみると……おまえの出し物を、もう少し見てみたくなった」

「そいつは芸人冥みよう利りに尽きるな」

　覇道がにやりと笑い、

「ほぉら」

　と、エイダが言った。

　顔をしかめるアル・アジフに、アズラッドが言う。

「アル・アジフ。しばらくアーカムに滞たい在ざいしよう」

「……了りよう解かいした、我わが主」

　アル・アジフはふんと鼻を鳴らし、背を丸めて自分の膝ひざの上に頬ほおを埋うずめ、それから――誰にも気づかれぬように、ほんのわずかに微笑ほほえんだ。

　そこに、

「――はい、はい、はい」

　注目を促うながすように手を叩たたきつつ、ゴンドラの奥から、ひとりの女が現れた。

　使用人風のいでたちに眼鏡めがねを掛かけた、黒い肌はだをした女だ。

「これにて大団円――と言いたいところですけど、油断は禁物ですよ、みなさん」

「――汝は!?」

　アル・アジフが魔ま力りよくを込めた掌てのひらを構え、

「……ニアーラ!?」

「待て、エイダ！」

　女に駆かけ寄るエイダを、覇道が止めた。

「なにをしに現れた、ナイアルラトホテップ」

　その名を呼ばれた女の体が膨ぼう張ちようし、異形の怪かい物ぶつになった──が、次の瞬しゆん間かんには、まるで活動写真を逆再生したように元の姿に戻る。

　女──ナイアルラトホテップは、口の端はしを吊つり上げて笑った。

「まあ、そうつれなくなさることはないじゃあございませんか。私はただ、今世紀最大最後の決戦を見物に来ただけなんですから」

「決戦だと……？」

「ほら、うわさをすればなんとやら。挑ちよう戦せん者しやの登場でございますよ」

　ナイアルラトホテップは、ゴンドラの窓の外に目をやった。

　右手の眼下に見える広大なナラガンセット湾わんに、何なん隻せきもの貨物船が往来している。

　と──水中から巨きよ大だいな鞭むちのような触しよく手しゆが躍おどり上がり、一隻の貨物船の甲かん板ばんに叩きつけられた。その一いち撃げきで、船は真っ二つになって沈しずむ。次いで、その前後でも何本もの触手が同様に飛び出し、手近な船を沈めていく。

「なに……！」

　覇道は絶句した。

　触手群は水面から飛び出し、また引っ込みながら、蒸気機関車のような速度で海面を渡わたってくる──この飛行船を、〝マナウス神像〟を目指しているのだ。

　やがて、水深が足りなくなったのか、それの全身が浮うかび上

がってきた。触手と粘ねん液えきからなる不定形の肉体を細長く引き伸のばしているが、それでもなお、その太さは数百メートルに及おおよぶ。

「あれは……あの邪じゃ神しんなのか……!?」

アズラッドもまた、言葉を失った。

南米の密林に置き去りにした邪神ズアウィアには、飛行船に追いつくだけの航行能力はなかった。しかし、それは細長く引き伸ばした胴どう体たいを大おお海うみ蛇へびのようにうねらせ、スクリューのように回転させながら、空飛ぶ獲え物ものを追い掛けてきたのだ。

河口に頭を突つっ込むようにして、邪神はプロヴィデンス川を遡さかのぼり始めた。赤黒い触手が大河の流れを塞せき止め、押し戻もどしていくさまは、アマゾン川の潮津波ポロロツカを思わせた。

そして今──邪神は再び上陸した。

海中の養分を取り込んだその体は、南米で見た時の何十倍にも膨ふくれ上がっている。赤黒いタールの塊かたまりが、アメーバのようにずるりと川岸に乗り上げた。

あまりの巨大さのために緩かん慢まんに見えるが、実際には津波のような勢いと質量をもったその存在が、プロヴィデンスの港と都市にぶちまけられた。建物を、樹き々ぎを、人を乗り物を、蹂じゅう躙りんし、巻き込み、呑のみ下しながら、邪神は都市の上にとぐろを巻き、地上に荒あれ狂くるう大渦巻きメールシュトロームを作り上げた。

「──上じよう昇しよう！」

号令とほぼ同時に、渦うずの中心から、ひときわ太く長い触手が伸び上がり、空を切った。覇道の判断が数秒遅おくれていたら、飛行船は捕とらえられていただろう。

塔とうのように垂直に伸び上がった触手の先せん端たんがぼこりと膨れ、巨大な口を開いた。

GuirrAooooEEEoorroohh□□!!

何列にも生えた鋭するどい牙きばの間から長い舌を伸ばし、その他の小触手群をざわめかせながら、邪神ズアウィアは壮そう絶ぜつな雄お叫たけびを轟とどろかせた。

一八九×年十二月二十二日、午後一時四十二分。

それは、人の時代の終わり、怪かい異いの世紀の始まりを手た繰ぐり寄せる、畏おそるべき呼び声だった。

+

その日。

悪夢が世界を覆おおった。

それは常人の感覚には単なる気き鬱うつや重苦しい空気としか感じられないものだったが、霊れい感かんに優すぐれた者―霊れい媒ばい、詩人、画家や彫ちよう刻こく家など―は昏くらい負の波動を受けて異常な言動を示し、甚はなはだしい者は発はつ狂きようした。

その日。

北米全土で数万人の妊にん婦ぷが一いつ斉せいに流産し、続く半年の間にほぼ同数の畸き形けい児じが生まれた。彼ら〝世紀末の子ら〟の多くは成人するまで生き延びることはなかったが、残る少数の者は長ずるに及び人外の異能を発揮することになった。

また、この現象は家か畜ちくや野生動物においても同様で、同年の牧ぼく畜ちく・漁業は壊かい滅めつ的な打だ撃げきを受けると共に、人々はその後何十年にもわたって怪かい生物の跳ちよう梁りように悩なやまされることになった。

その日。

　アメリカ合衆国ニューイングランド地方全域に奇き怪かいな咆ほう吼こうが響ひびきわたり、それを耳にした数十万人が心身に変調をきたした。ある者は未知の言語で滔とう々とうと語り出し、またある者は異形の生命体と化して姿を消した。ボストン、キングスポート、ハートフォード、スプリングフィールドなどの都市で未み曽ぞ有うの大混乱が発生した。

　例外はアーカムシティとプロヴィデンスのみだった。アーカムシティには通常以上の混乱はほとんどなく、また、プロヴィデンスにはまったくなかった。

　なぜなら、その日。

　ロードアイランド州最大の都市、プロヴィデンス──隣りん州しゆうのキングスポートやボストンと同様、アーカムシティと共に発展し、むしろ州境をまたいだ巨大複合都市の一部とも言うべきものとなっていたこの港こう湾わん都市は、赤黒い生きた津波に呑まれ、跡あと形かたもなく壊滅したのだった。

　そして、その日──

「よっこらせ、と」

　咆吼する邪神を見下ろしながら、ナイアルラトホテップはスカートをつまみ、ゴンドラの窓まど枠わくに片足を掛かけた。

「それじゃ、私ゃその辺で見てますから、みなさん、どうぞがんばってくださいな」

「……待って、ニアーラ！」

　そのまま空中に踏ふみ出していこうとするニアーラを呼び止め、エイダが一歩進み出た。

「教えて──あなたは何者？　……ミスター覇道が言うような、悪意を持った怪かい物ぶつなの？」

「さあ、どうなんでしょうねえ」

　ナイアルラトホテップは答えた。いつもと変わらない、とぼけた口調だった。

「そういうのは人それぞれの、物の見方次し第だいってことじゃあないですかねえ」

「それは……自分で判断しろっていうことね」

「まあ、そういうことになりますかね」

　エイダの顔に現れていた漠ばくとした不安が、やがて、決然とした表情に取って代わった。

「……そうね、ニアーラ。あなたの助言はいつも的確だわ」

「戯たわ言ごとに耳を貸すな、エイダ」

　アル・アジフが、二人の会話に割って入り、ナイアルラトホテップに掌を突きつけた。

「こやつは邪じや神しんの眷けん族ぞくの中でも最悪の一柱だ──とくと去れ、〝這はい寄る混こん沌とん〟ナイアルラトホテップ！」

「おやおや、ずいぶんと嫌きらわれてしまいましたねえ」

　ナイアルラトホテップの全身が、ぞわりと変形した。

　翼つばさ、鉤かぎ爪つめ、燃え上がる三つの目──非人間的な外見の中に、しかし、それと分かる嘲ちよう笑しよう的な表情を浮うかべながら、ナイアルラトホテップは言った。

「それでも私ゃ、あなた方のことが大好きですよ。……私なりにね」

　ナイアルラトホテップは膨ふくれ上がった体を窓からずるりと抜ぬき出し、空中に身を投げた。

「それじゃあ、お嬢じよう様さまもみなさんも、どうぞ死ぬまでお元気で──あはははははははは！」

　あたり一面に忌いまわしい笑い声を響かせながら、ナイアルラトホテップは黒い翼を力強く打ち振ふり、あっという間に雲間に消え

た。

「覇道……どうする」

　アズラッドが言った。

「このままアーカムに逃にげ込むか」

　眼下には赤黒い大河のような邪神ズアウィアの体が、見み渡わたす限り広がっている。所々に尖せん塔とう状の建築物が見えるが、それも急速になぎ倒たおされ、濁だく流りゆうのような粘ねん体たいに呑のみ込まれていく。

「……無理だ」

　と、覇道は答えた。

　見たところ、地表を水銀のように疾はしるズアウィアの速度は、空中を航行する飛行船をも超こえるだろう。通常の魔ま物ものの類たぐいならばアーカムの結界に逃げ込んでしまえば退しりぞけられるが、この巨きよ大だいな邪神は、結界を発生させる都市そのものを破は壊かいしながら追ってくる。このまま邪神を引き連れてアーカムに入れば、眼下のプロヴィデンス同様、アーカムは完かん膚ぷなきまでに蹂じゆう躙りんされてしまう。

　かと言って、この場で〝マナウス神像〟を奪うばわれてしまえば、それこそが最悪。神像から発する無限の力を吸収した邪神は、これまで以上の速度で膨ぼう張ちようし、瞬またたく間に地球全土を覆おおってしまうだろう。

「では、どうする。アイオーンでもあれを斃たおすことは──」

「無茶をするな──今の体でアイオーンを喚よべば、汝なれは確実に死ぬぞ！」

「犬死にをするつもりはない」

　アル・アジフの肩に手を置きながら、アズラッドは静かに言った。

「答えろ、覇道。俺の命はどう使えばいい」

+

「―いったい何が起こっている⁉」

　アーカムの覇道邸てい地下では、冷静沈ちん着ちやくを以もつて知られるアーミティッジが声を荒あらげていた。

　数分前、音ならぬ大音響―邪神の咆吼と共に、瘴しよう気きの如ごとき濃のう厚こうな魔ま力りよくの波が、大だい地じ震しんを伴ともなってアーカムを襲おそった。魔ま導どう研究所ではいくつもの封ふう印いん装置が内側から弾はじけ飛び、解放された呪じゆ物ぶつの影えい響きよう力りよくに呑まれて、数名の職員が狂きよう死しした。

　巨大結界に守られたアーカムでさえこのありさまだ。呪じゆ術じゆつ的に吹きさらしの都市である、近きん隣りんのボストンやプロヴィデンスはいったいどうなっていることか―

　アーミティッジは主要都市の支部への現状確かく認にんを指示し、次いで、地下工場に駆かけ込んだ。ここだけは、この地に守られた希望の胚だけは、なにがあろうとも守り通さねばならない。

「デモンベインは無事か⁉」

　その目の前で、クレーンの鎖くさりが切れ落下したデモンベインが、地じ響ひびきを立てて両りよう膝ひざを突いた。骨格フレームに仮止めされていた何十という部品が、その衝しよう撃げきで周囲に打ち撒まかれた。アーミティッジの数歩先にも装そう甲こうの一部が落下し、床ゆかに巨大なひびを入れた。ちぎれた鎖が鞭むちのように暴れながら鼻先をかすめ、埃ほこりを舞まい上げながら床を叩たたいた。

　続いて、ひとりの所員が場内に飛び込んできた。手には速記文字のメモを握にぎっている。

「室長、覇道総そう帥すいからの電信です！」

「内容は⁉」

「『デモンベイン　シキュウ　テンソウ　セヨ　ザヒョウ　ハ―』」

「転送―？」

　アーミティッジはデモンベインを見上げた。両膝に続いて巨きよ塔とうの如き上体がゆっくりとくずおれ、場内に響き渡わたる轟ごう音おんと共に掌てのひらを地に突つく。あたかも、そのままくず鉄の山になってしまうところを辛かろうじて持ちこたえているかのようだ。

「『不可能』と返信しろ！」

　アーミティッジが言った、その時。

　ゴゥ―

　鋼はがねの巨きよ体たいが低い唸うなりを上げ、そして、全身を軋きしませて動きだした。

「馬ば鹿かな……動力は入っていないはずだ！」

　然しかり。鋼の身体からだは骸むくろ同然に冷え切り、一ひと滴しずくの生命、一いつ片ぺんの活力すら帯びてはいない。

　……いや、そうではない。デモンベインの筋肉の役割をする魔動機、強大な呪じゆ力りよくを機械的な駆く動どう力りよくに変える魔ま術じゆつ装置が、何者かの微び弱じやくな意志を受けて、わずかな出力を発していた。

　その意志の源は、頭部に内蔵された〝解かい析せき機関〟。彼自身の魂たましいを宿す、歯車の脳のう髄ずいだ。デモンベインは思考する機械、意志を持つ刃は金がねであり、その意志こそが力そのものなのだった。

　決然と上向けられた機神の頭部、その内部で解析機関が歯車の音を立てて自らの存在を定義し、出力カードに打孔パンチした。

　我は　無む垢くなる怒いかり

我は　無垢なる憎ぞう悪お

我は　無垢なる剣つるぎ

我は

□

□

□

魔を滅ぼすものＤＥＭＯＮＢＡＮＥなり

ギ、ギ、ギ──

鉄橋が軋むような音を立てながら、デモンベインはよろめき、立ち上がる。未いまだ生まれざる鋼の肉体が、決戦の地に向けて、自ら歩みだそうとしていた。

その光景を、アーミティッジは呆ぼう然ぜんと見上げていた。

──あり得ないことだ。

だが、あり得ないゆえにこそ、だ。

理り不ふ尽じんに対たい抗こうするもうひとつの理不尽。魔を砕くだく魔。これこそが、デモンベインなのだ。

「室長──？」

「『五分』だ」

アーミティッジは片手をいっぱいに広げて言った。

「『五分待て』と伝えろ」

次いで、壁かべ際ぎわのマイクに駆け寄ったアーミティッジはスピーカーを通して場内に号令した。

『これより、デモンベインの転送過程を開始する！』

　──切れた鎖がただちに交こう換かんされ、デモンベインの骨格フレームに再びフックが掛かけられた。

　鋼の巨体は胎たい児じのような姿勢を取りながら吊つり上げられ、工場の一角に引き込まれた。その眼下にあるものは、魔ま法ほう陣じんが描えがかれた巨きよ大だいな岩。デモンベイン専用の転送装置〝虚きよ数すう展開転送機カタパルト〟──物理的な実体を持つ鬼械神デウス・マキナであるデモンベインを、召しよう喚かん可能な形けい而じ上じよう的状態に変へん換かんする魔術装置──の中ちゆう枢すう部ぶだ。

　巨きよ岩がんの上、デモンベインの周囲に吊られたゴンドラ状の足場の上で、工員が目まぐるしく立ち働いた。破損部の応急補修と並行して、補助動力である内蔵蒸気機関に火が入り、機体制せい御ぎよの符ふ号ごうを打孔パンチされたカードが頭部の解析機関に何十枚と読み込まれていく。

〝鋼の骸〟に、生命の火が点ともり始めた。

　覇道鋼造が不在である今、デモンベインの魔ま力りよく中枢〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟を始動することは不可能だが、せめて、鋼の肉体を仮死レベルにまで賦ふ活かつした状態で転送するのだ。

　そして──

『総員退たい避ひ！』

　補給用のチューブが次々と引き抜ぬかれ、工員を乗せたゴンドラがデモンベインの機体から遠ざかっていった。

『転送装置カタパルト起動準備よし！』

『目標・プロヴィデンス上空──座標確かく認にん！』

『電信線接続！』

『召喚呪じゆ文もん、受信します！』

　地上から引き込まれた電信線を通じ、スピーカーに流された、覇道鋼造の無線電信による召喚呪文が場内に響き渡る。

（憎悪の空より来たりて　正しき怒いかりを胸に　我は魔まを断つ剣けんを執とる）

□□　　-□-□　□-　--　□　　□□-□　□-□
---　--

-　□□□□　□　　□□□　-□-　-□--　　--
-　□□-□　　□-□

□-　-□　-□-□　---　□-□　--□□--
□□　　□□□□　□-

□□□-　□　　-□-　□　□--□　-　　-
□□□□　□　　□-

-□　--□　□　□-□　　---　□□-□　　□--
-　□□-　□□□

-　□□　-□-□　□　　□□　-□　　--　-□-
-　　□□□□　□

□-　□-□　-　--□□--　　-□　---　□-
-　--□□--

□□　　-　□-　-□-　□　　-　□□□□　□
□□□　□--

---　□-□　-□□　　□□-□　---　□-□
-□-　□□　□-□□

□-□□　□□　-□　--□　　-　□□□□　□　　□
□□□-　□□　□-□□

---　-□　□　□□□　□-□-□-

（汝なんじ、無む垢くなる刃やいば―デモンベイン！）

- □ - -　- - -　□□ -　- - □□ - -　□□　- □ - □　- - -

- □ - □　□　- □　-　- □□□　□ - □□　□ - - □□　□　- □□□□ -

- □□□□ -　- □□　□　- -　- - -　- □　- □□□　□ -　- □　□

□ - □ - □ -

ゴォッ―‼

天界の扉とびらのように、あるいは地じ獄ごくの炉ろのように―巨岩の表面に浮うかぶ魔ま法ほう陣じんがまばゆい光を放ち、直上に向かって超ちよう次元的な門を開放した。

門の彼方かなた、岩の内部に、岩そのものの容積よりもはるかに広大な、光の洪こう水ずいの渦うず巻まく空間ならぬ空間が垣かい間ま見みえた。

『―デモンベイン、転送‼』

アーミティッジの号令と共に、機体を吊り支えていたフックの固定ボルトが引き抜かれた。

今や、鋼はがねの巨きよ体たいを縛しばるものは何もない。

天空の神が地上に堕おとされるように。

あるいは、赤子が母ぼ胎たいを離はなれて地上に生まれ出るように―

丸めた体を前のめりに回転させながら、未完の機神は門の彼方の非空間へと落下していった。

+

OrrAooooWwoorrooh□□!!

雄お叫たけびを上げながら、邪じや神しんが再び触しよく手しゆを振ふり上げた。限界高度ぎりぎりにまで上じよう昇しようしている飛行船には届くべくもないが、触手から飛んだ粘ねん液えきの滴しずくが空中で翼よく竜りゆうの形を取り、翼つばさを打ち振ってさらに上昇する。

同様に振り上げられた無数の触手から、一度に数頭ずつの翼竜が誕生し、数十匹ぴき、いや、数百匹の大群となって飛行船を襲おそった。

対して──

「アイオーン！」

ゴゥ──

空中に立ちはだかったアイオーンが二丁拳けん銃じゆうを構え、

ドドドドドドドドッ──

連射される拳けん銃じゆう弾だんが、一秒につき十二頭の翼竜を弾はじける粘液に変えた。

群れの規模は瞬またたく間に半減したが、生き残りのうちの数体が密集し、空中で絡からまり合い、一体化してひとつの巨体を形作った。アイオーンの数倍の翼長を誇ほこるそれは、神話に登場する悪あく竜りゆうそのものだった。

巨きよ竜りゆうの表面に生じた鎧よろいのような鱗うろこが、アイオーンの銃じゆう弾だんを弾き飛ばす。アズラッド＝アイオーンは右手の拳銃を捨て、空中から〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟を抜き出した。

右手に魔ま刃じん、左手に魔ま銃じゆう。ふたつの武器を構えた腕うでを交差し、腰こしを低くした構えを取る。

（アズラッド、逸はやるな）

「分かっている」

　無む駄だに死ぬつもりはなかった。

　──的確に力を振るい、自分が守る世界に生き延びる。

　そのように考えてみると、半ば自棄やけになって力を振るっていた頃ころより、はるかに大きな力が我わが身に宿っているように感じる。いや──力の大きさではなく、質が違ちがうのだ。

　かつてないほどに統制され充じゆう実じつした力が、鋼の四し肢しを駆かけ巡めぐり、魔ま竜りゆうの群れを打ち砕くだく。魔刃はより鋭するどく、魔ま弾だんはより速く──目的を持って振るわれる力とは、これほどまでに強力なものか。

　胸の奥で活性化した〝アルハザードのランプ〟が、鋼の全身にさらなる活力を与あたえる。この瞬しゆん間かん、アイオーンの機体は、半封ふう印いん状態にある〝マナウス神像〟よりはるかに強力な魔ま力りよく炉ろと化していた。

　無限の飢き餓がに支配された邪神の意識が、アイオーンに引きつけられた。巨竜を中心とした翼竜群が上空から圧のし掛かかり、下方からは何十本という触手が一いつ斉せいに伸のび上がり、双そう方ほうからアイオーンを呑のみ込もうとする。

　アイオーンは頭上から迫せまる巨竜の眉み間けんに偃月刀を叩たたき込んだが、急速に溶とけ崩くずれ、粘ねん塊かいと化した巨体に半ば呑まれて失速、数百メートルを落下し、触手に巻き取られながら地上の赤黒い海に呑み込まれた。

「──アズラッドさん！」

　ゴンドラから身を乗り出し、エイダが叫さけんだ。

「こ、こうなったら私だけでも加勢に……！」

　エイダは出口に向かってガチャガチャと歩を進める。すでに、覇道の指示で電動服モーター・スーツを着込んでいた。

「待て、エイダ！」

　先ほどからクロフォードと共に電信装置に向かっていた覇道が、

振り返った。

「アイオーンはまだもつ！　アズラッドを信じろ！」

「で、でも――」

　その時。

　エイダが見下ろす赤黒い渦うずの一点に、金色の光が灯ともった。

「オオォッ――!!」

　雄叫びと共に、機神の全身が太陽の如ごとく輝かがやいた。その光と熱を避さけるように邪神の粘ねん体たいが大きく退ひき、小恒こう星せいと化したアイオーンを中心に、円形の空き地を作った。

　闘とう技ぎ場じようを思わせるその空間に、前後左右から触手の先せん端たんが打ち込まれる。

　アイオーンは偃月刀を足元に突つき立てた。すると、魔刃は地面を削けずりながら分ぶん裂れつし、機体の周囲を円形に取り囲んだ。魔刃による防ぼう御ぎよ陣じんだ。

　ドン――！

　鋼の足が地面を踏ふみしめると、十本の魔刃は自らの意志を持つかのように地面から跳はね上がり、打ち掛かる触手と渡わたり合い始めた。十本、百本、千本の生きた鞭むちがその先端を斬きり飛ばされ、地面に転がり、どろりと溶けていく。

　巨きよ大だいな混こん沌とんの渦の中にあって、それに呑み込まれまいと刃やいばを振るい続ける――一種絶望的とも見えるその光景は、アズラッドが、覇道が、人類そのものが背負った宿命を思わせる。

　だが、それでもなお――

　燃えている。

　燃えている。

アズラッドの精神が、魂たましいが、全身の神経が燃焼している。

「―五分もたせてくれ」

つい先ほど―出しゆつ撃げきの直前、覇道鋼造はアズラッドに言った。

「五分だけでいい。あとはこちらでなんとかする」

永えい劫ごうにも等しいその五分間を、アズラッドは戦い抜ぬいていく。

―まだか。

全身を内側から燃やし、その熱を外部に噴ふき出しながら、アズラッドは思う。

―まだか、覇道……！

おまえの言う「最後の希望」―デモンベインはまだか!?

やがて、漫まん然ぜんとした攻こう撃げきを効果なしと判断したか―それは理性によるものではないだろうが―邪じや神しんの動きが変わった。赤黒い混沌の渦が、自らの原子構造を超ちよう次元的に畳たたみ込みつつ、一点に集中し始めたのだ。

都市をも呑み込む莫ばく大だいな質量が、高い塔とうほどの―鬼械神デウス・マキナほどのサイズに凝ぎよう縮しゆくした。気体が凝ぎよう結けつし液体になるように、ゆるい粘ねん液えきからなるその体が、鋼鉄をはるかに超こえる密度の超固体と化しつつあった。

邪神のまとった新たな〝相〟を言葉で表すならば―

それは人間に似た四肢をそなえていた。

それは竜りゆうを思わせる翼つばさを持っていた。

それは〝マナウス神像〟に彫ちよう刻こくされた怪かい物ぶつに似ていた。

なにより、その巨きよ体たいは鬼械神デウス・マキナそのものに酷こく似じしていた。

〝ズアウィア神しん殿でん〟に出現した石像は邪神ズアウィアの力の一部を利用したものにすぎなかったが、今アイオーンの目の前に存在するのは、ズアウィアが鬼械神デウス・マキナを屠ほふるために選せん択たくした新たな形態、邪神そのものが〝機械の神〟と化して顕けん現げんした姿なのだった。

（これは―）

アル・アジフは初めて見るその怪物の名を知っていた。運命そのもののように、その名は彼女の体内に、生まれた時から刻印されていた。

全身に血を被かぶったかの如き、紅くれないの鬼械神デウス・マキナ。その名は―

（―〝リベル・レギス〟!?）

邪神は未いまだ飢うえていた。その飢えは邪神ズアウィアの新たな肉体に、明らかな形を取って表れていた。人に似て、また竜に似たその超鋼の肉体の胸部、鬼械神デウス・マキナの中ちゆう枢すうとなる魔力炉があるべき場所には、巨大な空くう洞どうが存在していた。

心臓を持たず、生命すらも持たない機械の邪神が、存在そのものの飢えを満たすべく、アイオーンに向かって踏み出した。

（いかん―退ひけ、アズラッド!!）

アズラッド＝アイオーンは鋼はがねの翼に魔ま力りよくを込め、上空に飛び退しさった。そして、周囲に浮ふ遊ゆうする十本の魔ま刃じんを、一度にズアウィアに叩たたきつけた。この世に存在するあらゆる物質を斬り刻む呪じゆ力りよくの刃やいばは、しかし、この世のものならぬ超金属に傷ひとつつけることなく、ガラスのように砕くだけ散った。

次いで、アズラッド＝アイオーンは二丁拳けん銃じゆうを構え、ひと息に数十発の弾だん丸がんをズアウィアに叩き込んだ。だが、ズアウィアは銃じゆう弾だんの雨を霧きりほどにも意に介かいさず、紅の翼を広げ、アイオーンを追って飛び上がる。

―速い！

ズアウィアは瞬しゆん時じにアイオーンに肉にく迫はくすると、拳銃を構えた両りよう腕うでを、鉤かぎ爪つめのひとなぎで肩かたからもぎ取った。

「……ッ‼」

アイオーンの操縦席で、アズラッドの両りよう肩かたから血の飛沫しぶきが上がった。

（アズラッド‼）

「―まだだ‼」

アイオーンの鋼の翼、その翼よく端たんが鋭するどい刃となり、邪神に叩きつけられる。しかし―

ガッ！

ズアウィアの両手がアイオーンの両りよう翼よくを捕とらえ、そして、ひと息で左右に引きちぎった。

両腕と翼を失ったアイオーンは落下し、背中から地面に叩きつけられた。その腹部を踏み抜くように、ズアウィアの巨体が着地する。

「ぐ……！」

アズラッドは血の塊かたまりを吐はいた。

鋼の巨体を見下ろすズアウィアの目が紅あかく光った。マスクを思わせる顔の、亀き裂れつのような口が大きく開いた。

RrrrrwwwWooooooowwwh□□!!

ズアウィアは天を仰あおぎ、咆ほう吼こうした。忌いまわしい歓かん喜きの叫さけびだった。

アイオーンの目を通してそのさまを見上げるアズラッドは、しかし、希望を込めて呟つぶやいた。

「来たか……！」

咆吼する邪神の頭上、上空六百メートルの位置に、竜たつ巻まきを思わせる光の渦うずが発生していた。

アイオーンの機神召しよう喚かんに似た魔力の流れ。渦の中心部では、いずこかで魔ま術じゆつ的に分解され、遍へん在ざい化かした物体が、再構成されつつある。

光の渦の中心に現れつつあるそれは、鋼の胎たい児じ。

未いまだ生まれざる鋼鉄の神。無む垢くなる刃やいば―鬼械神デウス・マキナデモンベイン。

アイオーンを凌りよう駕がする無限出力を持つ鋼の巨きよ神じんが、今まさに、地上に産み落とされようとしていた。

その頃ころ。

光の渦のさらに上空、高度千メートルに滞たい空くうしている飛行船上では、

「旦だん那な様。デモンベイン、顕現いたします」

と、双そう眼がん鏡きようを目に当てたクロフォードが言った。

「よし！」

革かわ表びよう紙しの魔ま導どう書しよ―【機械語写本】を手に、覇道が立ち上がった。

「行くぞ、お嬢じようさん！」

『はいっ！』

電動服の背中に取り付けられた取っ手に覇道がつかまると、エイダはゴンドラの出口から空中に踏ふみ出した。

『とぉ――――っ！』

―覇道は無線電信によってアーカムのアーミティッジに指示を出し、未完成のデモンベインを召喚した。そして今、エイダの電動服を降下用気球代わりにして、デモンベインに乗り込もうとしている。

デモンベインの魔力中ちゆう枢すう〝獅し子しの心臓〟に発生する無限熱量を誘ゆう導どうし、相手に叩きつける必殺滅めつ技ぎ〝レムリア・インパクト〟。それこそが邪じや神しんズアウィアを倒たおす、唯ゆいーいつの手段だった。

だが──

邪神もまた、知っていたのかもしれない。その鬼械神デウス・マキナが外なる神の天敵、〝神殺しの刃やいば〟であることを。あるいは、ズアウィアが取ったリベル・レギスの形態が、その事実を記き憶おくしていたのかもしれない。デモンベインが自らの永遠の宿敵であることを。

本能的な憎ぞう悪おを以もつて、邪神は上空をねめ上げ、飛び上がった。

そして、瞬またたく間に六百メートルを上じよう昇しようすると、光の渦に鉤爪のついた手を突つき込み、自分の体ほどもある物体を引きずり出した。巨きよ大だいな鋼はがねの骸むくろにも似た、デモンベインの機体。起動準備を終え、全身の魔動機を唸うならせながら現れたそれは、しかし次の瞬しゆん間かん──

ズアウィアの鉤爪によって、ばらばらに引き裂さかれた。

「──なっ……!?」

覇道が絶句し、

『ええ～～っ!?』

エイダが叫んだ。

「──あはははははははは！　これはこれは！」

はるか上空からそのさまを眺ながめていたナイアルラトホテップが、異形の肉体を捩よじり、痙けい攣れんさせながら哄こう笑しようした。

「希望が潰ついえ去る瞬間というのは、何度見てもたまらないものでございますねえ！」

＋

分解したデモンベインの機体が、横たわるアイオーンの周囲に落下していく。螺子ねじが、歯車が、配管チユーブが、骨格フレームが、導線が、鋼の雪崩なだれのように振ふり注ぐ。未だ激しく回転する剝むき出しの魔動機が、土ど砂しやをはね散らしながら、それぞれでたらめな方向に弾はじけ飛ぶ。

アイオーンの頭の横に、地じ響ひびきを立てて、ひときわ大きな汽罐ボイラー状の部品が落ちた。デモンベインの心臓、〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟だ。ゆるやかに虹にじ色いろの光を発していたそれは、二度、三度と地面を跳はね、そして沈ちん黙もくした。

アイオーンの足元に、ズアウィアが着地した。その飢うえた双そう眸ぼうは、機神の胸むな元もと、魔ま力りよくの流れの中ちゆう枢すうたる〝アルハザードのランプ〟に注がれている。

一方―エイダの電動服モーター・スーツは、狂きよう風ふうに煽あおられながら、ズアウィアの頭上に降下していく。

『どどど、どうしましょう、ミスター覇道!?』

「む……」

覇道は黙だまり込んだ。

―アズラッドを助け出し、脱だつ出しゆつするか。しかし、それからどうする。鬼械神デウス・マキナに等しい力を得たズアウィアにとって、覇道の飛行船を捕とらえ〝マナウス神像〟を奪うばうなど、造作もないことだろう。

今はまだ、アイオーンに気を取られているが、そのアイオーンもまた、機体の構成を維い持じできず、足の先から分解し始めている。

もはや、邪神の力を押し留とどめる手段を、覇道は持っていなかった。

―またなのか。

霸道は奥歯を噛かみ締しめた。

──また自分は、世界を失うのか。

ズアウィアが真っ赤な口を開き、天に向かって咆ほう吼こうした。禍まが々まがしい雄お叫たけびが、この世の理ことわりを塗ぬり替かえるように響ひびき渡わたる。

あと五年か、十年か、それとも数日間か。残された時間に人類ができることは、ただ恐きよう怖ふし、絶望することだけなのか。

『……ミスター？』

「……すまない」

『え？』

「すまない、お嬢さん。我々には、もう……打つ手がない」

『そんな──きゃああ！』

その言葉も半ばに、エイダは悲鳴を上げた。

ズアウィアの目が降下する電動服を捉え、巨大な手がタンポポの綿毛をつかみとろうとするように突き出された。風を巻まく音と共に、鉤かぎ爪つめをもった手が視界いっぱいに迫せまった時──

ゴォン──！

横よこ殴なぐりの衝しよう撃げきに、ズアウィアがよろめいた。

大破したアイオーンが、分解しかけた足で、邪じゃ神しんを蹴け り飛ばしたのだ。

憎悪の叫さけびを上げながら、ズアウィアは振り返った。

両りよう腕うでと翼つばさを失ったアイオーンが立ち上がる──が、その左足が崩くずれ、機神は片かた膝ひざを突いた。

しかし、なお衰おとろえぬ闘とう志しを込めて、アズラッドは叫ぶ。

「──あきらめるな、霸道鋼造！」

Rrrroooooooohh□□!!

ズアウィアは超鋼の鉤爪を振り上げ、アイオーンに叩たたきつけた。

ズゥ──！

右の肩かた口ぐちから、偃月刀を握った右腕が瞬しゆん時じに再生し、鉤爪の一いち撃げきを受け止める。

同時に、アイオーンの右みぎ膝ひざが崩ほう壊かいした。

──力が足りない。

今のアズラッドには、アイオーンの機体を維持するだけの霊れい力りよくは残っていないのだ。

だが、それでもなお──

「オォッ‼」

アズラッド＝アイオーンは砕くだける足で大地を蹴り、肩かたからズアウィアに突き当たった。

邪神は大きく姿勢を崩し、一歩、二歩と後退する。

同時にアイオーンの腰こしが崩れ、城じよう壁へきが崩壊するように、ゆっくりと上半身が雪崩なだれ落ち始めた。

「邪神ズアウィア……人類に仇あだなす忌いまわしい怪かい物ぶつ……俺のすべてを奪った運命そのもの……」

鋼の胸の奥で〝アルハザードのランプ〟が最大限に活性化し、崩れゆく機体が金色に光った。

アイオーンの操縦席で、アズラッドの全身から血が噴ふき出す。

「──だが、おまえを打うち砕く者がここにいるぞ‼」

（……ッ‼）

主あるじの意図を悟さとり、アル・アジフが叫ぶ。

（―やめろ、アズラッド！　無む謀ぼうだ‼）

「オォオオオッ‼」

　アズラッド＝アイオーンは〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟を逆手に持ち替え、地面に打ち下ろした。

　崩壊する機神の体に込められた最後の力が、偃月刀の刀身に集中した。

　その刃やいばの先にあるものは、デモンベインの〝銀鍵守護神機関〟―

「立て―デモンベイン‼」

その瞬しゆん間かん、アイオーンの機体が弾はじけ飛んだ。そして、空中に唯ゆいーいつ残った偃月刀―灼しやく熱ねつを超え金色に輝かがやく魔ま刃じんが、鋼はがねの心臓に突つき立ち、その刀身に孕はらんだ魔ま力りよくのすべてを注ぎ込んだ。

デモンベインの〝守護神機関〟―その中ちゆう枢すうたる〝獅し

子しの心臓〟が激しい唸うなりと虹にじ色いろの光を発し、周囲に打ち撒かれた残ざん骸がいがその響きに共きよう振しんした。

　発光する〝守護神機関〟は、地上四十メートルほどの高さに飛び上がり、滞たい空くうした。鋼材が寄り集まりながら浮ふ上じようし、鋼の心臓を囲む胸きよう郭かくとそれを支える脊せき髄ずいを、四し肢しと頭部の骨格を形作る。巨きよ神しんの筋肉の働きをする大小何百基もの魔ま動どう機きが、唸り、回転しながら跳はね上がり、骨格フレーム内の所定の位置に収まり、次いで蛇へびの群れのように殺さつ到とうした配管と導線につながれる。

　ズアウィアに匹ひつ敵てきする巨きよ体たいが、瞬またたく間に再生した。

　解かい剖ぼうされた死体を思わせる剝むき出しの機体には、しかし今や、明らかな生命の輝きが宿っている。激しく火花を散らしながら機体の内外を駆かけ巡めぐるそれは、魔ま術じゆつ師しアズラッドの魂たましいと生命のすべてだった。

　そして――

　地表近くまで降下していた電動服を、再生する鋼の掌がすくい上げた。

「――きゃあ!?」

　エイダは掌てのひらの上に尻しり餅もちをつき、

「アズラッド……！」

　覇道は掌からデモンベインの胸部へ跳とび移り、剝き出しの操縦席へすべり込んだ。

　骨格の狭はざ間まから、ズアウィアが体勢を立て直すさまが見えた。デモンベインをねめつけたまま、様子をうかがうように身を屈かがめる。

　今や、邪神ズアウィアははっきりと認にん識しきしている。

〝魔を滅ぼすものＤＥＭＯＮＢＡＮＥ〟□□この未完成の機神が、あらゆる魔の天敵であることを。同時に、その胸部で稼か動どうする〝無限の心臓〟が、邪神の飢き餓がを満たす最高の餌えさである

ことを。

　デモンベインもまた、知っている。

　目の前の赤と黒の鬼械神デウス・マキナが、時間と空間を超ちよう越えつした、永遠の仇きゆう敵てきであることを。

　覇道が【機械語写本】を開いた。

「第一近接昇しよう華か呪じゆ法ほう！」

　バララ―！

　革かわ表紙の中から何十枚ものパンチカードが流れ出し、デモンベインの頭部を占しめる〝解かい析せき機関〟に呑み込まれていく。

　ナアカル語符ふ号ごう確かく認にん、術式解かい凍とう―二進化され、【機械語写本】の中に織り込まれていた起動符号が、デモンベインの持つ最大の近接呪法の封ふう印いんを解除する。

　ギイイイ……ガシュン。

　エイダを載のせた左手はそのままに、デモンベインは開いた右手を腰に構えた。

　ゴゥン―ガシュッ、ガシュッ、ガシュッ……。

　重い機械音と共に、デモンベインの背中から黒こく煙えんが吐はき出され始めた。〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟を加速するための内蔵蒸気機関が出力を上げているのだ。

　ガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガ―

　強制的に回転数を上げられた〝守護神機関〟の内部で〝獅子の心臓〟が活性化し、剝き出しの機械の狭間を、輝く魔力の波が疾はしる。

　ギィイイイイ―‼

　腕うでに、脚あしに、全身に配置された魔動機が音高く回転を始める。

ジャアアアア──‼

歯車の脳のう髄ずい〝解析機関〟が、禁断の呪法を読み込み展開する。禍まが々まがしくも強力な術式は、鋼の脊髄を通って電でん撃げきの如ごとく流れ出し、唸りを上げる全身の魔動機に巻き込まれていく。

人造の巨神の頭脳たる〝解析機関〟、心臓たる〝守護神機関〟、そして全身の魔動機群がそれぞれの最大速度で稼動し、やがて、鋼の機体を物理的・魔ま術じゆつ的なエネルギーの塊かたまりと化した。

飢うえたる邪じや神しんズアウィアにとって、それは、たまらない芳ほう香こうを放つ熟した果実だ。

──チャンスは一度。こらえ切れなくなった邪神が、齧かじりついてきた時だ。

「ぐッ……！」

覇道の鼻から、ひと筋の血が垂れた。デモンベインの魔術回路の一部と化した彼の脳は、破は壊かい的なまでの魔力の流れに曝さらされている。

ギィイイイイイ────‼

魔動機の回転がさらに上がり、そのいくつかが過負荷に耐たえかねて弾け飛んだ時──

『──来ます！』

掌から乗り出しながら、エイダが叫さけんだ。

GrrrAooooooohh□□!!

邪神が雄お叫たけびを上げ、正面から突とつ進しんしてきた。

「おおッ──‼」

覇道は操縦席のレバーを押し込んだ。

ゴォン──‼

デモンベインの右掌が打ち出され、ズアウィアの頭部を押し留とどめた。

両者の力が拮きつ抗こうし、瞬間的な静止状態を作った。

覇道は右手に印を結びながら、口こう訣けつを唱えた。

光射さす世界に

汝なんじら闇あん黒こく

棲すまう場所なし

渇かわかず飢えず

無に還かえれ――！

その言こと霊だまによって、〝銀鍵守護神機関〟の中ちゆう枢すう、〝獅し子しの心臓〟の力が解放され、鋼はがねの全身に満ち満ちた。全身に据すえられた数百の魔ま動どう機きが共きよう振しんし、巨きよ大だいな唸うなりを上げる。

ヴォオオオオ――‼

それは、邪神の呼び声を打ち消し、自らをして世界の覇は者しや、絶対論理の主たるを宣言する、人造神の勝かち鬨どきだった。

バン――！

右足の魔動機が弾はじけ飛んだ。

同時に、両りよう脚あしから胴どう、そして腕に、光の龍りゆうの如き閃せん光こうが疾った。

バン、ババババン――！

膝ひざで、腿ももで、腰こしで、肩かたで、肘ひじで、次々と魔動機を弾き飛ばしながら、集中された魔ま力りよくが右前ぜん腕わんに達した時、掌てのひらに組み込まれた魔術機関が前方に球状の

結界を作り、その内部の空間と〝獅子の心臓〟を直結した。

そして覇道は叫んだ。異界の無限熱量を必ひつ滅めつの術式へと変へん換かんする最後の符丁コード。その〝技わざの名〟は──

「レムリア・インパクト‼」

──廃はい墟きよと化したプロヴィデンスの街に、巨大な光球が発生した。

渇かつ望ぼうしてやまなかった無限の力を正面から叩たたき込まれ、邪神は苦く悶もんの叫びを上げた。神や魔をも滅し去る絶対否定空間と化した結界の中、超ちよう鋼こうの肉体は超高圧の術式に存在そのものを侵しん食しよくされつつ分解し、のたうつ触しよく手しゆの塊に、泡あわ立だつ粘ねん液えきの海に変わり、そして──

「……ッ！」

覇道は目を見張った。信じられないものがそこにいた。

「貴様は……‼」

次の瞬しゆん間かん、デモンベインの機体が軋きしみ、倒とう壊かいする鉄てつ塔とうのように崩くずれ始めた。

「──ミスター覇道！」

再び気球を展開したエイダが、骨格フレームの隙すき間まから手を差し伸のべた。

気球の浮ふ力りよくによってゆっくりと地表に降下するふたりの目の前で、魔ま術じゆつ師しの力によって組み上げられた鋼の巨きよ人じんは、瓦が礫れきの山へと還っていった。

+

かつて〝プロヴィデンス〟と呼ばれ、合衆国でも有数の古い歴史を誇ほこっていたその地域は、邪じや神しんズアウィアの蹂じゆう

躙りんとデモンベインの放った〝レムリア・インパクト〟のため、死の荒こう野やと化した。

〝レムリア・インパクト〟の結界が解けた後も、邪神の怨おん念ねんは半永久的に残留した。現在この土地を支配しているのは腐ふ敗はいと狂きよう気き、そして死の静寂。……この地は永えい劫ごうに呪のろわれたのだ。

デモンベインの部品の回収が終わると、覇道はこの地に至るあらゆる交通手段を遮しや断だんし、この一角を完全に隔かく離りした。また、かの大事件における邪神の存在は覇道財ざい閥ばつの隠いん蔽ぺい工作により秘ひ匿とくされ、この地の壊かい滅めつは魔ま力りよく炉ろの暴走事故として処理された。

もはや、ここを〝神の国プロヴイデンス〟と呼ぶ者はいない。

人はこの忌いまわしき地を〝十三番閉へい鎖さ区画〟、あるいは単に〝焼野〟と呼んだ。

+

アーカムへの短い帰路を全まつとうすることなく、アズラッドは死んだ。

血にまみれたその体は、老人のように干ひからびていた。限界を超こえる〝機神召しよう喚かん〟の果て、すべての生命力をデモンベインに注ぎ込んだ末の消しよう耗もう死しだ。

飛行船の中、横たえられた骸むくろを囲み、一同は無言だった。

「……あ、あの」

沈黙に耐え切れなくなったエイダが、アズラッドの枕まくら元もとに座り込むアル・アジフに声を掛かけようとした時―

「ハハハハハ！」

突とつ然ぜん、アル・アジフは笑い出した。

　小さな体に蓄ちく積せきした感情が噴ふき出すような──それでいて、虚うつろに乾かわいた笑いだった。

　アル・アジフは勢いよく立ち上がると、死んだ主あるじに向かって叩きつけるように言った。

「愚おろかなり、アズラッド！　魔ま物ものの咆ほう吼こうたる我、最強の魔導書【アル・アジフ】は、自らを手にする者すべての血を啜すすり、魂たましいを喰くらい、禍まが々まがしき力を蓄たくわえていくのだ‼　アズラッド、我わが主よ！　妾わらわを憎にくめ！　妾を呪え！　然しかるのち、邪じゃ悪あくの書に触ふれた己おのれの不明を、地じ獄ごくで悔くやむがよい‼」

「アル──」

　エイダが肩に掛けた手を振ふり払はらい、アル・アジフは覇道らに向き直った。

「見たか！　これが魔に関かかわる者の運命だ！　心せよ、覇道鋼造！　心せよ、オーガスタ・エイダ・ダーレス！　いずれ汝なれらすべてに、避さけられぬ死が訪おとずれ──」

「……ジ、フ……」

「□□!?」

　アル・アジフが振り返った。

　死んだはずのアズラッドの唇くちびるから、言葉が漏もれているのだった。

「……アル……アジフ……す……」

　アズラッドの言葉は、最後まで形になることはなかった。

　だが、わずかな唇の動きは、確かにひとつの言葉を形作っていた。

　……すまない、と。

　アル・アジフの顔が歪ゆがんだ。

「アル──!?」

　声を掛けるエイダから、それ以上に死せる主から逃にげ出そうとするように、アル・アジフはゴンドラの窓に走り、夜の空に飛び出した。

「──アル・アジフ！」

　覇道が窓から身を乗り出し、闇やみの彼方かなたに向かって叫さけんだ。

「アル・アジフ──君は決して独りではない！　いつか必ず、君と共に歩み、戦い抜ぬく者が現れる！　……必ずだ!!」

　覇道の言葉は、魔ま導どう書しよの化け身しんに届いたか、否いなか。

　紙束の舞まう音が、轟ごう然ぜんたる風音にまぎれて、消えた。

エピローグ

魔人光臨——
まなざすは決戦の刻

二年後──

『みなさーん！　アイスクリームはいかが!?』

エイダが拡声器で工場内に呼び掛けると、何十人という工員が作業の手を止め、わらわらと集まってきた。特に待ちかねたように飛び出してくるのは、電動服モーター・スーツを着込んだ重作業要員だ。

「はい、順番に順番に！」

エイダが容器とスプーンを配ると、クロフォードが押してきた風ふ呂ろ桶おけほどもある保冷ワゴンは、瞬またたく間まに底を見せ始めた。

「ひとつもらおうか」

そう言って手を伸のばした男に容器を手て渡わたしながら、旅装姿のエイダはぺこりと頭を下げた。

「ミスター覇道、長らくお世話になりました！」

この二年間、アーカムシティに留とどまり、デモンベインの解かい析せき機関や電動服モーター・スーツの改良に協力してきたエイダだったが、デモンベインの修復の目め途どがついたことを機に、ロンドンへ帰ることにしたのだった。

「──もしよければ、君にはずっとここを手伝ってほしいんだが」

エイダと並んでアイスクリームを食べながら、覇道は言った。

その言葉に偽いつわりはなかった。エイダには、機械技術に対する天才的なセンスがあるのだ。現在のデモンベインには、エイダの考案になる新技術が随ずい所しよに組み込まれていた。そもそも彼女がいなければ、プロヴィデンスの戦いでほぼ完全に解体したデモ

ンベインの再構成は不可能だっただろう。

「光栄です、ミスター。でも、私の本職はジャーナリストですから」

　エイダは胸を張ると、鼻息も荒あらくスプーンを振り立てた。

「これからは、この二年と半年の得がたい経験を糧かてとして、ロンドンから世界中を啓けい蒙もうしていきますわ！　──あ、もちろん守秘義務は遵じゆん守しゆいたしますので、ご心配なく」

「……私としては、あまり世間をかき回してほしくないんだがね」

「あら、そのご意見には同意しかねます、ミスター覇道」

　エイダは不意に真顔になった。

「あなたはなんでもご自分ひとりでなさろうとしますが、いつか来る戦いには、世界が一丸となって対処しなければなりません。──私は私なりのやり方で協力させていただきますわ」

「君が決めたことなら止めはしないが……」

　覇道は肩かたをすくめた。この娘むすめが言い出したら聞かないことは、二年半の付き合いでよく分かっていた。

「……ところで、汽車の時間は大だい丈じよう夫ぶかね？」

「ええ、この通り、ちゃんとベルをセットして──」

　エイダはスプーンを口に運ぶ手を止め、懐かい中ちゆう時計を取り出した。

「──あっ、止まってる!?　たいへん！」

　あわててアイスクリームを掻かき込んだエイダは、

「いたたたた」

　こめかみを押さえてうずくまった。

「大丈夫かね？」

「もちろんです──この痛みを乗り越えてこそ、文明の進歩があるのですから！」

　大おお仰ぎようなことを言いつつ立ち上がると、エイダはクロフォードに歩み寄った。

「やはり中央駅までお見送りを」

　旅りよ行こう鞄かばんを持ち上げながら言うクロフォードに、

「ありがとう、でもけっこうです。私はここで、みなさんにご挨あい拶さつしたかったんです」

　そう言って、エイダは鞄を受け取り、場内を振ふり返った。

「──それでは、ごきげんよう、ミスター覇道！　ごきげんよう、クロフォードさん！　ごきげんよう、みなさん！」

　エイダが手を振ると、気心の知れた工員たちがスプーンを振り返してくる。

「それから──」

　エイダは胸を張り、ぐっと視線を上げた。

「ごきげんよう、デモンベイン‼」

　鋼はがねの巨きよ人じん──外装が施ほどこされ、もはや〝鋼の骸むくろ〟ではない──に向かって手を上げると、エイダはくるりと踵きびすを返して工場を出て行った。

　小走りの足音がぱたぱたと遠のいていき、やがて、消えた。

「……行ってしまわれましたな」

　クロフォードの言葉に答えてか、否いなか、

「全世界が一丸となって……か」

　と、覇道は呟つぶやいた。

　超ちよう絶ぜつ的な力を持つ邪じや神しんでさえも、人の力で退しりぞけられる──ズアウィアとの戦いは、結果として、彼女にその

ような楽観的な印象をもたらしたのだろう。

　──だが、そうではない。

　たとえ何億人が束になろうとも抗あらがうことのできない、次元の違ちがうものが存在し得るのだ。

　ひとりの魔ま術じゆつ師しと、数十万人の市民の命と引き換かえに退けた邪神──あれが、ただひとりの魔ま人じんの力の一側面にすぎないとしたらどうだ。

　あの日、レムリア・インパクトの必ひつ滅めつの術式を浴び、邪神の超ちよう物質の肉体は溶とけ崩くずれ、蒸発し、跡あと形かたもなく消えた。

　だが、その昇滅の瞬しゆん間かん──覇道は確かに見た。

　邪神が金色の瞳ひとみを持つ少年に変へん形ぎようし、こちらに向かって微笑ほほえむのを。

「デモンベイン──我々は勝てるのか？」

　覇道は鋼の巨人を見上げた。

「あの怪かい物ぶつに……大だい導どう師しマスターテリオンに」

+

　ある夜──

〝焼野〟の中心部、ガラス状のクレーターのさらに中央に、はるか上空から降下してくるものがあった。

　肌はだは白、髪かみは金。天使のように均整の取れた肉体を空中に横たえた少年だ。

　ゆっくりと、ゆっくりと──何時間も、何日も、あるいは何年もの時間を掛かけて落ちてきた少年は、ついに地表に到とう達たつすると、羽う毛もうのように音もなく着地した。

仰あお向むけの姿勢のまま、少年は動かない。満天の星明かりと、それを映すガラスの大地。ふたつの星空に抱だかれながら、自らの金色の双そう眸ぼうに虚きよ無むを映し、ただ放心するのみだ。

コツリ、コツリ──

生きるものすべてを拒きよ絶ぜつするはずのこの地に、足音を響ひびかせ、近づいてくる者があった。

「──お目覚めですか、大導師様」

頭上から声を掛けたのは、黒い顔に眼鏡めがねを掛けた、使用人姿の女だ。傍かたわらには、昏くらい瞳を持つ少女を従えている。

少年は女を一いち瞥べつすると、さもつまらなそうに言った。

「……おまえか」

「ええ、私でございますよ」

女は少年の態度を気にする風もなく答えると、

「〝無限の心臓〟は取られてしまいましたけど、代わりに【ナコト写本】を見つけておきましたよ──ほら」

と言って、連れていた少女の背をそっと押した。

少女は一歩進み出たが、少年の表情をうかがい、立ち止まる。

少年は星空に視線を戻もどし、先ほどと変わらない、無関心な口調で言った。

「……手回しのいいことだ」

「そりゃあ、ね。あたしゃこれが仕事ですから」

くつくつと笑う女を無視して、少年は呟く。

「夢を……見ていたようだ」

「それはまた、どんな」

「代わり映ばえのしない戯ざれ合いの夢だったが……すこしばかり、楽しんだ」

　端たん整せいな口元にわずかな笑えみを浮うかべ、少年は半身を起こした。すると、少女が少年の傍らに座り、なめらかな胸に頬ほおを寄せた。

「それはそれは」

　女が相あい槌づちを打った。

「―ひょっとすると、今もまだ、その楽しい夢の続きかもしれませんよ。でも、ご用心、ご用心！　夢はいつ何時、とびきりの悪夢に変わるかもしれませんからね！」

　そこまで言うと、女は天を仰あおぎ、狂くるったように笑い始めた。

　少年はその哄こう笑しようを聞き流し、無意識の仕し種ぐさで少女の髪をなでながら、物もの憂うげな視線を地平線の彼方かなた―アーカムシティに向ける。

+

　ゴゥ―

　無人の地下工場に安置されたデモンベインの目が開き、機械の瞳がはるか彼方、〝焼野〟の一点を見み据すえた。

　が―やがて、その目は光を失い、再び閉じられる。

　今はまだ、その日ではない。

　物言わぬ鋼はがねの巨きよ人じんは、ただ黙もくして目覚めの刻ときを待つ―

あとがき

「『斬魔大聖デモンベイン』というパソゲーのノヴェライズ版の解説を書きませんか」

というお話をスニーカー文庫の編集さんからいただいたのが、たしか去年の十月ごろ。

そこで「あ、それ、なんか名前は聞いたことありますよ。ほほう、クトゥルーネタのロボット物。面おも白しろそうではないですか」てなことを言いつつ、いただいたソフトをプレイしてみたら、実際たいへん面白かったというかわしも巨きよ大だいロボットが書きてえ‼

──と、私の胸のロボエンジンに火がついてしまいました。

しかし、「ノヴェライズ版の解説」の依い頼らいなわけですから、当然ノヴェライズをされている方はすでにいらっしゃるわけで（スニーカー文庫・涼すず風かぜ涼りよう版『斬魔大聖デモンベイン』既き刊かん三冊、好評発売中です）。ぬう、そりゃそうだ！　ならば外伝はどうですか、こんな話！　こんな話！　てな具合に頼たのまれもしないのに企き画かく書しよを書いて送ったら、ゲーム本編のプレイステーション２への移植の流れに乗って──あるいは、原作の鋼屋ジンさんが「それ、読みたいし！」と言ってくださったので──スコッと通ってしまいました。言ってみるもんです。

このように、誰だれにとっても半ば偶ぐう然ぜんに成立した本書は、非常に強運な作品だと言えます。原作の『デモンベイン』自体がなにかと勢いのある作品なので、つられて運が引き込まれた感じですね。いやマジで。

そのようないきさつで執しつ筆ぴつされた本書は、原作ゲーム中の重要人物、覇道鋼造の過去と主役メカ、デモンベインの誕生に絡からむプレストーリーです。

『デモンベイン』本編の年代というのは、劇中では「架か空くうのいつか」風に表現されているわけですが、原イメージとしては「一

九三〇年前後？」という説があります。その一方でエレキギターとか核かくミサイルとか出てくるんですが、そこはそれ、いたるところで歴史が改変されているであろう『デモンベイン』世界では、「ナイアルラトホテップが持ち込んだ」と解かい釈しやくすればけっこうなんでもアリ。

　では仮に、本編の年代を「架空の一九三〇年頃ごろ」ということにして──その時代にはかなりの年ねん齢れいになっている（亡なくなってますが）覇道鋼造がまだ若かった頃、というと……えっ、ひょっとして一八〇〇年代？　そう、十九世紀ですよ。シャーロック・ホームズとかジュール・ヴェルヌとか吸きゆう血けつ鬼きドラキュラの時代ですよ。

　というわけで、十九世紀を舞ぶ台たいに、覇道鋼造と何代か前の〝マスター・オブ・ネクロノミコン〟を絡めつつ、鬼械神デウス・マキナアイオーンとプロトタイプ・デモンベインの活かつ躍やくをゴリッと描えがく──おお、こりゃイケそうだ！──と、基本的なアイディアはほとんどその場で出来たんですが、実はそのあとが大変で。

「『デモンベイン』＋〝十九世紀〟」。

　ということはつまり「〝巨大ロボ〟＋〝クトゥルー〟＋〝十九世紀〟」。

　この、あまりにも魅み力りよく的な題材にちょっと気負ってしまったといいますか、「どうせなら『クトゥルー≒怪かい奇き物』とか『スチームパンク≒歴史改変物』のテイストも入れたいなー」などと大それたことを考えてしまいまして。

　しかし、実はそれらの分野は「〝現実〟をしっかり描くことで、そこからの微び妙みような逸いつ脱だつを表現する」という、かなり地味に骨の折れるジャンルなのでした。……で、あげくに私、執筆にかかった時間のかなりの部分で、「十九世紀にアイスクリームってあるの、ないの？」で資料を探したりとか、そういうアホなことをしてたのでした。

　や、でもこれ、あんま意味なかったカモ。そもそも、このネタのオモロイところは「ぬおおおお、くらえ邪じゃ神しんッ！　科学の力、蒸気パーンチ‼」といった、言ってしまえば大味な部分にこそあるのであって、それが歴史的にあるいはクトゥルー的に「正し

い」かどうか、なんてことはどうでもよろしい。むしろ積極的に間ま違ちがってるくらいのほうがいい。まして、そういうところに嵌はまって原げん稿こうを遅おくらせたりしては……どうもすいませんでした。

　原作シナリオライターの鋼屋ジン様、企画初期及および進行の各段階で「バッチリっスよ‼」と景気良く言ってくださり、ありがとうございました。企画モノにおける「原作者ＯＫ」というのは水み戸と黄こう門もんの印いん籠ろうみたいなもので、これがどれほど心強かったことか。巻末の、熱のこもった解説もありがとうございます。や、しかし、そんなに褒ほめられるとハズカシイ。

　公式イラストレーターのＮｉ　　さんにも、スケジュールのしわ寄せを被かぶせてしまった上でなお、新規デザインをいっぱい起こしていただいたりして、えらい贅ぜい沢たくな一冊にしていただきました。ありがとうございます。ここだけの話、大おお幅はばに遅れていた執筆中に外伝オリジナルの人物やメカの設定がバンバン上がってきて「……やばい、ニトロさんが本気だ」と、かな～りドキドキしてました。

　その他ほか、ニトロプラス社、角川スニーカー文庫編集部等の関係者のみなさんにも、多々ご迷めい惑わくをお掛かけしてしまいました。申し訳ありません。

　そして最後に、『デモンベイン』のファンのみなさんに読んでいただくことで、この物語は完成するわけです──が、必ずしもここで完結するわけではありません。勢い余っちゃった人は、ＰＳ２ソフト『機神咆吼デモンベイン』をもう一度やるもよし、涼風涼氏によるノヴェライズの既刊を一巻から読み返すもよし。納なつ得とくの行くエンディングにたどり着くまで時の環わを巡めぐるのも、また一興でありましょう。

　──それでは私もまた、いつかどこかで。

古橋秀之

解説

鋼屋ジン

この本を手に取ってくれた貴方あなたへ。

貴方がもし、我が悪友たる『デモンベイン』のファンであるとしたら、自信を持ってお薦すすめしよう。この『機神胎動』は、まぎれもなく『デモンベイン』であり、正しく『デモンベイン』であり、『デモンベイン』を更さらなる境地へ導くものであると。

貴方がもし、我が同胞はらからたる『古橋秀之』のファンであるとしたら、やはり自信を持ってお薦めしよう。この『機神胎動』は、まぎれもなく『古橋秀之』であり、正しく『古橋秀之』であり、『古橋秀之』以外には決して描えがくことの出来ないものであると。

そしてもし、貴方がそのどちらも知らなかったというのなら──この出で逢あいに、ありったけの祝福を、あるいは呪のろいを。

言葉は魔ま術じゆつだ。物語は宇宙だ。『古橋秀之』が創つくる『デモンベイン』の宇宙せかいは、貴方の心を呪縛しばり、魅了おとし、その魂たましいに二度と消せない感動の烙らく印いんを刻むに違ちがいない。

古橋秀之、其そは比類なき魔術士──ただひたすらに唯一無二ユニーク‼

皆みな様さまお久しぶりもしくは初めまして。鋼屋ジンです。デモンベイン外伝『機神胎動』──ここに堂々の登場でございます。

しかも今回は、かの古橋秀之氏の手によるものです。すげえ。問答無用にすげえ。

ご存知の人はご存知かと思われますですが、そもそも『デモンベ

イン』自体が古橋氏の著作『ブラックロッド』シリーズに大きな影えい響きようを受けています。

　異形の都市ケイオスへキサ。金切り声を上げる祈き禱とう塔とう。怨おん念ねんが沈ちん澱でんする最下層市街の、明けない夜と終わらない祭り。霊走路ケーブルから漏もれ出す霊気を啜すする地じ縛ばく霊れい。巨きよ大だいな呪力増幅ブースター杖ロツドを携たずさえ、第三の眼グラムサイトで全すべてを見通し、その身にまとう威い圧あつ感かんで人ごみを割って歩く黒杖ブラツク特捜官ロツド。唸うなる黒こく杖じよう。超ちよう音おん波ぱの領域まで加速された圧縮呪文ノタリツク。放たれる『呪弾ブリツト』。圧唱クライ圧唱クライ圧唱クライ圧唱クライ圧唱クライ──。

　読む者を圧あつ倒とうする描びよう写しやの数々は混こん沌とんとして、しかし、組み上げられた物語は絶ぜつ妙みような美の均きん衡こうを見せる。それは混沌ケイオスという名の秩序アートです。もし『ブラックロッド』が無ければ、『デモンベイン』は今とは別の物になっていたのは間ま違ちがいないでしょう。

　繰くり返しになりますが、この『機神胎動』は、そんな『古橋秀之』による『デモンベイン』なのです──なんてトチ狂くるった企き画かくだ、これは。

　事の発ほつ端たんは、角川スニーカー文庫編集部さんが古橋氏にデモンベイン下巻（＝『明日への翼』）の解説をお願いしたところ、この『機神胎動』の企画書が返ってきた、というものらしいです。

　……いや、そもそもなぜ脈みやく絡らくも無く「解説に古橋秀之」という話が出てきているのかが謎なぞですが。それは何か。こっちの趣しゆ味み趣向は全て把は握あくしているとか、そういったことを言いたいのか。謀はかったね、スニーカー？

　何はともあれ、こんなお話をもらって断れるワケがない。何より誰だれより、自分が一番読んでみたい。

　プロットの段階で既すでに心が躍おどる。デモンベイン本編より過去、十九世紀後半。覇道鋼造若かりし頃ころの物語。スチームでオカルトがパンクな空気。邪じや教きようとの戦い。全世界を股またに掛かけ、未み踏とうの秘境に挑いどむ大冒ぼう険けん。デモンベインらしさをまったく損そこねることなく、しかし原作を大きく

逸いつ脱だつし、新しい世界を拡ひろげてゆく手しゆ腕わんは『サムライ・レンズマン』でも見せてくれた、古橋氏の真骨頂と言えるでしょう。

　こちらから言うべきことは、何も無いってものです。ハイ。

　このようにして、ようやく皆様のお手て許もとに届けることが出来た『機神胎動』でありますが、期待をまったく裏切らない内容であることは、既すでに読んでくれた方々には分かることでしょう。

　ワクワクしながら次のページをめくる喜び―本を読むという行こう為いの、最も根源的な喜びがこの本にはあります。

　それは子どもの頃、初めて読んだ冒険小説にどことなく似ているような気もします。

　そして、同時に古橋氏の濃のう密みつな描写は異様な鬼き迫はくを放ち、我々を圧倒します。

　融とけ合うそれらは、またしても混沌を産み落とし、混沌は秩ちつ序じよを構築し、新しい古橋秀之の世界を創造するのです。

　古橋氏の小説は作品ごとにまた別の顔を覗のぞかせ、『古橋秀之』自身の全ぜん貌ぼうは杳ようとして知れません。その底知れぬ魅み力りよくこそ、読者が愛する『古橋秀之』なのかも知れません。

　最後になりました。例によって月並みではありますが、デモンベインを題材にこのような素す晴ばらしい小説を書いて下さいました、古橋秀之様。そしてこの企画にＧＯを出して下さいました角川スニーカー文庫編集部様、そして全てのデモンベインファンと古橋秀之ファンの皆様に感謝を。

　鋼屋は果報者でございます。

カバー・口絵・本文イラスト / Ｎｉ

本文デザイン / タケウチユタカ + ｆｏｃｏ

(C) Nitroplus, DEGITURBO 2003, 2004

斬ざん魔ま大たい聖せいデモンベイン

機き神しん胎たい動どう

原作：鋼はがね屋やジン（Nitroplus）

著：古ふる橋はし秀ひで之ゆき

平成25年12月1日　発行

(C) Nitroplus, DEGITURBO 2003, 2004, Hideyuki FURUHASHI 2004

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『斬魔大聖デモンベイン　機神胎動』

平成16年8月1日初版発行

平成18年7月10日7版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER